

15

Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

わ-6-16



はたらく魔王さま！ 15

和ヶ原聡司

和ヶ原聡司 イラスト ■ ONIKU



電撃文庫

魔王、ついに
正社員に!!

……なるための登用研修に挑む!

庶民派クリスマスパーティーも開催!?

異色の大騒動な第15巻!

電撃文庫

はたらく魔王さま! 15

ライラから異世界の危機について話を聞いた魔王だったが、意中の正社員への登用研修が始まり、それどころではなかった。

魔王の留守中、千鶴と鈴乃はアラス・ラムスのためクリスマスパーティーを企画していた。初めてのクリスマスに浮かれて靴下を大量購入するエメラダや、梨香のことを気に掛ける声優、母親が世界の危機に関係していてもまったく気にしない子供たちをまとめあげ、パーティーを無事開催することはできるのか？

天使たちの過去、天界の悲劇も明かされ、庶民派ファンタジーにまさかの新展開も!? 真冬の大騒動な第15弾!

コミカライズその① 監修 塚越トモユクス

はたらく魔王さま!

原作 林 明生 監修 柳ヶ原隆司
キャラクターデザイン 029

①～⑧ 大好評発売中!

原作本編3巻(7巻)のコミカライズ! 美麗イラストによって描かれる魔王と勇者の庶民派生活も今後は必見!

全月読コミック豪華大賞
【毎月27日発売】にて好評連載中!





9784046657501

ISBN978-4-04-665750-1

C0193 ¥570E



1920193005707

ASCII MEDIA WORKS

ASCIIメディアワークス

KADOKAWA 発行 ●株式会社KADOKAWA

定価: 本体570円

※消費税が別記に記述されています



STORY

ライラから異世界の危機について話を聞いた魔王だったが、悲願の正社員への登用研修が始まり、それどころではなかった。

魔王の留守中、千穂と鈴乃はアラス・ラムスのためクリスマスパーティーを企画していた。初めてのクリスマスに浮かれて靴下を大量購入するエメラダや、梨香のことを気に掛ける声優、母親が世界の危機に関係していてもまったく気にしない達磨たちをまとめあげ、果たして千穂はパーティーを無事開催することはできるのか?

天使たちの過去、天界の悲劇も明かされ、庶民派ファンタジーにまさかの新展開も?





わ は は り と し
和ヶ原聡司

「和糖に迷い込められる和ヶ原の定播き」

和「わはは！どれが本物かわかるかい！」

相「仕事をするならどれでもいい」

和「ほ、本物は一人だけさ——」

相「仕事をする奴だけが本物だ」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま! 1～15

はたらく魔王さま! 0

原案
イラスト:029

この度は8周年おめでとうございます！

こうして今年も魔王さまに関われているのが光栄です。

2月10日の夕刊はカブドゥーンが主。



コミカライズその2

**はたらく魔王さま!
ハイスクール!**

作画 三嶋くろね 原案 和ヶ原聡司
キャラクターデザイン 029

全5巻好評発売中!

魔王と勇者が高校生になっちゃっ
た!? 「魔王さま」のキャラクターと
ちが、学園を舞台にラブコメ成分多
めでお贈りするパラレルスピンオフ
コミック!

15

Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

はたらく魔王さま

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

わ-6-16



はたらく魔王さま！ 15

和ヶ原聡司



電撃文庫

電撃文庫

はたらく魔王さま! 15

ライラから異世界の危機について話を聞いた魔王だったが、意願の正社員への登用研修が始まり、それどころではなかった。

魔王の留守中、千穂と鈴乃はアラス・ラムスのためクリスマスパーティーを企画していた。初めてのクリスマスに浮かれて靴下を大量購入するエメラダや、梨香のことを気に掛ける声優、母親が世界の危機に関係していてもまったく気にしない清原たちをまとめあげ、パーティーを無事開催することはできるのか？

天使たちの過去、天界の悲劇も明かされ、庶民派ファンタジーにまさかの新展開も？ 真冬の大騒動な第15弾！



9784048657501

ISBN978-4-04-865750-1

C0193 ¥570E



1920193005707

ASCII MEDIA WORKS
アスキー メディアワークス

KADOKAWA 発行 ●株式会社KADOKAWA

定価: 本体570円

※税別価格に消費税が加算されます





わ は は と し
和ヶ原聡司

「和ヶ原に迷い込められる和ヶ原の定播き」

和「わはは！どれが本物かわかるかい！」

和「仕事をするならどれでもいいわ」

和「ほ、本物は一人だけさ——」

和「仕事をする奴だけが本物だ」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま！ 1 ～ 15

はたらく魔王さま！ 0

著者
イラスト：#29

この度は1周年おめでとうございます！

こうして今年も魔王さまに関われているのが光栄です。

2月10日の夕顔はカブドゥーンが主。

はたらく魔王さま! 15

和ヶ原陽司

 電撃文庫

1070



はたらく魔王さま! 15

和ヶ原陽司

1070





DENGERI BUNKO



はなとろん

和ヶ原聡司

15



CONTENTS

序章 女子高生とOL、新年を迎える

P001

魔王、留守にする・1

P021

魔王、留守にする・2

P042

魔王、留守にする・3

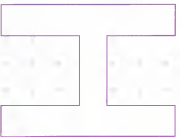
P063

魔王、留守にする・4

P083

続・女子高生とOL、新年を迎える

P105



ANZO *



URUSHIHARA





祝賀

女子校生がロケットで新年を迎える



静かな朝だった。

朝の光は、夜の闇の中から世界を動かす様々なものを浮かび上がらせる。

人であり、建物であり、道であり、町であり、それらを光の中で動かし、夜の闇を太陽の光で照らせとばかりに輝かせるものこそ、多くの人々の生活の光であった。

音は、光は、人の息吹であり、生活である。

だからこそ、その生活が消えた場所は、色のついた影のように捉えどころのないあやふやなものになってしまう。

例えばそれは、火の消えた竈。

例えばそれは、水の枯れた井戸。

例えばそれは、住む者のいない建物。

「嘘、だよね」

朝の光を吐息で震わせたのは、吐き出されたそれよりさらに震えた女の声であった。

「こんなので、嘘だよね」

「本当のことです」

震える声に対する声は、やはりかすかに震えていた。

いっそ朝の光すら凍らせるほど厳然と、目の前に見える現実を肯定していた。

「このアパートには、誰もいません」

「冗談キツいよ、そんな」

対照的な声色の二人の女性は、朝の光に佇む建物を見上げ、立ち尽くしていた。

東京都渋谷区笹塚に建つ、築六十年の本造アパート、ダイヤ・ローザ笹塚。

時計の針が午前八時を回ろうというのに、そこには一片たりとも生活の気配を感じる事ができなかった。

「みんな……いなくなっちゃったの？」

「はい」

「恵美の、お父さんは？ 今、ここの一階に……」

「いません」

「鈴乃ちゃんは？」

「いません」

「真奥さんは？ 漆原さんは？」

「……いないんです」

「…………西屋さん、は」

「鈴木さん」

くどくどと確認しようとする鈴木梨香を、佐々木千穂は厳しい声音で留めた。

「分かってください。今このアパートには……誰もいないんです」

「なんで……なんでよ!!」

千穂の告げる受け入れ難い事実をはね除けるように、梨香はいやいやと首を横に振った。

「そんなのって、ない。だって、この間まで、何も……そんなこと、誰も」

梨香は人の気配のしないヴィラ・ローザ旅館を見上げて消え入るようにそう言ってから、はつと成って千穂に視線を戻した。

「え、恵美は? 恵美は、いるんでしょ? 水稲町! 恵美はこのアパートには……」

「遊佐さんも、いません」

「嘘よ!!」

梨香の悲鳴も、千穂の強張った顔には毛筋ほどの波風を立てはしなかった。

「アラス・ラムスちゃんも、アシエスちゃんも、遊佐さんや真奥さんから離れられません」

狼狽える梨香に追い打ちをかけるように、千穂は畳み掛ける。

「みんな……エンテ・イスラに、行きました」

「そんな……」

エンテ・イスラ。

佐々木千穂と、鈴木梨香の、大切な友人達の故郷。

笹塚から、東京から、日本から、地球から、遠く離れた異世界の名。

日本に生きる、ただの人間の身の上である二人には、決して辿り着くことのできない星の海

の後方に、友人達が行ってしまったのだと千穂は告げている。

「みんな……いないの？」

「はい」

「でも……だって、真奥さんと、恵美、マダドの、仕事……」

衝撃の事態に泣き出しそうな梨香を、千穂は首を振って見上げた。

「お二人が、何もせずに職場を放置すると思いますか？ とつくにもう、大丈夫なようになってるんです」

安然とする梨香の脇を抜けて、千穂は白い息を吐きながら、アパートの中庭へと踏み込んだ。日陰になっている土の地面にはまだ朝方降りた霜が残っており、千穂のウォーキングシューズの下で冬の証がくしゃりと砕けた。

「真奥さん達だけじゃありません」

千穂は、ヴィラ・ローザ雑居の共用階段の下に立って、しばらく睨目してから、言った。

「エメラダさんも、ライラさんも、ガブリエルさんも、今……日本にはいません」

その事実を自分自身が受け止めきれないかのような、千穂の軋む声。

「イルオーン君も、天祿さんも、アバートの大家さんも、エンテ・イスラに」

「だって、だって、天祿さんとか、エンテ・イスラには関係ないんじゃないの？ 天使の人達とか、真奥さんや恵美の敵じゃないの？」

「アラス・ラムスちゃん、アシエスちゃん、イルオーン君達……エンテ・イスラに生きる「人」達にとって、セフィラの命のためには、もう敵も味方も人間も悪魔も天使もないんです」

千穂はそう言うとき、コートポケットの中から、革のキーケースを取り出した。

そこにはナンバーの連う三本のシリンドー錠がついていて、それぞれに小さなステッカーが貼りつけられ、「201」「202」「101」と千穂の手書きの文字が書いてあった。

「まさか、それ」

「真央さん達の部屋の鍵です」

千穂はそう言うとき階段を上がりはじめ、梨香も慌ててその後を追った。

千穂は二〇一号室の前で立ち止まり、呼び鈴を鳴らすことも、部屋の中に声をかけることもなく無造作に鍵を開けた。

「……やだよ、そんな」

梨香は、ドアの向こうの光景を見て、その場にへたり込んでしまった。

二〇一号室は、もぬけのからであつた。

人が留守にしている、というわけではない。

そこには部屋以外の何も無いのだ。

西屋が立ち働いていたキッチンには鍋一つ、おたま一つ残っておらず、津原のパソコンもパソコンデスクも無い。

千穂が、真奥達と、大切な友達と何度も開んだ食卓代わりのカジュアルコタツも無い。

真正正路、二〇一号室は六畳一間の空室であつた。

人の気配の無い、生活の痕跡の無い部屋はただただ寒々しく、天井のシミや柱の汚れ、畳の日焼けがより空虚さを際立たせる。

「私達は、戦う力の無い、普通の人間です。真奥さんも遠佐さんも、私達に被害が及ぶことだけは、避けたいんです。だから……」

エンテ・イスラ人類による、神討ちの戦いに参加することは、できない。

「でも……だからってこんなのもって、ないよ」

梨香の腕から、遂に涙が一筋こぼれた。

これほど時突で、理不尽な事態に耐えられるほど、今の梨香は強くなかった。真奥達の真実を知り、真実を知りながら彼らを愛した梨香は、千穂に問う。

「千穂ちゃんは……いいの」

「……」

「こんなの、納得できるの？」

責めるような口調になつてしまったのは仕方がない。

千穂は梨香よりも、ずっと彼らとの付き合いが長い。

彼らもまた、千穂のことを種族や世界の垣根を越えて大切にしている。

だからこそ、千穂ならばなんとかできたのではないか、と梨香が思ってしまうのはある意味当然のことだった。

梨香の問いに、千穂は一言、低い声で言った。

「……納得なんて……できるはず、ないじゃないですか……ぐすつ」

「……っ」

梨香はこのとき初めて千穂の口元が戦慄き、握った拳が小刻みに震えているのに気がついた。そうだ、千穂が納得しているはずがない。

だが、それでも千穂がこの事実を受け入れ、アパートの鍵を預かる選択をした過程にどれほどの決意と決心と悲嘆があったかは、察してやらねばならなかった。

「……ごめん、私」

「納得なんて、できません……」

千穂の静かな声が、生活の火の消えた二〇一号室に空虚に響いた。

異世界からの来訪者が、この地球上からいなくなった。

彼らは今、本来あるべき場所にあり、地球は、日本は、千穂と梨香の生活は、本来の姿を取り戻したはずだ。



だが「真実」を知るまで当たり前だった彼女達の日常は今、決して彼女達には受け入れられない世界へと変貌してしまっていた。

何故、こんなことになってしまったのか。

今日は、一月の三日。正月の松の内だ。

一年の幕開けとも言えるこの時に、千穂と梨香の目の前はただただ絶壁に閉ざされているように見えた。

何故、こんなことになってしまったのか。

千穂は力なく項垂れる梨香の隣で、真奥達の道が「神討ちの戦い」へと向かいはじめた十二月を思い出していた。

পাখি পাখি পাখি পাখি



「し……信じらんない」

「だ、だって……」

千穂は呆れ果てた冷やかな視線を受け止めきれずに、早々に顔を逸らしてしまった。

だが、千穂のクラスメイトであり部活仲間であり親友でもある東海林佳織は、逃がすまいと千穂にぐっと顔を寄せてきた。

「あのさ、ちよっと自分が聞いたことが信じられないからさ、もぉ一回言って？」

「あの、その」

「シフトが、どうなってるって？」

「ええっとぉ」

仰け反る千穂を、佳織は容赦なく追撃する。

「クリスマス・イブのー バイトのシフトがー どおくなってるってえ!?」

「あのですねえ、はい」

千穂は鼻息荒い佳織に、先ほど告げた事実をもう一度繰り返した。

「真真さん、仕事です。道佐さん、仕事です。私、家で家族と過ごします」

「ささちーあんたって子はああああ目」

「あがががが」

佳織は乗り出した姿勢のまま千穂の胸倉を掴んで思い切り揺さぶった。

「じゃあクリスマス当日は？ 二十五日はどうなの？」

佳織はもはや千穂の机の上に乗り上げてしまっている。

「ちょ、ちょっと離して、苦しい、苦しいって！」

千穂はなんとか佳織を振り払おうとするが、佳織は答えを聞くまで離すものかと言わんばかりに千穂を睨み上げてくる。

だから、余計に言い出し辛い。絶対に怒られる。

「真奥さんも遊佐さんも私も出勤……」

「何時まで!?」

「……………私だけ、夜十時の上がり。二人は、ラストまで」

「あんたって子はおあああああああああ!?」

絶叫が尻上がりになり、そのまま千穂の机を乗り越えて床に落ちかねない佳織を千穂は必死で押し戻した。

「だ、だってそれは仕方が……私、高校生だから夜十時までしか……」

「そこじゃない！ そもそもシフトの組み方がおかしい！ 何考えてんのささちー！」

佳織は口角泡を飛ばして指摘する。

「私今度という今度は心底びつくりしたよ？ この前の比じゃないよ?」

佳織は頭を抱えながら唸りっぱなしである。

「いいよ、この際家族とクリスマスってのはいいよ！　そういう子意外といっぱいいるし、ぶつちやけうちもそうだよ！　でもね、今回だけは、今度だけは、今年だけはそれやつちやダメなんじゃないの？」

「そ、そうかなあ……でもクリスマスからお正月にかけては人が足りなくなるって言うし」

「私はね！　今時の子とか、根性ないとか言われても構わないから、年末年始に出勤しなきゃいけない所でだけはバイトしないつもりだよ！　そんな日に店が開いてるのが悪い！」

これを心のどこかで暴論と思ってしまうのは、千穂が日本の便利な消費生活に毒されているからだろうか。

「いいか、ささちー、よく聞いてほしいのよ」

「は、はい？」

「ささちー、こないだ私に言ったね？　真奥さんから、例の話の返事が欲しいって」

「え、あ、う、うん」

教室の中で突然そんな話題を出されて千穂はつい周囲を見回す。

先ほどの佳織の曲芸的追求が終わったので誰もこちらには注意を払っていないが、この手の話題が大好物な年頃のクラスメイトにうっかり聞かれては大変だ。

もちろん佳織もそのことは重々理解しているが、それでも言わずにはおれないといった感じである。

「なあささちー。私達はジョシコーサーだ。分かるか？ ジョシコーサー。そろそろ大人の世界に憧れて人生にドラマチックなエピソードが欲しいと思う年頃じゃないかい？」

「う、うん、まあ……」

ドラマチックな出来事なら、この一年弱でもう並みのハリウッド俳優を飽く一触できるほど体験したと自負しているの、今更欲しいと思うまでもなく間に合っているのだが、とりあえず千穂は素直に頷く。

「それなのになんだねささちーは。ええ？ クリスマス・イブっていう、一年で最もそういうイベントが起こりやすい日に、なんだね、片思いの相手と恋敵を職場に放置してホームパーティーとは、あまりにも余裕がましすぎじゃないかい？」

「だ、だから遠佐さんは恋敵なんかじゃ……」

「うるさい外から見れば完全に恋敵じゃー」

佐織の目は据わり、まるで小姑のようにいらいと机の上を指で突きながら続ける。

「どーせまだ返事の催促だってできてないんでしょうが、それなら折角のクリスマス・イブに、決着をつけようって、普通だったら思うんじゃないの？」

佐織の言いたいことは分かる。

千穂だってそういうことを全く考えなかったわけではない。

だが、

「実は、かおに話聞いてもらった先月末にはもう今月のシフト出ちゃってて……」

「だあめだこりゃあああ！ ダメダメ！ もうダメ！ ささちーあんたもう芽え無いよ。何年待っても無駄無駄！ 諦めろ諦めろ」

「そ、そんなあ」

佳織は今度こそ頭を抱えた。

もちろん千穂だって、町がクリスマスの装いを始める十二月に、なんのかんのと理由をつけて真奥とクリスマスデートができたら、と思っっているのだ。

思っているのだが、相手は悪魔の王であり、日本でのクリスマスは千穂の知る限りまだ二回目。

昨年のクリスマスをどう過ごしていたかは分からないが、普通に考えれば仕事をしていたというのが最もありそうな話だ。

そして、今年の十二月二十四日と二十五日の両日、真奥はみっちりマダロナルドのシフトに入っているのである。

※

千穂が、真奥との関係を明確にする一世一代のチャンスを選んだのではないかということに

気づいたのは、不覚にも十一月末のこと。

とつくに十二月のシフトは提出し終えており、今更「クリスマス前後のシフトを変えてほしい」とは真奥にも店長の木崎にも言えない状態だった。

もちろん千穂の不覚ばかりを責めるわけにはいかない。

この九月から十一月といえば、恵美と芦屋がエンテ・イスラに囚われたり、真奥がそれを救うために親征したり、漆原が入院したり、恵美の母親が唐突に現れたりして、千穂のみならずエンテ・イスラに関わる人間は誰もが大混乱の巷にあったのである。

特に恵美などは、自分と世界に奇想な運命を背負わせた、記憶にも無い母との再会に心穏やかならぬ日々が続いていた。

そんな中、恵美の母、大天使ライラと浅からぬ因縁を持つ千穂の想い人である魔王サタンこと真奥貞夫は、表に裏に、恵美の心を軽くするよう立ち回っていた。

真奥と恵美の双方を大切に思う千穂にとってそれは喜ぶべき状況であつたのに、気がつけば千穂は、真奥に優しくされている恵美に嫉妬を覚えていた。

想いを告げた夏からの自分への態度は、良くも悪くも変化が無い。

またライラが真奥と恵美に持ちかけているある大仕事は、もし二人が受話するのであれば二人と千穂の距離を大きく引き離すものである。

異世界の想い人と自分の関係がどういうものか掴めなくなった千穂は、親友の東海林佳織に、

エンテ・イスラにまつわることだけは隠して思いの丈を相談した。

それが十一月末のことだ、その時点でもはやクリスマスデパートなどと浮かれたことを言っていられない状況にはあったのだが、千穂の知らないところで、さらに千穂を動揺させる事態が起こっていた。

恵美の親友であり、今は千穂と同じくエンテ・イスラの真実を知った鈴木梨香が、自らの想いを声屋四郎に告げたのである。

異世界からやってきた、悪魔大元帥アルシエルに、自分の心を打ち明けた。

そしてその想いは届かなかった。

千穂は、自分と同じように異世界の人を愛し、真実を知って尚も想いは変わらず、自分の欲する答えから逃げなかった梨香が眩しかった。

眩しくて、怖くなった。

もし、真実が最終的に自分を拒んだらと思うと、足が竦む。

そして真実が千穂の想いを受け入れない理由は山ほど想像できても、受け入れる理由は今のところ千穂の中に一つも思い浮かばない。

梨香は想いを拒まれて、それでも想いを諦められずに泣いていた。

自分に置き換えれば、真実の想いを拒まれたときにきつと立ち直れないだろう。

だから、もしかしたら無意識に、クリスマスのこととも考えないようにしていたのかもしれない。

い。

真奥から答えをもらったら。

きつとその答えは、真奥の未来の選択に直結している。

その未来が、真奥だけでなく、恵美や声屋、漆原や鈴乃ら大切なエンテ・イスラの友人達までも千穂から引き離してしまうものかもしれない。

小さな子供のようにな好きさな人から片時も離れたくないという思いが、千穂の行動を阻む。

だが、一方で千穂には全く別の、ある声が開いていた。

「話せるときに話しておかないと、きつと後悔するヨ」

ただだか十七年しか生きていない千穂には想像だにできない長い時間、大切な人と離れ離れになった少女、アシエス・アーラの言葉の重みもまた、千穂はよく理解していた。

佳織の言うことも、アシエスの言うことも、千穂にはよく分かる。

分かるから、千穂本人が、千穂自身が、千穂の心が、厚く雲が垂れ込める冬の空のように凍てついて動けない。

そんな、十二月も半ばのことである。

「そんなあじやないよ！　よくまああの流れからクリスマスを見逃したね本当！」

佳織の目には千穂が普通に恋煩いをしているだけにしか見えていないので仕方ないが、千穂にしてみれば「あの流れ」の中ではクリスマスなんか意識しようもなかったのである。

「今からでもなんとかならないの？」

もちろんそんなことなど知らない佳織は、ある意味ごく当然のことを質問する。

「クリスマスまでまだもうちょい時間あるしさ。今から代わりの人探すとかして、シフト変えてもらえないわけ？」

「ど、どうだろう」

佳織の言うことも考えなかったわけではない。

しかし自分が出勤する日を休みにしてもらう、ということなら可能かもしれないが、自分の都合で他人を休ませることは難しいだろう。

第一、クリスマス・イブの日に用があるから休んでくれなどと、他ならぬ千穂が真奥に言えるはずもない。

「あつ、そうだ！　お母さんには人が足りないって話して、私もクリスマスイブに出勤にしちやえぼ……」

「さきちーあんだこの期に及んでどうしてそういう発想が出てくる」

「えっ？　だ、だって……」

「だってじゃないわ！ ささちーが出勤しちやったら、いつも通りみんなでアルバイトして終わりでしょうが！ 第一出勤したって自分一人先に帰らなきゃいけないことには変わりないでしょ！ ああもうささちーあんた本当にやる気ある？」

「や、やる気って」

「みんなと離れたくないからつつたのはささちーでしょうが！ 今のささちー、完全にフェードアウトルートに突入してるよー」

「そ、そうなんだけどね、分かってるんだけど」

真奥達がライラの持ち込んだエンテ・イスラ人類救済計画に乗れば、かつて真奥が恵美を助けるに行つたときと、状況としては同じことが起こる。

即ち、千穂は真奥達にはついていけない。というより、行けない。

理由はごくシンプルで、いつものことながら千穂の存在は、戦場において真奥や恵美の足手まとい以外の何ものでもないからだ。

真奥や恵美が戦う相手は、色々な意味で人知の及ばぬ相手だ。

そんな場所に自分の身一つ守れない千穂が乗り込んでいけば、千穂を守るために真奥達が余計なリソースを割かねばならなくなる。

以前、千穂がイエソドの力を媒介にライラの力を借りたときは訳が違う。

ライラも表に出てきている今、千穂が真奥と一緒に戦っていい理由はどこにも無いのだ。

だが心のどこかで、住職の言うような「余裕」を感じていることも否めない。

今の千穂には、真奥がそう簡単にはエンテ・イスラに戻らないのではないかと考えられるだけの理由がある。

それは真奥に、ライラとは全く別方向、別次元の「仕事」の話が持ち上がっているからだっ

た。

「でもまあ、もうこの際全員予定が確定してるんだっただら足掻いても始まらないか。じゃあせめて大晦日とかお正月とか、そういうところは何か考えてるんでしょね？」

そして千穂は、真奥の現況に想いを馳せる余り、また素直に答えてしまう。

「あー、もしかしたらお父さんかお母さんの田舎行っちゃう、かも、知れ……かお？」

千穂は答えてから、住職が視線だけで千穂を射殺せそうな、悪魔より恐ろしい顔で睨んでいることに気づいた。

「ささちー」

「は、はい」

「怒るよ」

もう十分怒っている住職だが、一言も言い返せないので千穂は再び始まる住職のお説教を謹んで拝聴したのであった。

騒法が終わる頃にはもう空は夜の色であつた。

今日はアルバイトも無いので足早に家路につく千穂は、母からの買い物のメールを受け取り百号通り商店街の人ごみの中にあつた。

商店街も既にクリスマススカラー一色かと思いきや、お店によつてはクリスマスをすつ飛ばしてお正月カラーを前面に押し出しているところもある。

特に蕎麦屋や惣菜屋や鮮魚店などは、クリスマスよりも年末年始だろう。

千穂が母からの帰宅ついでのお使いメールを読み返しながら歩いていると、

「あ、佐々木千穂？」

人ごみの中から有り得ない人物の声がして、千穂は携帯電話を取り落としそうになった。

「え……ええ、ええええ!?」

千穂は振り返ると、自分の聞いた声が間違ひではなかったことに二重に驚いてしまう。

「う、漆原さん!! いつ外に出られるようになったんですか!?」

「凶悪犯が知らぬ間にシャバに出てみたいと言ひ方やめてくれない?」

千穂の素直な反応に漆原は顔を顰めるが、顔を顰める資格が漆原にあるかといえ、きつと無い。

「だって、漆原さんが一人で町中に放たれてるなんて、意外すぎて想像できませんし……!」

「本当に疑問なんだけども、お前の中で僕って猛獣とかゾンビとかそういう類なの？ お前が知らないだけで、最近の僕、結構一人で外に出てるし、アパートでも色々仕事するようになってるんだぞ」

「そうだったんですか……ご、ごめんなさい」

さすがに一人町中に放たれたは言いすぎたと千穂は素直に謝る。

冷静に考えると、漆原が真奥や戸屋を伴わずに一人で外を出歩く光景を見るのは、春先の、千穂が真奥達の真実を知った時以来だということに気づいた。

そして漆原が一人で外出しないのは、彼の怠慢な性格以外も原因があることも思い出す。

「っていうかそれ以前に、もう一人で外に出て大丈夫なんですか？」

「それは、僕がお前と知り合う前にやってたことのせいで、警察に見つかるとか心配しないでいいのかって意味に取ればいいんだよね？」

「え？ そ、そうですけど」

千穂の意図を入念に確認するような返事に千穂は首を傾げるが、漆原は恐ろしげに顔を曇めて言うのだった。

「ベルには、一人で外出したら最後、街中で遭難してアパートに帰ってこれないんじゃないかって言われたから」

「ああ」



「お前もちよっと納得すんなよ」

「す、すいません」

漆原が一人で外出していることを知った鈴乃なら、きつとそう言うのではないかと千穂の中では妙に納得できてしまい、またぞろ謝る羽目になる。

「まあとにかく、大丈夫かそうでないかって言うなら、実はまだそれほど大丈夫じゃないんだろうなとは思ってる」

「え」

千穂は漆原が言つてのけたことに、思わず固まった。

日本に来てヴィラ・ローザ管轄に居候するようになるまでの間、彼が強盗まがいのことを繰り返していた、という事実が、漆原が外出をしない大きな原因の一つであった。

千穂は詳細を知っているわけではないが、真奥や声屋の反応から察するに、監視カメラなどに映像が残る可能性がある方法も取ったことがあるようだ。

となれば、実は警察が未だに漆原を追っている可能性は皆無ではない、ということになる。

「でもまあ、お前が心配するようなことはもう無いと思うよ」

「そうなんですか？」

「うん。もう真奥のおかげで魔力もある程度好きに使えるようになってるんだもん。警察がいくら来たって怖くないし」

「ちよ、や、やめてくださいよ！」

漆原の笑みに凶悪なものを感じて、警察官の父を持つ千穂は慌ててしまう。

「ふふふ、別にこっちから日本の警察と事を構えるつもりはないけど、いざとなればそういう方法だって取れるし、そういう方法じゃないやり方だってどうにでもなる。最近新しいこと初めてちよっと気分や体の調子がいいんだ」

そういう方法がどういう方法なのか、そうじゃないやり方がなんなのか、新しい事とはなんなのか、確認するのが怖い千穂だが、これまでの魔界の悪魔達の行動から色々と察することはできる。

そして因らずも今の漆原の発言で、千穂がこの前から気になっていた、ある事についてのヒントを得ることができた。

「でもつまり、漆原さんも今、魔力を持ってるってことなんですよね？」

「僕「も」って？」

漆原の声は疑問形だが、表情は不敵なまま変わらない。

千穂もつい挑むような表情で、知っていることを口にした。

「芦屋さん、魔力を持ち歩いてますよね。悪魔型に戻れるくらいには」

「ああ、なんだ、お前知ってるんだ。芦屋が携帯買った日のこと」

「……一応」

千總ちそうにしてみれば、漆原うるしはらがその日のことをどういう形で理解しているのかも気になる。

「ん？ でもおかしいな。ベルはそのこと知ってる感じじゃなかったけど」

「私からは何も話してないですから」

「そうなの？ お前のことだから、僕らがエミリア達に内緒うちしとで魔力キープしてることを知ったら、不安にかられてすぐに相談するかと思つてた」

小馬鹿にするような漆原の口調に、千總はムツとした顔になる。

「人をスパイみたいに言わないでください。今の芦屋あしやさんがなんの理由も無くそんなことする人じゃないって、私ちゃんと分かつてます」

それ以外にも恵美や鈴乃に告げられない理由はあるのだが、それでも告げ口みたいなことをすると思われているとは心外である。

「へー。つてことは、エミリアももしかしたら知らないんだ。へー」

漆原は感心したのが、ただ相槌さうちを打ったのが、妙に癪さかに障さやる言い方で頷うなづきながら、自分の手を上げてみせた。

漆原の存在そのものに驚きすぎて気づかなかったが、そこには買物袋が握られており、中には惣菜やお菓子などが入っていた。

「まあ僕らにしてみれば、芦屋が鈴木梨香の前で変身してみせた時点でエミリアにバレるとは思つてただけど、別にバレたところでどうでもいいんだ。お前の言う通り、理由が無いわけ

じゃないし、こうして僕が買物に出てきてることとも繋がる話だし」

「……どういふことですか」

「んー」

千穂の問いに、漆原は突然きょろきょろと周囲を見回し、わざとらしく手近な場所にある喫茶店を発見してみせる。

「来たきやとおつて。寒いんだ」

「……」

千穂は一瞬呆れたように眉を蹙めたが、この国々しきこそいつもと変わらぬ漆原なのだと思い直し、不承不承頷いたのだった。

「なんてことはないよ。要するに真奥も片屋も僕も、まだまだライラのことを信じきれてないつてだけの話さ」

遠慮なく一番高いおすすめコーヒーを飲みながら、漆原は言う。

千穂は一番安いブレンドコーヒーにミルクをたっぷり入れながら尋ねた。

「ライラさんを信じきれていないって、どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味なんだけど。ほら、あいっずつと天界から追われてたわけだろ？ それでい

て真奥やエミリアが警戒するレベルで脳が甘いじゃんか」

「まあ、そうですね」

千穂ですら即座に領いてしまうほどには、ライラの行動には色々な意味で敵が多い。

「天界が閉じられた、グレートで行き来できないって話も、大家さんやガブリエルがそう言うてるだけで、僕らが確認したわけじゃない。閉じられただけで、敵がこっちにとどまってるってないとも限らないし、向こうからは来ることができる一方通行かもしれない。僕らはライラが自分の周囲を万全に均しているなんて思ってるじゃないんだ。だからこの間ライラん家に行くつととき、僕も芦屋も一緒に行かなかっただろ」

「そういえばそうでしたね」

真奥達から信用を得るために、ライラが練馬の自宅を公開した日。

芦屋と漆原は、それに賛同しなかった。

その前日に梨香が芦屋に想いを告げて玉砕した、ということがあったため、千穂としてもなかなかその理由を聞き辛かったのだが……。

「僕自身は実際ライラの家に興味なかったんだけど、そもそも真奥が言い出したことだし」

「真奥さんが？」

「僕らに、万が一のために残れって。この万が一ってのは例えば、真奥やエミリアが一週まわりに動いてるときに、マドロナルドとか、鈴木梨香とか、それこそお前の家とかが『敵』に襲わ

れたとしてもすぐに対処できるようなってことな」

「……そうだったんですか」

「あと、タイラのあのどうしようもなさが全部真奥やエミリアをその気にさせるための演技かもしれないし、敵はラグエルやカマエル達だけとは限らないし」

「え？」

漆原の言う意味がいまいち掴めない千穂だが、漆原は平ば馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「エミリアの母親ってだけで、なんでタイラが善人だって蘭長が成り立つ？ おかしいだろ？」

僕が言うのも変だけど、佐々木千穂、お前にとって今まで善人の天使っていたか？」

「いません」

これだけは、残念ながら即答できる。

「だろ？ 僕が言うなってると思うかもしれないけど、天使の性善さに關して僕は真奥や高屋よりもよく知ってる自信あるからさ。あのタイラのぼんやりした空気読めない性格が全部演技で、お前の家族やらマダロナルドの店長やら鈴木梨香やら、真奥やエミリアにとって大事な人を人質に取って、無理やり仕事をやらせるために手勢を伏せてる可能性もゼロじゃない」

手勢を伏せているとは大袈裟な物言いだが、確かに漆原の言うことを理解はできる。

「漆原さんはどう思ってるんですか？ タイラさんのこと」

「どうって？」

漆原は、分かっているのかいないのか、聞髪入れずに問い返してくる。

なので千穂も、聞きたいことを具体的に返さざるを得ない。

「その……ライラさんやガブリエルさんは……最終的には真奥さん達に、例えたいんですよ、あの、ええっと……」

「ああ、聞いたんだっけ、僕の親のこと」

「……………はい」

ストレートに言われて、千穂は少し詰まるが、

「僕のこと少しは尊敬する気になった？」

「は、はい」

あまりに唐突に話題が変わって、千穂は呆気にとられる。

何故今の話の流れで、千穂が漆原を尊敬する気になる話になるのか。

「僕が超血統書付きだって聞いたんでしょ？ 母親、神。天使第二世代筆頭。人間だったら恐れ多すぎて正面から顔も見れないんじゃない？」

どこまで本気なのか分からないが、とりあえず千穂は義務として答えた。

「バカなこと言っていないで質問に答えてください」

「お前そういうとこエミリアよりも遠慮ないよな」

千穂の即答ぶりに漆原もさすがに降参した。

「なら答えるよ。正直勝手なすれ違って感じ。ライラが見た目通り誠心誠意真奥やエミリアに頼み込んで、真奥達がやるって判断するなら、好きにすればいいんじゃないって思う」

「いいんですか？　だって……」

「くだいな、分かってるよ。ライラとガブリエルと、他に誰がいるかも分からないけど、天界の一部が僕の生みの親を殺そうとしてるのなんか」

表情も口調も感情の起伏もまるで無いまま、ごく自然に漆原はそう言いさる。

「それとも何？　僕が突然母親への愛に目覚めて涙ながらにあいつらを止めるとか、母親を改心させるために自分も改心して積極的に働くとか思ってる？」

「いえ、改心して働くとは全く思ってませんが、そこまで気にしないっていうのも意外でした」

「お前らいつだって僕に対して言っていることと悪いこと間違えてる。今度アパートに来たら驚けばいいんだ……」

漆原は千穂の返事には顔を曇らせる。

「はあ……。まー、これは嘘でもなんでもないけど僕ね、親のことはほとんど覚えてないんだ。

天界を統べるイグノラが母親だってことは情報としては知ってるしかすかに記憶もある。でも、そのことが今の僕の人生に何か影響を及ぼすかって言ったら、全く及ぼさない」

「そんな……」

家族との関係が極めて良好である千穂には全く信じ難い話だが、漆原の表情からは一切の虚飾は感じられなかった。

「親だから、子だから理屈抜きの情が湧くなんて次元で生きてないもん僕ら。魔界の悪魔はそもそも邪魔なら親兄弟だって平気で殺すしね。今のライラが正直に全部話してるなら、うちの親の不始末の責任を勝手に負ってくれてご苦勞様、くらいにしか思わない」

天界の天使達を纏める「神」の地位にある存在イダノラが漆原の母親である、という情報は、真奥や千穂や恵美が初めてライラの住む練馬のマンションに行った日に、ガブリエルによって千穂達にもたらされた。

イダノラがアラス・ラムス達セフィラの子達にした仕打ちや、今もなおエンテ・イスラに対し継続している恐ろしい行動もまた知らされたが、戦うことのできない千穂がまず考えたのが、漆原の心情だったのだ。

だが、こうもすがすがしく心配を杞憂扱いされても、それはそれで困る。

「まあそうだね、親子の情なんでものを無理矢理持ち出すとしたら……うーん、なんだろ」

しかも、真剣に悩んで出した答えが、

「僕のことを魔界に一人で放り出してくれたことや、その後特に探しに來なかったことを恨もうと思えば恨む……くらいかな。でもなあ、魔界生活楽しかったからなあ。あのままそれこそ生きたゾンビみたいな連中が大半の天界にいるよりはよっぽど良かったと思うし、実力行使に

出たいと思うほど恨んでるかつて言われるとなあ……というか、そもそも昔のことすぎて、真剣に覚えてないことの方が多いしなあ」

これである。

「覚えてないって、そんな」

「じゃあ聞くけどさ、お前、幼稚園くらいのこととか、小学校低学年くらいに起こったこととか、友達や親との会話をきちんと何もかも余さず全部覚えてたりするのかな」

「え、そ、それは……」

「僕こう見えて真奥の何倍も長く生きてるんだ。その間に魔界で勝手気ままに生きるのに楽しくも忙しくて充実した年月だったし、そんな大昔のことまで覚えてらんないよ。僕にとってイダノラは、血の繋がりのには母親かもしれないけど、お前に置き換えれば、敵の正体は江戸時代の先祖だった位の感覚でしかない。そんな大昔のことより、大事な今は今だろ」

その大事な今の九瀬を部屋に引き籠^{こも}って真奥の脛^{すね}を醫^いっている漆原には言われたくないが、それでも漆原が本当にイダノラに対してなんら感情的になっていないことだけはよく分かった。過去は過去だ。それが動機にはなる奴^{やつ}もいればならない奴^{やつ}もある。そこで僕は当時の関係者の中ではならない奴筆頭で、ライラがなる奴筆頭ってだけのことだろ」

「そういうものですか」

「そうだよ。お前らがライラやガブリエルからどこまで聞いたか知らないけど、その顔見ると

大体聞いたんだろ？ 大魔王サタンの災厄とか、イダノラがやったことの全貌とか」

「ええ……まあ」

およそ練馬駅構内のモズバーガーでボテトをつまみながら聞くような話ではなかったが。

「正直僕には知ったこっちゃないし、僕がそんなんだから、当時生まれてもない声屋や真奥なんかもっとじゃないか？ 不老不死になつてるかもしれないエミリアの方がまだ色々動機はあるかもしれないけど、正直ここまで来ても僕は真奥がライラの話を受けるとは思えない。というか、だから僕と声屋が魔力抱えて外うろついてるつてのもあるもん。煮えきらない真奥に痺れ切らして、ライラがバカなことしないか警戒する意味でさ」

「そ、そうなんですか……」

漆原の言うことは分かるが、どういうわけか千穂の中には釈然としないものが残る。

だが、何が釈然としないのかは、よく分からない。

そんな千穂の心中を見抜いているかのように、漆原は言った。

「それに、その方がお前も都合いいんじゃないの？」

「え？」

「お前は真奥やエミリアに、あの話受けて欲しくないんだろ？」

「そ、それは………はい、正直、嫌です」

わずかなためらいの間に、脳裏には色々な思いが駆け巡った。

ライラの話を全て信じるなら、真奥や恵美をエンテ・イスラに行かせたくないという想いは、そのままエンテ・イスラやそこに住む人々のことなどどうなっても構わない、ということでもある。

千穂の中の「いい子」の部分は、それを良しとしてはならないと叫び続けているが、今の漆原に、気持ちの部分で嘘をついたところで仕方がない。

妙なところで鋭く、千穂に対して気遣いを一切見せない漆原に嘘を見破られれば、聞きたい話も聞けなくなる。

「私は、単純に真奥さん達と離れたくありません。だって、どうして真奥さん達が、自分の生活を捨ててまでそんなことに関わらなきゃいけないんだって、思います」

「だよね。僕も嫌だもん。何が悲しくて今のこの快速で変わらない日常の生活を捨ててまで遠くへ命がけで働きに出なきゃいけないんだよってね」

その快速な日常の生活は漆原以外の色々な人物の不断の努力で成立しているものだが、それを指摘することをこの瞬間だけはグッとこらえた。

「もちろんそれは私一人のわがままで、真奥さんや遊佐さんがそうと決めたなら、それをやめさせる権利は私には無いですけど、それでもライラさんやガブリエルさんの言うことは、勝手すぎます」

「全く同意。自分の尻は自分で拭くもんだもんね」

これまた漆原には以下略だが、結局はそういうことなのだ。

自分達で尻を拭えないから、世界や人類が減じるだのなんだのと、危機をあり立てて真奥や恵美の善意に鎖をつけて引つ張り込もうとするやり方は、やはり承服できない。

先日モズバーガーでガブリエルが語った「全ての元凶」の物語は、千穂達が抱く様々な疑問や謎を氷解させた。

しかし結局それも事のあらましを語られたに過ぎず、それを聞いたことによってライラやガブリエルが真奥達にやらせたい仕事に変化があるわけではない。

あの日以降、千穂はライラやガブリエルとは顔を合わせていない。

だが、あの日に少しでもライラとの距離を縮めた恵美の様子を見ると、最初の膠着状態から話が一歩前進しているようにも見える。

真奥はこの件でも旗色を明らかにしていないし、千穂はこの十二月、様々な不安を拭えないでいたのだが……。

「それにお前の方がよく知ってるだろうけど、これから真奥、忙しくなるんだろ？」

「あ、はい、そうですね」

佳織と話したときにも思ったように、今の千穂には、真奥がライラの話を飲まないのではないかと予測する強力な材料が降って湧いているのだ。

それは日頃の真奥をよく知る者なら、絶対にそう考えるであろう話であった。

「真奥が忙しくなれば今のエミリアは結構影響受けそうだし、そもそもまだライラとエミリアが和解したって話は聞かないし……少なくともお前の寿命の感覚だったら、十分余裕できたと思つていいんじゃないかな」

数百年生きてゐる真奥のさらに何倍も長く生きたと主張する漆原に言われると、妙な説得力がある。

確かにもし真奥が千穂と漆原の想像通りの選択をすれば、最低でももう二、三年は現状維持が続くのではないかと思われるのだ。

それだけの猶予が生まれれば、千穂も年齢を重ねて大学生になる。

今より身の振り方の選択肢は大きく広がり、心に余裕も生まれるのではないかと思う。

「真奥はずっとそれ目標にしてきてたんだろ？ それを放り出してどこかに行くなんてことは無いと思うよ」

「私も……そう思います。遊佐さんも、きっとそう考えるんじゃないかと」

千穂はそう言いながら、靴の中から手帳を取り出し、マグロナルドのシフト表を広げる。

表中の真奥貞夫のラインの中で、今日から数日間、入っているはずのシフトが修正されている箇所があった。

「真奥さん、ずっと頑張ってきたんですもんね」

千穂は愛おしげにその修正箇所を書き込んだ文字を指でなぞった。

そこには千穂の手書きで、

「真美さん、速に正社員登用研修！」

と書かれていたのだった。

※

千穂が漆原と出会ったのとはほぼ同時期。

夕方十七時の上がり時間が迫っていた道佐恵美は、今日最後の接客相手となるであろう店の自動ドアをくぐった人物の顔を見て、意外そうに眉を上げた。

「いらっしやいますー……こちらのカウンターにどうぞ」

手を掲げて示すまでもなく、相手は恵美のことを入ってきたときから認識していて、真っ直ぐカウンターへとやってきた。

「照り焼きバーガーセット、ポテトとホットコーヒーを、どちらもしサイズで」

「かしこまりました」

恵美はオーダーをレジに入力し、金額を告げて、千円札を受け取り、お釣りを返す。

程なく注文通りのものがトレーにセッティングされ、それを受け取った男は、恵美には何も言わずに大人しく席に腰掛けた。

それきり、こちらに視線も寄越さない。

「珍しいわね」

夕食時に芦屋四郎がマグロナルドにやってきて腹に溜まるような注文をする。

はつきり言って異常行動だ。

夕食時に一人での外食。しかも値段の高いしサイズセット。

さらにはカウンタートーブルで食事もそこそこにスリムフォンをいじりはじめるのだから、これはもう芦屋の姿に畏服した悪辣な天使だろうと思うくらいに、恵美の知る芦屋像とかけ離れた行動である。

「さえみー、そろそろ上がリじゃない？」

「え？ あ、そうですね」

首を傾げていると、後ろから先輩クルーの大木明子が声をかけてきた。

「あー……上がったら、晩ご飯食べてっていいですか？」

恵美は十七時を少し回った時計を見上げながらバイザーを外し、ついでカウンタートーブルで黙々とスリムフォンをいじる芦屋を視界の端に捕らえた。

「そう？ いやあ今のうちに從食で打っちゃったら？」

「そうさせてもらいます。えっと、ベーコンベツバーバーガーのセットを、サラダとオレンジジュースをお願いします」

「おっけー。やっといたげるから、上がつて着替えてきちゃいなよ」

「ありがとうございます。お先に失礼します」

恵美は明子に札を述べてから、足早にスタッフルームに下がり、着替えながら西屋がやってきた理由を色々と推測した。

「魔王や千穂ちゃんが今日、店にいないことは知ってるはずよね。かといって私に用がある感じでもないし……」

先ほど西屋は確かに恵美と目を合わせたか、そのときレジに立っているクルーが偶然恵美しかいなかったからそうだっただけかもしれない。

だがいずれにせよ、西屋がなんの理由もなくふらりとマダロナルドに食べに来る理由は分かっていなかった。

着替え終わってフロアに戻ると、恵美のオーダーを揃えておいてくれた明子の手招きしてきた。

オーダーの支払いを従業員用の三割引きで済ますと、恵美は少しだけ席を探すふりをしながら、西屋の正面に腰掛けた。

マダロナルドのカウンター席は向かい合った客同士の視線を遮る飾りプレートが設えられているが、西屋も正面に恵美が座ったことは分かっているはずである。

だが、プレートの隙間からわずかに見える西屋は、特に何かするでもなく、のろのろとした

動きで時折ポテトをつまみながら、スリムフォンに視線を落としたままだ。

「……」

恵美もごく自然な動きでサラダのカップの蓋を外しながら、フォークでサニーレタスを刺しつつ様子を窺う。

すると、

「なんの用だ」

声屋の方から声をかけてきた。

店内は空いていてカウンター席には声屋と恵美以外いないため、声もなんとか聞こえる。

「それはこっちのセリフなんだけど」

ブレイトの隙間からでは声屋の表情は窺い知れないが、向こうからも恵美の表情は見えないはずだ。

「こんな時間にマダドに来るなんてどうしたの。そろそろ夕食の時間なんじゃないの」

「今日は、全員バラバラの夕食だ」

「へえ、珍しいこともあるものね」

珍しいどころの騒ぎではない。

真奥に限って言えば、今日の夕食を外で済ますであろうことは恵美にも想像できた。

先月シフトが出た時点では出勤扱いになっていた真奥だが、後から入った予定によって今日

は店長の木崎真弓と共に、店を留守にしている。

その間の店舗管理には真奥に次ぐベテランクルーである川田武文と大木明子が共同で当たることになっていたが、とにかく芦屋が真奥のその予定を知らないはずがないのだ。

「ルシフェルに好き勝手させてるわけ？」

「貴様には関係あるまい」

それはそうなのだが、魔王城の経済状況を理解する一人として単純に心配だし、第一漆原の好き放題を放置する芦屋など芦屋ではない。

「知り合いが普段と全然違う行動したら、心配の一つもしたくなるわよ」

「ほう、貴様は我々の生活の全てを把握しているつもりか」

「全てとは言わないけど、九割方把握してるわよ。今日のあなたの行動がおかしいと思うくらいにはね」

「客のプライバシーに干渉するな。貴様は店員だろう」

「あなた達がそうやって世間の常識を盾にするときって、大抵私やベルに知られたくないことやつてるときよね。良くも悪くも」

「……」

芦屋は少しだけ、不機嫌そうに黙る。

「まあ、いいわ」

恵美はそこで、追及の手を止めた。

「なんだか知らないけど、確かにお客様に対して失礼な物言이었다わ。ごめんなさい」
「む」

「私はこれ食べたたら爆るから、ゆっくりしていつて」

「……」

それからしばらくは、恵美が食事をする音だけが続き、それもすぐにやんだ。

恵美が立ち上がるとゴミを捨てるためにダストボックスにトレイを持っていくとしたときだった。

「遵佐」

その背に、音屋の声がかかった。

「最近鈴木さんに会ったか」

「っ！」

恵美は息を吞んで、振り返ってしまふ。

だが、音屋はカウンターに向いて恵美に背を向けたままだ。

「……二週間くらい、会ってないわ。メールは……したけど」

「そうか。ならいい」

「梨香がどうかしたの」

聞う声に陰が籠ったりしなかっただろうか。

恵美は言ってしまったから、その問いを発したことを後悔した。

これでは芦屋と梨香との間に、何があったか知っていると云ったも同じことではないか。

恵美は、梨香が芦屋に想いを告げるその前の目に梨香から直接相談を受けていた。

そして、梨香と芦屋が二人で外出し、今芦屋の手にあるスリムフォンを見繕ったのが他ならぬ梨香であることを知っている。

何より、恵美は梨香の告白の「結果」も知っている。

恵美が正確に知らないのは「過程」であつた。

だが、二週間梨香と顔を合わせていないこと。

梨香から送られてきたメールの内容が、

「やっぱダメだったわ。色々ありがとね」

だったこと。

そしてそれ以降、恵美は梨香と連絡を取れずにいることで、霧の中にいるような不安を抱えていたのは確かだ。

芦屋は恵美の返事をどう受け取ったか、問いかけには答えず、黙っている。

用は済んだ、ということなのだろうか。

恵美の中で、様々な思いが口をついて溢れそうになる。

一体梨香と何があった。

梨香に何をした。

梨香に何を言った。

できるなら、今すぐ芦屋を店の外に引っ立てて先日の顔末を一から問いただしたい。

だが数瞬の後、恵美はそれらの感情をぐっとこらえて、芦屋から視線を外し店を出た。

「あ、重佐さん上がりだっけ。お疲れ様。気をつけてねー」

「はい、お先に失礼します」

入り口で、デリバリーから帰ってきた川田とすれ違い、恵美は小さく会釈して店を出て、そのままもう芦屋を振り返ることはしなかった。

暖房の聞いた店内から出ると、もうすっかり暗くなった町の冷たい空気が頬を刺す。

グイラ・ローザ管絃の鈴乃のところに預けているアラス・ラムスを迎えに行くため、恵美は一人甲州街道をとぼとぼと歩き出した。

外気で頭が冷えたおかげで、先ほど芦屋に梨香のことを聞かずに出てきた自分の判断は正しかったのだと思うようになる。

梨香が芦屋に想いを寄せていることは、恵美もよく分かっている。というか、気づいていなかったのは芦屋本人くらいのものだろうか。

その梨香から「やっぱダメだった」と来れば、結論は一つしかない。

芦屋が千穂に対する真実のように返事を先延ばしにしたり、梨香を受け入れたりすれば、梨香がまた自分のところに即時相談を寄せるであろうことは、自惚れでなく想像できる。

そもそも告白できるかも分からない段階で、恵美に自分の気持ちを許してくれるかどうかを聞きにきたほどだ。

梨香は勇気を出して想いを告げたが、芦屋はそれを拒んだのだ。

となれば、恵美にできることなんてこれ以上ないし、これ以上、やっていいこともない。

「私は……どうなってはしかったんだろう」

梨香に傷ついてほしくない。

でも、芦屋が梨香を幸せにできるとも、する意志を持つとも思えない。

「はあ……」

結論の出ない心の底から吐いた白い息は、夜空に千穂の顔を染めた。

「これは、私の勝手よね」

梨香と芦屋がダメで、千穂と真実ならいいのか。

恵美は心のどこかで、梨香の望みが最初から叶わないと断じていた自分に嫌気が刺す。

真実は無常不滅で、先日ライラや鈴乃や芦屋に指摘されていた通り、千穂に対して非情になりきれない。

一方の芦屋は、かつてのように人間を一方的に毛嫌いすることこそなくなったものの、自分

はいつかエンテ・イスラを征服しに戻る悪魔、という使命感から常にこの世界に対する一線を守っていた。

少し前の自分なら、声屋が梨香を拒んだら、梨香には悪いがこれで最終的な討伐の引け目が一つなくなる、くらいにしか思わなかっただろう。

だが今は違う。

一個人として、真実を、声屋を、津原を見てしまった遊佐恵美は違うのだ。

かつての勇者の魂の残滓は、何を気にする必要があるのかと言う。

だが今の遊佐恵美は、どこかで梨香の気持ちを傷つけたであろう声屋に憤りを覚えていて。

「勝手、よね」

勝手だ。極めて身勝手だ。

今まで彼らに対して数々に「死ぬ」だの「いつか殺す」だのと後先考えない罵声を浴びせてきた自分が抱いていい感情ではない。

だが事実として、恵美の大切な友が二人、世界と種族の垣根を越えた想いを抱いていることだけは変わらない。

纏まらない、答えの無い心のざわめきに顔を撃めたとき、恵美は行く先の交差点に見覚えのある人影を発見した。

「……素いのに」

つい口をついて出た言葉には、少しのわずらわしさと、諦めと、自分でも分からないわずかな嬉しさがあつた。

喜び、などという上等な感情ではない。ごくごく幼い、嬉しき、だ。

「あ、あら。エミリア、お、お帰りなさい。お仕事、お疲れ様」

ライラだった。

手にスーパールのビニール袋を持ったまま、一体いつからここに立っていたのだろうか。

あの日以来、時折こうして恵美の帰り道で待ち伏せしているのだ。

意図は明白で、ライラの練馬のマンションに行ったあの日にわずかに縮まった距離を、もっと縮めたいのだろう。

だがその不器用さたるや、それまでライラに並々ならぬ嫌悪感を抱いていた恵美をして苦笑してしまうほどであつた。

恵美は毎日この道を使うわけではない。

最近では真実や千穂以外の先輩クルーとも仲良くなつて、上がりのタイミングによってどこかでお茶をすることもある。

アラス・ラムスや鈴乃や父ノルドのために、買い物に寄ることもある。

恵美に会いたいならノルドの住むヴィラ・ローザ邸一〇一号室で待っていればいいものだが。

「一体何時間ここに立ってたのよ」

「え？ い、いいえ、そんな私、今日はお父さんのところに行く約束で、途中で買い物したら偶然……」

「鼻。真っ赤よ。その袋、笹塚駅より向こうのスーパーの」

「あ……っ！」

ライラは思わず自分の鼻の頭を押さえる。

「寒いんだからお父さんの部屋にいればいいのに」

「だ、だって、それだとあなたと二人で話ができないから……」

ライラが自分との距離に悩む生き別れの母親だからまだいいが、論理は完全にストーカーのそれだ。

「……貸して」

「え？ あっ！」

恵美は小さくため息をつくとき、ライラの手からスーパーの袋を取り上げた。

「え、エミリア、それ結構重い……」

「これくらい、ベルやアルシエルに付き合っって買い物してたら大したことないわ」

そう言うとき、ライラの返事も聞かずに帰り道を歩きはじめた。

ライラは一瞬だけ呆気にとられたが、我に返って慌てて娘を追ひ、少しだけ遠慮がちに横に

並んでそのまましばらく歩く。

その間ずっと声をかけあぐねている気配が感じられたので、恵美は遂に問いかけた。

「どうなの。あれから部屋、散らかしたりしてないでしょうね？」

「えっ？ え、ええ、ちゃんと片付いてるわ！ まだ！」

「勘弁してよ、本当」

恵美は少しだけ口の端を上げ、すぐに真顔に戻る。

まだまだ、ライラの前では素直に笑えない。

以前、ライラが日本で生活している実態を掴むために訪れた彼女の部屋は、流行のロボット掃除機が絶望のあまり玄関先で回れ右して外の共用廊下から身投げするレベルの、部屋が部屋の体を為していない乱雑ぶりであった。

恵美は真実達の手前、部屋に乗り込んで片付けを始めたが、丸一日かかってやったことと言えば、本当に掃除だけであった。

作業する間、会話するのは専らライラとノルドだけ。

恵美とライラは、お互いなんの話をしてもいいか分からず、結局部屋に散らかる物の選別以外には、大した言葉を交わさなかったように思う。

それでもそれ以前の関係に比べれば目覚ましい進歩だったし、こうして二人で歩ける程度には、距離感も縮まったのは事実であった。

「お仕事は、忙しいの？」

「年末は人が足りなくなるのはどこも一緒でしょ。でも、別にあなたと違って人の命で一分一秒を争う仕事してるわけじゃないから、大したことないわ」

「そ、そう、なら、良かったわ」

別に忙しくないとは言っていないし、何が良かったのかは分からないが、それでも会話は成立している。

そんな不器用な会話がぼつぼつと続き、やがて笹塚駅前までやってきたとき、恵美は思わず立ち止まって、駅前交差点とその上を走る首都高の高架を見上げた。

「エミリア？」

恵美の記憶の視界には、高架を攻撃する漆原、潰されそうになる千穂、真典と芦屋の悪魔化と、大切な仲間だったはずのオルバとの戦い、その後、自分達の正体を知って尚、笑顔を浮かべた千穂の顔が連続してフラッシュアップした。

「……ううん、ちょっとね」

こんなことになるとは思わなかった。

一体この一年間で、何度そう思ったことだろう。

もしも……もしもあのとき千穂の記憶を、真典か恵美が、どちらにしろ消去していたら、今頃自分はここには立っていなかっただろう。

津原との戦いの直後に真奥が千穂の記憶を消す素振りが無かったことを思い出した惠美の中に、魔王サタンを知る者なら絶対抱かないであろう可能性に賭ける気持ちが浮かんた。

これはエメラダにもアルバートにも話したことは無い。

強いて言うなら、千穂と仲良くなるより以前に真奥本人に冗談交じりに提案したことがある程度だ。

もちろんそのときは、そんな提案を真奥が受け入れるとは思っていなかったし、実際には断固としてそれを拒否した。

だが、今の真奥には、それを可能にする環境が整いつつあるのではないか。

そう思えてならないのだ。

芦屋は拒んだ。だが、真奥は？

「ねえ、ライラ」

「なあに？」

「あなた、どうしてお父さんと結婚したの？」

「へっ!?」

唐突な質問に、ライラは飛び上がりんばかりに驚いた。

「ど、どうしてって？ と、突然どうしたの？ そ、そりやあその、あの、結婚って言うのは、好きな人とするものでしょう？」

「……」

かつて父からライラとの馴れ初めを聞いたときも思ったが、親の憶気（おくけ）というのは本人達が思っている以上に子を重く強く蝕む（くさむ）。

「そういうこと聞いてるんじゃないの。あなたは何千年も生きる天使で、お父さんは百年も生きられないただの人間。それなのに、どうして一緒に（いっしょ）なろうと思ったの」

「えっと……？」

「お父さんとの時間が占める部分なんて、あなたの一生のごくわずかよ」

「……ああ、そういうこと？」

「間違はなく、別れが来て、あなたが見送る立場になるのにそれを……」

「その覚悟も無しに、一緒になったりしないわ」

優しい声色は変わらないが、それでも珍しく強い口調でライラは言った。

「スローン村であの人と過ごした時間は確かに私の人生の中では長い時間とは言えないけど、私の一生の中で、一、二を争うほど大切で楽しくて素晴らしい時間よ」

「……お父さんを選んだ理由は、なんだったの」

「選んだ理由？」

「お父さんはただの人間よ。由緒止（ゆじゆど）しい家柄（かへい）だったわけでも、英雄（ゆうゆう）の血筋（けつきん）なわけでもない。あなたの目的とする戦いに身を投じられる人でもない。それなのに、どうして？」

これは恵美がノルドとライラの関係を考える上である意味最大の疑問だったのだが、ライラの反応は簡潔で、しかも大変簡に障るものであった。

「エミリアまさかあなた、恋したことないの？」

「はあああああ!?」

全く答えになってないばかりか、挑発されたと思えぬ発言に恵美は頭に血が上り顔が真っ赤になるのを感じる。

だがライラはといえば恵美が激昂しても珍しく全く動じず、そればかりか心配そうに娘の顔を覗き込んだ。

「え、エミリアあなたもしかして、最初に男の人の年取とか知りたい人？ 職業や職階重視して玉の輿とか狙っちゃう感じ？ 気持ちよりもお金とか安定第一？」

「な、な、なんの話よ!! 何を言い出すのよ突然!!」

「だ、だって、あなたこそ突然そんなこと言い出すんだもの。そりゃそう思うわよ。ダメよそんなの。もちろんあなたが選んだ男性がDV気味だったりギャンブル狂いだったりすれば考え直したらって言うけど、恋はまず、純粋に相手に心がときめくかどうかだよ!」

「持ちなさいよ! なんの話してるのよ!! 私は……!」

「なんの話って、私がお父さんと結婚した理由でしょ? 恋しちゃったからに決まってるじゃない。他に何かあるって言うの?」

「だっ……こ、恋ってなっ、なっ……何よ!? だからそういうんじやなくて……!」

「血筋とか、セフィラとか、戦えるかとかなんて考えたことないわ。私はノルド・ユスティーナっていう男性に恋をしたの。理由らしい理由なんてそれだけよ」

「そ、それだけって」

「お父さんも、きつとそうだと思うわ」

「そ、それは」

否定できない。

今思えば父の熱い惚気話はエメラダと鈴乃と共に聞いている。

ついでに父の惚気話を友人に聞かれたという事実さらに赤面する。

「もちろんいざ結婚するってなったときには、大変だったわよ。スローン村の人にしてみれば私はどこの馬の骨とも知れぬ流れ者。両親を亡くして一人で土地家屋と畑を守るあの人をたぶらかす詐欺師だなんて言われたこともあったわ。でも、私頑張ったの。頑張って農業や畜産のいろはを覚えて、医術の心得もあったから村のお産婆さんのお手伝いしたりして、少しずつ村の生活に打ち解けていった。暮らしぶりは、そりゃあ貴族がするような贅沢はできなかったけど、あの人と一緒に仕事して、ときどき近くの山の別荘に小旅行して、一緒に星を見て、川遊びをして、あの人のお父様が残した本を読んで、他にも楽しいことは沢山あったわ」

ライラは彼女の人生にとってはごく最近の、だが遠い昔を懐かしむように言う。

「お父さんは、出会いのときのことがあつて最初から私を天使だと知っていた。自分が私より先に死ぬことも承知の上で一緒になつてくれた。色々話して、喧嘩もして、それでも、一緒になつた。他に言えることは、あんまり無いわ」

「で、でも」

「そりや、悲しいわよ」

ライラは恵美が言いたくて、それでも言葉にできないことを汲み取つて言つた。

「お父さんは、いつかお爺ちゃんになつちやつて、でも私は今とはとんど変わらなままあの人を見送ることになる。でも、それを分かつていても、どうしようもなく好きになつたの。言つたでしょう。ときめきが大事なの、ときめきが――」

「ときめきって……そんな」

「優しいや誠実さは、教わつて得るのが難しいものよ。あの人は、それを最初から持つていた。それだけでも、私があの人を好きになるには十分すぎた。私はお父さんの心と、どうしようもなく一緒にいたかった。これで答えになる？」

「なつてゐる、のだらうか。」

質問しておいて、恵美はよく分からなくなつた。

超長寿命である天使が、人間とさほど変わらぬメンタリテイで人間との結婚に踏みきれるといふことは分かつたが、それでも、それが幸せなのかどうか、恵美には分からない。

するとライラは、またぞろ惠美の心を読み取ったかのように続けた。

「あのねエミリア。あなたには嫌な話かもしれないけど、それでもこれだけは言っておくわ」
「な、何よ」

「その瞬間が本当に幸せだったかどうかなんて、通り過ぎて振り返ってみるまで分からないのよ。幸せな過去の記憶が苦しい今を背負うことだってある。でも傷つくのを怖がつて、なんの行動もしなくなったら、幸せは決してやってこない。動かなくなればひたすら不幸せの坂を自覚なくずり落ちて、少しずつ、でも確実に擦り傷が増えていくわ」

「……」

「もちろん行動した結果不幸な目に遭ったり、大怪我したことも少なくはないけどね。何千年生きたってこれくらいしか言えることもない私の人生を、あなたは不幸だと思う？」

ライラの問いに、惠美は回答していた。

「それは、私が判断できることじゃないわ」

「そう。幸せか不幸か、決めるのは私。幸いにして私はお父さんと結婚したことを幸せだと思ってるし後悔もしていない。お父さんも、そう思ってくれてるって信じられる」

「そうね、それだけは保証できるわ」

「え？」

「ううん、なんでも……。ごめんなさい。変なこと聞いたわ」

「いいのよ。むしろなんでも聞いて。もっと聞いてー」

「調子に乗らないで。ほら、お父さんも待つてるんでしょ、アパートに帰りましょう」

そのまゝ腕でも組みかねない勢いのライラをやんわりと押し返す恵美だが、ライラの目の輝きは収まる気配を見せなかった。

「あなたもアパートに『帰る』って言うくらいなら、引越してきちゃえばいいのに」

「そのうちね」

ライラと話しすぎたと感じた恵美は、無理矢理会話を打ちきって足を前に出す。

自分はまだまだ、ライラやガブリエルの計略など知ったことではないというスタンスを崩すわけにはいかないのだ。

そこはライラとの距離如何に関わらない、恵美自身の問題だからでもある。

「あ、エミリア」

「何よ」

「さっき私はああは言ったけどその、ああいうのにときめくのは、母親としてちょっとやめてほしいと思うわ」

「ああいうの？」

ライラが指さす先を見て、思わず息が止まる。

あの後ろ姿は、漆原ではないか？

「その、ルシフェルがああなったのは実は私にも少しだけ責任があるけど、正直日本の生活をサタンやアルシエルさんや千穂さんから聞く限り、ちよつとああいう人は……」

「色々な意味で冗談じゃないし、それ以上にもっと冗談じゃないわ。あいつは何を一人で保護者も無しにフラフラしてるのよ!」

「あつ、エミリア!」

漆原が外で一人歩いているというただそれだけの光景に言い知れぬ不安を覚えた恵美は、慌てて漆原の後を追ひ、ライラもそんな恵美の後ろを小走りに駆け、それからアパートまでの道すがら、恵美もライラも漆原の、

「ベルも佐々木千穂もお前らも本当にもう! 僕はお前らの何倍も生きてるって言ってるだろ!! いい加減怒るぞ!」

という抗議を延々聞く羽目に陥つたのだった。

※

恵美とライラが漆原に文句を言われながらヴィラ・ローザ笹塚へと帰ってから数時間後、夜も深まってきた頃。

ディナータイムの混雑が落ち着いた途端に、マダロナルド橋谷駅前店に騒々しく飛び込ん

できた者があつた。

「晚餐の時は、来たれり！」

言わずもがな、センタッキーフライドチキン饅頭谷店店長にして、大天使でもある鏡江三月ことサリエルが、木崎の店の売り上げに常識的な範囲で貢ぐため来店したのである。

「聖なる夜を告げる鐘の音よりも高く響き渡るハートの鼓動が今宵も僕の愛の炎を燃え立たせるー 今宵も私鏡江……………残念だ、今日も不在か」

「いい、いらっしやいませー」

最近のサリエルは、一体どのような超常的感覚器官を用いてか、店に入ってきて何秒かで木崎の不在を判断できるようになっていた。

以前はサリエルが来店すると、大半のクルー達は笑顔が引き寄せ接客を真真に押しつけていたが、さすがに半年も続けば全員大分慣れてきており、少し困惑する程度で他の客と変わらぬ扱いをすることができるようになっていた。

だが、客の方はそうはいかない。

一人フラッシュモブの渾名で有名なサリエルだが、原則朝昼夜のピークタイム後に三十分ほどしか来店しないため、常連の中にも彼を知らない者はまだまだいる。

それが一見さんとなれば驚いて持っているカップを取り落とすことだってある。

そしてこの日、サリエルのこの異常行動を初めて目撃した男が、驚きの余り手から買ったば

かりのスリムフォンを落としてしまう不幸な事故が起こった。

「い、いかん」

彼は落とした電話を拾い上げ、目立つ傷が無いかどうか慌てて確認するが、その声と行動でサリエルの目を引いてしまった。

「おやあ？ これはこれは。珍しい顔がいるじゃないか」

「……」

サリエルは芦屋四郎の顔を認めて、意外そうな顔をして近づいてきた。

「こんな時間に一人飯とはどういう風の吹き回しだ？ アル……じゃない、えー、あー、芦屋、芦屋だったか」

日頃、真奥達と密な付き合いをしていないサリエルは、アルシエルの日本での名を思い出すのに少し考え込む。

「真奥から聞いてはいたが、猿江、貴様本当にそんなことをやっていたのか」

芦屋は芦屋で、心底呆れた顔でサリエルを見返した。

「そんなこととは？」

だが、言われた当のサリエルは、何を指摘されたのか本当に分からない様子だ。

「その、なんだ、木崎店長に向かって毎度迷惑な大声で悪文を音読するような真似を……」

「悪文とは失礼な。僕はいつも心の内から溢れるパッションをリアルタイムで言葉にしている

ただだ。予め言うことを準備したら、それはもう心に響く生の言葉にはならない」

どこまで本気なのか分からないが、言うことが本当ならばサリエルのパッションとやらの語彙にはただただ感服するしかない。

「何にせよ、今日は木崎店長も、真奥も不在だぞ」

「分かってるよ。木崎店長がいるいないで、店の空気も光も音も匂いも何もかもが変わる」
「一体サリエルは何を見て何を感じているというのか。」

「ん？ ちょっと待て。君は今、木崎店長と真奥君が、店にいないと言ったか？」

「あ、ああ」

「どういう意味だ？ 何故その二人がいない？ 真奥君は時間帯責任者だろう。店長と時間帯責任者が同時に店を空けているとは。マネージャーでも来ているのか？」

「そうではない。ただ今日は真奥の正社員登用研修の登録のために、木崎店長と二人で一日店を留守にしているはずだ」

日頃サリエルの奇矯な行動を見ていない芦屋は、これがどれだけ軽率な発言か理解していなかった。

芦屋の見ている前でサリエルの顔が見る見るうちに憔悴しはじめ、瞳に殺気が漲ってくる。

「真奥君と木崎店長が、二人で？」

「ま、待て。何を考えている、二人でといっても仕事の上の話だ」

「正社員登用研修？ 我が女神が、魔王に付き添いだと？」

「い、いや、付き添っているかどうかまでは知らんが」

「……………ぬう」

サリエルは地獄の悪鬼のような唸り声を喉の奥で囁らすと、ふとカウンターに向き直り、ずんずんと歩み寄る。

その迫力に思わず身を引く川田が、それでも必死に接客しようと声を上げ、

「い、いらっし」

「僕もこの店で働く!!」

「やいませはいい!?」

衝撃の申し出に、思わず声が上がする。

「まだアルバイトの募集は続いているだろう。応募すると言っているんだ。そら、面接の約束を取りつけてくれ。履歴書はこれからすぐにでも書いてくるから!」

「ああああの、筑江店長!? 何を仰ってるんですか!?」

「川田君、君はこんな単純なことが分からない程に理解の悪い男だったかな」

この世の誰よりも客としてマドロナルド幡々谷駅前店に通い詰めてるサリエルは、主力クルーの名を全員把握しているのである。

「君はただ、今日この筑江がマドロナルドのアルバイト募集に応募したという事実を本崎店長

に伝えればいい。そうすれば僕のところには然るべき日に面接の連絡が来るはずだ」

「え、ええっと、ええっと、えええ!? いやあそれは……」

有り得ない事態にさすがの川田も言葉が出ないが、同業他社の店長が突然アルバイト募集に応募したいと言いつつ場面で混乱するなというのが無理な話だ。

「と、とにかくですね、猿江店長ちよっと落ち着いてください! 木崎にはちゃんと猿江店長がいらっしゃったと伝えますから!」

「それはいつものことだろう! 僕はアルバイトの募集に応募すると……むっ!?」

「何をバカなことを言っているんだ貴様は」

見ていられなくなった西屋が、猿江を止めに入った。

「何をする離せ! 僕は本気だ!」

「余計にタチが悪い! ああ、この男は私が引き取ります。申し訳ありませんが、私の食べた後のテーブルを……」

「あ、は、はい、片付けておきますので」

「恐れ入ります。そら、行くぞ」

「は、離せ! 離さんか! どういうつもりだ! 貴様にはなんの関係もあるまい!」

「この場に居合わせて何もなかったなど言ったら、主に合わせる顔が無い。私はこういうときのために居座っていたのだ!」

自分よりも上背のある男性客に、千穂とさして変わらぬ身長の猿江が羽交い絞めにされて引つ立てられる姿を見て、川田はただただ呆然とするしかなかった。

「カワっち、お疲れ」

そんな川田の背を、心からの憐憫を込めて大木明子が叩いた。

「アキちゃん……今の、なんだったんだろう」

「分かんないけど、やっぱこの店はまだまだ木崎さんが真奥さんがいないと回らないってことじゃないの。世の中、色んな人がいるんだよ」

「僕、家業継ぐの心配になってきたよ。もしこんなことがあつたらと思うと」

「さすがにそうそうこんなこと起こったりほしくないでしょ」

「猿江店長、クリスマスパーティーの子約数が悪かったりするのかなあ」

「正社員って、ストレス溜まりそうだよねえ。私、自分が就職できるか不安だよ」

川田と明子は、しばらく大小二人の客が去った自動ドアから目を離せなかった。

「ええい離せ！ いい加減離せ！ 人を呼ぶぞ！」

「もう十分注目を集めている。いいか、また店に戻ってあんなバカなことを言うようなら、魔王様を通じて木崎店長に報告していただくぞ」

「分かった！ 分かったから！ とにかく離せ！」

夜十時半くらいでは、幡ヶ谷駅周辺はまだまだ人が多い。

そんな中、サリエルを抱え上げる声屋は大いに注目を集めていた。

サリエルもさすがに冷静になったのか、声屋が地面に下ろすと息まわしげに声屋を睨みながらも、服を整えるだけでマダロナルドに走って取って返すような気配は見せなかった。

「やれやれ僕としたことが、つい頭に血が上ってしまった」

「あの瞬間まで上ってはいなかったのか」

声屋の驚きをよそに、サリエルはぶつぶつと文句を言っている。

「ふん、魔王め。正社員登用研修だとう？ まんまと我が女神と二人きりになりおって、忌々しい。いや、魔王は何かと正社員にこだわっていると聞いたが、よもや初めから我が女神を狙うつもりだったか？」

「待て、魔王様のお心を邪推するようなことは許さんぞ。第一どうして二人きりなどと断言できる」

「貴様こそ何を言っている」

サリエルは馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「このご時世、正社員を一人増やすというのは大変なことなのだ。それが非正規からの登用ともなれば、管理責任者の推挙なしには、研修を受ける資格すら与えられない。少なくともセン



タツキーでは、正社員登用の話が持ち上がったら直上の上長が研修パートナーとしてアルバイトに研修のイロハを手とり足とり教える決まりになっているんだ……手とり足とり……くそおお魔王めえええ!!!!」

自分で言ったことに自分で怒っているサリエルだが、センタツキーの正社員であるサリエルの発言には思いのほか説得力があった。

だが、やはりこれだけは、魔王サタンの側近として言っておかねばならない。

「一応言っておくが、魔王様と木崎店長は、まかり間違っても貴様が想像するような男女の関係にはならんと思うぞ」

「分かんたろうがそんなこと!!」

だが大天使は、悪魔大元帥の言葉を切って捨てた。

「男と女だー どんな些細なきっかけで関係が深まるか分からんー 魔王は木崎店長にとって腹心の部下で、自分の夢を明かす程度には信頼を置ける男だろうー まして毎日仕事の苦勞を分かち合っているのだー これほど僕を不安にさせることはないー」

「そ、そういうものなのか？」

想像していたよりもずっと現実的な理由で心配しているサリエルに、声屋は軽く驚いた。

真奥や千穂や恵美や鈴乃から断片的に漏れ聞こえてくるサリエルの性格は、もっとも非現実的で浮ついたものだと思っていたからだ。

「前から聞いてみたかったのだが」

「なんだ！」

「貴様はその、木崎店長とどのような関係を楽しみたいのだ？」

「ふむ」

「燕屋の間に、サリエルの目つきが変わった。」

「それは難しい問いだ」

「ん？」

「お互いの環境を考えれば、僕が木崎家に入る方が良いのではないかと思う」

「……ん？」

「それに、今の状態で自分に牙があると思うほど僕も楽天主ではないからな。現状は僕が木崎店長を妻にするかではなく、木崎店長が僕を夫とする気があるかどうかが問題だ」

「……………んんん？ 待て、少し待て」

「なんだ」

「前提がおかしい」

「どこがおかしい。結婚を前提に考えていなければ、あんな行動取れんぞ」

「結婚を前提に考えてあの行動なのか？」

「燕屋は驚愕を禁じ得なかった。」

「他にやり方知らん」

「い、いや、その、やり方とかそういう問題ではなくてだな。それ以前に貴様、人間と結婚する気なのか」

「何かおかしいか」

何かおかしいかと聞かれればそもそもサリエルの存在と行動の全てがおかしいと言わねばならないが、今はそういうことを言っても始まらない。

「貴様ら天使は人間など比較にならぬ程の長寿命だろう」

「ふむ、それで？ 貴様はこう言いたいのか？ 寿命が違いすぎる者同士が結ばれても不幸になるだけだとは？」

サリエルはそう言うのと、芦屋の返事を待つまでもなく肩を練めて持論を展開した。

「何を言ひ出すかと思えば、不幸か幸せかは当人が決めるものだろう？ 人にとやかく言われて揺らぐ恋など、初めから恋などとは呼べんよ」

「その当人の中に、現時点では木崎店長は含まれてはいないぞ」

芦屋はついそう言ってしまったが、サリエルはなおも芦屋を睨むように笑った。

「君は智将と謳われる思慮深い悪魔だと聞いていたが、案外ものの分からん男なのだな」
「なんだと」

「木崎店長と共に生きて幸せなのは僕だけに決まっているだろう」

「な、何？」

「木崎店長が僕と生きて幸せかどうかなど、一生かけても僕には分かん」

「ま、待て、何を言っているんだ、貴様は」

「幸せなどというものは当人にしか感じられんものだということだ。もちろん相手が幸せであるよう努力する必要はあるが、僕の努力を幸せと感じられるかどうかは木崎店長の胸三寸でしかない。僕は木崎店長ではないのだから、例え天使の永劫の寿命をもってしても、彼女が感じる本当の幸せを我がものとして感じることは、決してできん」

苜屋は完全に虚を突かれて、言葉を失う。

ともすればサリエルの物言いは、自分さえ良ければ相手の気持ちなどどうでもいい、と言っているようにも聞こえるが、言葉の内容は完全にその真逆であった。

「貴様とて千年かそこらは生きているのだらう。その短くない生の中に、誰の目にも揺るぎなく絶対的な幸せと映る出来事などあったか。そんなものは無いと、僕はこれまでの生の中で断言できる。ならば僕にとって幸せとは、あるかも分からないその絶対的な幸せを得るために努力し続けることだ。それは今まさに、僕のすぐ近くまで来ている。物理的には！」

サリエルはそうたかたかと宣言すると、少し離れた場所にあるマドロナルド輔々谷駅前店を指さした。

「特に幸いなことに、前例がある！」

「前例……それはまさか」

芭屋の間に、サリエルは大きく頷いた。

「その通り!! エミリアの存在こそ、人間と天使が種と時の垣根を越えて結実した一つの幸せの形だろう! 彼女の存在が明るみに出たとき、天界は大きく揺れた。木崎店長と巡り合った僕は、その揺動こそ天界や我ら天使という種が一万年の長きにわたりとどまっていた停滞から抜け出るために上げた生命の叫びだと、確信している!」

天高く両腕を掲げ、高らかに叫ぶサリエルを、通行人は遠巻きに避けて通ったが、芭屋はその場に縋いとめられたように動けないでいた。

「アルシエル、君も聞いているのだろうか? ガブリエルの計画を」

「……貴様は……」

「僕はつい最近まで何も知らなかった。知っていたら、何百年も前に、奴にはラダエルと共に墮天の裁定を下していたらうさ。その頃の僕は、木崎真弓という現世に降臨した女神を知らなかったからね。天界が生きるためには、美しいイダノラの導きが不可欠だと確信していた……だが、今はもう違う」

サリエルは掲げていた腕をようやく下ろすと、長い髪を掻き上げた。

「大地と、空と、海と、思い動く己自身があれば、人は先に進める。それを止めていたのは、自分自身だと気づいた。ユートピアを求めたイダノラがこの地球や日本という世界を見たら、

きつと雑駁で汚れた未熟な世界と断じるだろうな。だが僕は真っ白で綺麗に掃き清められた殺風景な無窓室よりも、沢山の色があるこの世界で僕の知らない色を見せてくれる人と共に雑駁な世界を歩みたい。……ああ、病院勤めの白衣の天使なら、いつでも大歓迎だね」

最後のそれが無ければそれなりに決まっているはずなのだが、この辺りはやはりサリエルである。

そして、そんなときに、

「道端で何を他人に絡んでいるんだ、貴様は」

スーツ姿の木崎真弓が唐突に現れるくらいの間と運の悪さもまた、サリエルらしいといえはらしかった。

「あ……い、いや、これは木崎店長」

サリエルは首だけを後ろに向けたまま、妙な格好で固まってしまった。

木崎はいつかも声屋が見たような、大量の資料で口が閉じられなくなっているシヨルダーバツダを肩にかけて、シツタなビーコートを纏う、いかにもできるビジネスマン、といった出で立ちで、それがまたサリエルを射すくめる眼光に余計な迫力を与えていた。

「道端で何を病院勤めの白衣の天使だなんだと下らん性癖を自白しているんだ？」

「い、いえ、そのですね、この男と幸せとは何かという哲学的問答を……」

サリエルは膝を震わせながら今にも崩れ落ちてしまいそうだが、

「あ、い、いや、私は」

あなたが間違ひではないのだが、声屋としても真奥の上司である木崎の機嫌を損ねる事態は避けたいため、つい及び腰になってしまう。

「ああ、声屋さんでしたか。申し訳ない。うちの商店街のこんな迷惑な男が」

「い、いえ、その、猿江店長からお話を伺っていたのは本当のことなので」

「こいつを庇う必要はありませんよ。何かあれば、すぐに私から商店街の会長と交番に報告が行きますから、この男はどんな迷惑を働いたのですか？」

「大丈夫です！ 本当に何もありませんから！ あ、あの、それよりも！ 今日我真奥が木崎店長と一緒に仕事をしていると伺ったのですが!!」

「はい？ ああ、彼を迎えにいらつしやったのですか？」

声屋はやや強引に話題を変えると、木崎は少し胡亂げにサリエルを睨んでから、その話に乗つてくれた。

「折角お越しいただいたのに申し訳ない。彼とは先ほど電車の中で別れました。今日はそのまま自宅に戻るようです。ああそうだ、今日伝え忘れたんですが、ペンタースを新調するように言つてやつてください。あの劣化して穴の開いたビニールペンタースでは、研修中の印象が悪くなるかもしれません」

「わ、分かりました。伝えておきます」

「よろしくお願いします。……で、猿江、貴様にはまだ聞きたいことがある。顔を貸してもらおうか？」

「もちろんなんでも聞いてください！」

一瞬前まで固まっていたサリエルは、どう考えてもこの機針の端に座るよりも厳しい説教が待っているにも関わらず、ぱつと顔を明るくして今にも尻尾を振らんばかりだ。

「で、では私はこれで」

芦屋は木崎の注意がサリエルに向くと、一礼してそそくさとその場を去ろうとしたが、その背をサリエルの叫びが追いかけてきた。

「ああ芦屋君！ 君の同居人に伝えておいてくれたまえ！ 先日の約束はまだ生きているから、好きに人生を選んでくれとな！」

「え？ ……あ、はあ」

木崎の手前、強硬な返事ができない芦屋は、意味の分からない伝言に首を傾げ、

「貴様が他人に人生を示すな。どう考えても外道の道だ」

サリエル本人は、呆れ顔の木崎に後ろ頭を叩かれていて、それがまた嬉しそうだ。

本当ならばマドロナルドには閉店まで居座る予定だったが、真奥が爆発したと間違いない情報が入ったのなら、これ以上長居する意味も無い。

元々は、存在するかどうか分からない脅威からマドロナルド轄々谷駅前店を中心とした

真奥の生活圏内を警戒するために長居していたようなものなのだ。

「それにしても魔王様、お帰りになるならメールの一つも寄越してくだされば、早めに帰ってお夜食を用意することもできたのに……あ」

木崎とサリエルの声が聞こえなくなる頃、芦屋がそう呟きながらスリムフォンに目を落とすと、メールアイコンの右上には、数字の「①」が表示されていた。

「……」

着信は、十五分ほど前。開いてみると真奥から、間もなく帰宅する旨を知らせるシンプルな文面のメールが着信していて、芦屋は眉根を寄せた。

「サリエルのせいでマナーモードのバイブレーションに気がつかなかったのか。確か、振動のパターンを変える方法が……」

芦屋はその場で立ち止まってしばし画面と睨めっこし、

「……」

分からない、という困惑の表情のままに固まった芦屋の目の前で、非常にもスリムフォンの画面が真っ暗になる。

待機時間が過ぎ、スリープ状態になったのだ。

「待機時間も、もう少し長くしたいのだが……」

芦屋は真っ暗な画面の向こうに、あの明るい女性の笑顔を見た気がして、そのまま何もせず

にスリムフォンをズボンのポケットにねじ込んだ。

「何を考えているんだ、私は」

あれから、鈴木梨香とはなんの連絡も取り合っていない。

だが、登録数が二十人にも満たない電話帳画面で一番上に表示される梨香の名を見る度、芦屋はこれまで抱いたことの無い感情が胸中に燃えるのを感じていた。

「……急がねば。魔王様はもう、お帰りになっている」

芦屋は寒さにかじかむ手をポケットに入れると、足早にアパートへの道を急いだ。

だが部屋に帰り着くまでずっと、なぜだかさリエルの言葉が後から追いかけてくるような気がして、落ち着かなかった。



恵美がライラとの距離を少しだけ縮めた数週間前のあの日。

ライラの絶望的な部屋を逃げ帰るように後にした千穂達は、練馬駅のモズバーガーの店内で発せられたガブリエルの質問に、すぐには反応できなかった。

「ナウルって、聞いたことあるかい？」

聞いたことの無い言葉だと、誰もが思った。

千穂はガブリエルの話だから、きつとエンテ・イスラや天界に関するものだろうと思つたのだが、

「佐々木千穂、君聞いたことない？」

なぜかガブリエルは、地球人である千穂を名指して質問を重ねた。

「え？ え？ 私ですか？」

「うん、というか、知つてるとしたらこの場では君があまねえさんしかいないんだけど」

「つまり、地球の事柄なんですわ？」

エメラダの問いかけにガブリエルは小さく頷き、

「北大陸北東部の湖沼地帯に生息していて、うっかりその水を口に含んだ牛一頭くらいなら

体の内側で大繁殖して寄生相手を食べ尽くしてしまう寄生虫の一種のことではなく？」

続く質問に顔を強張らせた。

「何それ、そんな怖い生き物僕知らないよ」

その場の全員がそのような生物が実在するのかと脳内で突っ込んだところで、ガブリエルは種明かしをした。

「と、とにかくだ。ナウルってのは、地球にある国の名前。パチカンとモナコの次に国土が小さい島国で、太平洋の赤道近くにある。地域的には一応ミクロネシアに所属してるけれど、周りの島からはすごく離れててね。人口も多くないから、国防とか通貨とかはオーストラリアに

依存してる。戦時中は日本軍の飛行場もあったらしいよ」

聞けば聞くほど地球のどこかにありそうな国の話である。

千穂自身はそこまで聞いてもナウルという国名には心当たりは無かったが、いくつかのキーワードから温暖な気候の海が綺麗な島国なんだろうな、くらいの想像を働かせた。

しかし、そのナウルという国と天界と、一体どう話が繋がるというのだろうか。疑問を他所に、ガブリエルは続ける。

「この国は二十世紀の一時期、地上の天国と言える場所だったんだよ。まず、国民は一切税金を払う必要が無かった」

「え」

千穂は驚き、鈴乃とエメラダもまた、驚愕で目を丸く聞いている。

「それどころか全ての国民にベーシックスインカムが保証されていた。つまり国から生活に必要な資金が、全年齢に対して支給されていたんだ。今時の日本という生活保護以下のお年寄り向け国民年金とはワケが違うよ？ 赤ん坊からお年寄りまで、毎日三食外食して毎年車を買って換えても尚余るレベルの金額をもらってた。働かずしてそれだけのお金をもらえたんだ。くどいようだけど、無税だね」

「そ、それ本当なんですか？」

千穂の常識ではとても理解できない環境だが、ガブリエルは大真面目に頷いた。

「うん。まあそれが普通の反応だよ。でも本当。ナウル国籍を持つナウル人の数は決して多くはないとはいえ、当時の国民一人当たりの平均所得は日本やアメリカを突き放して世界最高。富豪と呼ばれる人はいなかったんだけど、それでも世界水準から見ても掛け値なしに国民全員が平等に格別だった」

千穂はどこか異世界の話を聞いたかのように唖然とした。

異世界といえば異世界の天使であるガブリエルが何故地球の、日本人にとってはマイナーな国の情報を知っているのかということも気にはなるが、それ以上に最初の衝撃が過ぎるとすぐにあることに気がついた。

「……だった？」

「うん」

「……今は？」

ガブリエルは待つてましたとばかりに満面の笑顔を浮かべた。

「国民の失業率九割超え。世界最貧国の一つ。外交で世界中から援助を引き出すことでなんとか存続してる」

「な、なんなんですかそれ」

地上の楽園に一体何が起こればそこまでの事態に陥るのか、経済や政治の知識に疎い千穂には想像できなかった。

だが、政治の世界に身を置くエメラダは、すぐにそのからくりを見抜く。

「その国には、何か世界的に需要のある天然資源があったんですわ？　そしてそれが枯渇してしまったために、そのようになっていいるのでは？」

「その通り。この国はリン鉱石の産出国だったんだ」

リンは工業原料として、農業資源として、なくてはならない存在である。

工業と農業で必要ということは、即ち世界中で必要とされるもの、ということだ。

ナウルはその狭い国土に、何万年もかけて堆積した海鳥の糞が変質してできた、世界最大級のリン鉱床を擁していた。

二十世紀初頭から大国がリンを求めてこぞって押し掛け、時勢によってナウルの支配者はその都度変わってきた。

ガブリエルの言う楽園的環境は第二次世界大戦後、イギリス連邦に属する共和国として独立して以後より顯著なものとなったが、九十年代には既に楽園の面影は消え失せていた。

「楽園から最貧国への転落は十年強って短い期間で進んだ。それまで世界に名だたる天然資源産出国として栄華を誇った国が、十年き。それにしても何万年もの堆積を、たった百年弱で干上がらせちゃったんだもの。人間って怖いよね」

ガブリエルは言いながら新たなポテトをつまもうとしたが、いつの間にか全部食べ尽くしてしまったポテトの袋の底を見て、自嘲気味に肩を震わせた。

「でも、転落が始まってしまったのは仕方がない。リン鉱石が枯渇して世界中の企業や出稼ぎ労働者が引き揚げ、ナウルはどんどん貧乏になっていった。当然それまでのようなベーシクタインカムは維持できない。お金が無くなりや、食べ物を買えなくなる。さあ佐々木千穂、君だったらこんなときどうする？」

「なんだか学校の歴史や公民の授業でも受けているかのような感覚に陥る千穂だが、それでも必死に拙い知識で考えた。

「仕事を探すとか、でも、そうか、大恐慌みたいなものだから国に仕事が無いんだ。だったら、食べるだけなら農業や漁業でなんとか繋ぐとか、逆に外国に出稼ぎに行くとか……」

千穂の脳裏に、授業で見たアメリカ発の世界恐慌のモノクロ記録映像や、教科書で習った話題が沢山浮かぶ。

「素晴らしいね。どこの一流だったら認めて餓死するとか言っちゃいそうだけど」
ガブリエルの言う一流が誰のことなのか、誰かが考えないようにした。

「それが真つ当な感覚だよね。誰だって餓死はしたくないし、お金が無くなりそうな心配があったら節約したり、仕事を探したりするよね。普通だったからね」

ガブリエルは、自嘲の笑みを絶やさぬまま、続けた。

「ところがね、驚いたことに、大半のナウル国民は何もしなかった」

「え？」

「できなかったんじゃない。しなかったんだ。大昔から伝統的に一次産業を続けていた人以外
のほとんどの国民は、産業が崩壊し、国の経済が破綻するのを何もせずに眺めてた」

「な、何もせずって、そんな？」

「働かざる者食うべからずってのは、食べるために働いてきた先人がいるからこそ生きる言葉
ってことだよ」

そこに、それまでアシエスやイルオーンを適当にからかいながらも、二人によって恐ろしい
勢いで吸い上げられる財布の中身を心配しはじめた天祐が口を挟んできた。

「ナウルの国民は働かなくていい期間が長すぎた。リン鉱業で栄えてた時代に国内で働いてい
たのは大半が外国の出稼ぎ労働者で、リン鉱業が栄える以前は原住民が魚を取ったり狭い土地
を耕したりして自給自足したり交換したりしてたから、貨幣経済自体が無かった。だから「働
いてお金を得る」って考えが、どの世代にも存在しなくなってしまったんだ」

その漁業すら自給自足のためのものであつて、産業として活気があるわけではない。

リン鉱業発展以前に存在した農業も、リン鉱石採掘で家の庭まで穴だらけになった島ではも
はや自給自足すらままならない。

それなのに、何世代も働かずに生きてきたナウルの国民には、労働によって金を稼ぐという
概念そのものが浸透しなかった。

もちろん国民が誰一人働いていないわけではなく、今でも交通や通信や商業はきちんと生き

ていて、やろうと思えば観光客を受け入れる機能もあり、衰退しきったリン鉱業にも、新たな鉱脈を探ろうとする動きがある。

外国で学んだ政治家達が不動産業や金融業によって経済を立て直そうとしたこともあった。温和な国民性が幸いして経済が壊滅しても暴動などは起こらず、元々少なかった人口が急減したわけでもない。

だが国民の勤労意欲の異常な低さは如何ともし難く、豊かな時代の食生活と「太っているほど美しい」という南洋特有の美意識が災いして国民の肥満率と糖尿病罹患率も悪化の一途。

打ち出した経済政策もことごとく失敗し、転落を止めるところか急加速させる有様。

果ては国際援助と引き換えに戦災難民が送り込まれ、その難民にすら「こんな国にいられない」とそつばを向かれてしまっている。

百年の楽園の夢が過ぎ去った今、かつてのような南洋特有の長閑な島嶼國家に戻るのには、まだまだ膨大な時間がかかることだろう。

そんな国が実在することに千穂は驚きを隠せないが、ここまで来てもまだ、この話が天界の現在にどう繋がるのか分からない。

「まあ、この話は僕が実際に見たわけじゃなくて、ちょっと前に機械にしたネカフエで見た、この世界の沢山の情報の中の一つなんだけどね」

千穂もまさか繋がる先も見えない話題の出所が、異世界の天使がネットに繋いで得た情報だ

とは思わなかったが、話すガブリエルの顔は思いがけず真剣な色を帯びていた。

「実は今の天界ってのは、ちょうど落ちかけの頃のナウルみたいな状況だね。大半の天使達が、何の自由もなく生きている。でも、イダノラや僕ら守護天使を含めた、言ってしまったら上層部は、いつまでもそんな状況に甘んじてたらいけないということが分かっている。でも、誰もその状況を変えようと思わないし、そのために行動もしない」

ガブリエルは、今度は視線を千穂から鈴乃へとシフトする。

「聞くけど、君達大法神教徒の究極の目的って何？ 何を期待して、神様に祈ってるの？」

「神による救済と、その末の苦しみの無い理想郷への到達。ということになっているな」

一応未だに聖職者であることは自認している鈴乃はそう答える。

「だが、実際にそのような世界がどこかにあり、そこに流れ着けば良いと考えるのではない。そのような理想を実現するために皆が努力する世界こそが聖典に語られる理想郷である、という考え方が、今のサンクト・イダノレッドの主流学説の論だ」

「うん、じゃあ、実際に苦しみの無い理想郷が存在したら、人間はどうなると思う？」

「……ん」

鈴乃は少しだけ額に手を当てて考えるが、さして悩むことなくすぐに口を開いた。

「どうしようもなく墮落するか、感情や倫理の規範が低く均されるか、いずれにせよ我々の考える人間社会は、崩壊するだろうな」

「正解」

ガブリエルがわざとらしく拍手する後ろで、天祢（あまね）もうんうんと頷（うなづ）いている。

「イダノラはね、そんな理想郷を作ってしまったんだ。そして今も、そこに君臨（くんりん）している」

「どういうことですか？」

エメラダの問いに、ガブリエルは珍しく慎重に言葉を選ぶ様子だ。

「殺されない限り死なない体を手に入れたら、人間は人間じゃなくなる。ただ生きてるだけの、何かになる」

ガブリエルはそう言うとき、右手で自分の首をスツと斬る真似をした。

「天使は、事実上不老不死だけど、実はこの不老不死は自然死しないってだけで、首と胸が切り離されたり、代謝では追いつけないほどに体の血が失われたら普通に死ぬんだ。でも法術（ほうじゆ）の基礎理論にもあるように、心臓が破壊されても全身を巡る聖法気（せいぽうき）が心臓を回復させるに足る量があれば復活も可能だ。まあ後遺症とかどうなるか知らないけど、普通の人間だったら致命傷レベルでも、僕らなら助かる可能性は非常に高い。そしてその聖法気保有量はそのまま肉体の抵抗力と比例する。原因如何（いかに）に関わらず、僕ら基本的に風邪（かぜ）ひかない。病氣（びやうき）もしない」

「ああ、前に聞いたことがあります」

千穂（ちほ）は、概念（がい念）遷（うつ）変（へん）を習得する前段階として、鏡邊（かがみべ）で鈴乃（すずの）から聞いた講義（こうぎ）を思い出し、鈴乃と顔を見合わせて頷き合う。

「うん、でね。逆に考えると、僕ら天使は今、聖法氣を大量に保持できるが故に時間経過では死ねない体なんだ。ご飯を食べなからうが、何千年経とうが、代謝や成長や病氣の結果としては決して死なない。殺されない限り死なない人間が、生活する上で何不自由の無い、絶対安全なシエルターに放り込まれたのが今の天界なんだ」

何もしなくても生きていられる。

それはまるで、生きているだけで無限に生きるためのお金が入っていた時代のナウルと同じ。

「そのせいで、僕の故郷の人間達は……天界の民は壊れてしまった。元々は地球やエンテ・イスタと変わらない、普通の肉体を持つ人間達の寄り合い所帯だった。でも、沢山の不幸と偶然と、イダノラの力が重なって、僕らは天使の名を与えられ、人でなくなってしまった。当然だ。僕らには積極的に生きる目的が無いんだよ。不老不死を得て、何もしないでいい時間をあまりに長く過ごしてすぎて、目的を持って生きる方法を忘れてしまったんだ」

何世代にも渡って不労所得を継続けてしまったナウルの民のように、天界の、否、ガブリエルの故郷の民もまた、そのような境遇になったということなのだろうか。

「思い出してほしいんだけど、今まで君達の前に現れた天使って何人いた？」

「ええっと……」

千穂はまた鈴乃と顔を合わせながら、指折り数えていく。

「サリエルさん、ガブリエルさん、ライラさんと……」

「ラグエル、カマエル、あとは天兵連隊の連中に、この場合エミリアとルシフェルも一応天使の枠か？」

「少ないと思わない？ 僕らこれでもエンテ・イスラの歴史を裏から操るエイリアンの高等知的生命体よ？ それなのにこの驚きの少人数制。魔王がエンテ・イスラに攻め込んだとき、働ける悪魔がどれだけいたか考えてごらんよ」

「最後の中央大陸掃討作戦時にすら、五万以上の軍勢がいると見込まれていたな……」

鈴乃が真奥の横顔を見ながら言う。

真奥は特別反応はしないが反論も無いので、概ね正解なのだろう。

裏を返せばその何倍もの数の悪魔がエンテ・イスラの人間達に討滅されたということでもあるのだが、真奥がそのことに責任を感じこそすれ人間を恨む材料にしているのは鈴乃が誰よりよく知るところだ。

だが、エンテ・イスラに侵攻した魔王軍末期の数字がその場の全員に記憶された瞬間、ガブリエルは驚きの一言を放った。

「天界の今の総人口はね、五千人弱。そのうちの九割以上が、何もしないでただ、生きている。生きている以外のことを、何もしていない」

「たった……五千人、ですか？」

一つの生物種の個体数として、社会を形成する人口として、あまりに少なすぎる。

千穂の抑^{おさ}める声に、ガブリエルはこともなげに頷^{うなづ}いた。

「僕の星は今の地球より科学は進んでたし、今のエンテ・イスラより法術文明も進んでた。でも、今僕らがエンテ・イスラで天使ツラしてるのは、星が減^へびてしまったからなんだ」

さらりと飛び出した減^へびというワードに、千穂と鈴乃とエメラダは思わず身を固くする。

ライラは、真実と恵美に、エンテ・イスラ人類の危機を救ってほしいと言ってきているのだから。

「本当にただ、不幸に不幸が重なった結果なんだけどね」

ガブリエルは頬杖^{ほこづえ}をついて極めて軽く嘆息^{たんそく}した。

「星系の中心にある恒星活動が低下している時期に、近所の銀河で大きな超新星爆発があったんだ。それ自体は一日二日、世界中で携帯電話的な通信機器のシステムがダウンしたって程度の被害しか無かったんだけど、問題はそこじゃなかった。宇宙の気流の変化とでも言うべきなのか、超新星爆発の圧力が、どこからか僕らの星全体を包み込んでしまうほどの、恐ろしい有害物質を運んできたんだ。恒星活動の低下期間は、地球の感覚だと多分三十年くらいだったんじゃないかな。とにかく僕らの星がある星系を守ってた恒星の太陽風がやんでしまったって時期に遠くの超新星爆発が圧力を飛ばしてきて、その圧力にあおられて近縁宙域を漂っていた有害物質が運悪くうちの星に流れてきて、なんの因果か恒星がまた活動期に入ったときに、その

有害物質を星系の中で還流させはじめちゃったんだ。不運の玉突き事故だよ。まあこれらのことは、何もかも手遅れになった後にイダノラ達の科学者チーム導き出した答えなんだけど」

「ガブリ君もその科学者の一員だったのかい？」

天祿の質問に、ガブリエルは首を横に振る。

「ううん、当時の僕は科学とか医療とか天文とかでんで」

ガブリエルは、それまで忘れていたいつもの軽薄な笑みを取り戻して言った。

「僕は母星が生きてた頃に、イダノラが責任者を務めてた研究所の警備主任だったんだ。給料はまし、専門の研究者達に比べたらお察しくださいって感じだけど、研究所の人達との関係は良好だったよ。偉い人とも結構知り合いだった……ああ、こんなこと口に出して話すの、いつ以来だろう。なんかもう、ほとんど忘れちゃったと思うてたのに……」

ガブリエルは途端に懐かしそうな顔で、窓の外を行きかう練馬駅の利用客を目で追った。

「とにかくその有害物質のせいでね、星全体が恐ろしい致死率を誇る風土病に冒された。経済力の無い国がいくつも滅んだ。イダノラの研究所は、その有害物質や風土病に対し有効な対策を見つけるために世界中から人が集められて編成された組織だった。研究所は月の入植都市にあったんだ。宇宙進出はもうかなり歴史を重ねてて、星系内の惑星の探査も、当たり前のように人を派遣して入植するレベルだった。だから医療、天文、法術、気象、地学、都市政策、建築、遺伝子工学、その成果を生かすための法律や経済政策や流通技術の開発……とにかくあり

とあらゆる分野でその有害物質と風土病から人類を守る研究を行つてた……それでね」

ガブリエルはそこで、今まさに追加メニューを注文するべく真奥と財布の奪い合いを繰り広げているアシエスとイルオーンを振り返った。

「最終的に僕らは失敗した。星を、人類を救うことができなかった。風土病が星を覆つて二十年もたたないうちに、先進的な人類の文明は滅びたんだ。地球よりもエンテ・イスラよりも、ずっと進歩してたはずの僕らの故郷が。しかもそれがよりによって、イダノラの研究成果である『不老不死』を巡つて世界中で戦争が起こつた末のことだ。笑うに笑えないよね。人類はそんなに愚かだったのかつて、当時の僕らは随分絶望したもんだよ」

「理想郷を巡つて、規範が崩壊したということか」

「タレスティア・ペル、悪いがそんな高尚な話じゃないよ」

鈴乃の問いを、ガブリエルは笑つて否定する。

「人類は我慢できなかった。突如襲つてきた災厄を一瞬で吹き飛ばす魔法だけを求めていた。

本来なら何世代もかけて風土病に対抗できる抗体を作るとか、密に管理された衛生シエルターシテイーを世界中に建造するとか、有害物質を遮断する膜を何百年もかけて大気中に生成するとか、そういうことが必要だったんだ。なのに、イダノラの才能がそれを許さなかった。抗体なんてまどろっこしいことすつ飛ばして、いきなり不老不死という魔法を引き当ててしまったんだ。そして誰もがそれに飛びついたんだ。もう他のことなんか知るか、待ってられない。俺

にも早く、風土病を恐れる必要の無い理想の体を寄越せ！　って、世界中が言い出したんだ。規範が崩壊したんじゃない、我慢できなくなって自爆しただけさ」

「それで、聞いてもいいかい？」

「なんだい、あまねえさん」

「その不老不死とやらは、何をどうして完成したんだい」

天祿の厭しい声色は、既に答えを分かっている者の声だった。

もちろんガブリエルもそれには勘づいていて、遂に真奥から財布を奪取することに成功し今にもカウンターに駆け出そうとするアシエスの背に視線を移した。

「イダノラは、僕らの星の生命の樹の痕跡を見つけたんだよ。人類の中に紛れていたセフィラの子達を、見つけ出したんだ」

100% 100% 100%



萱屋がサリエルに散々振り回された翌日の夕刻。

クリスマスの装い事やかな新宿の町に、沈んだ表情の少女達がいた。

「はあああ……」

老いも若きもクリスマス商戦に彩られた色鮮やかなダンスホールに臨みながら行く中、周囲の輝きに当てられたかのように元気が無い。

「やるせないです」

「そ、そこまで落ち込まなくてもいいのではないか？」

否、それは少女にも見える二人の女性であった。

片やベレー帽を被る間延びした口調、片や髻で髪を纏めた硬い口調。

言わずもがな、エメラダ・エトウ・ヴァと鎌月鈴乃である。

「二度と来られないというわけでもあるまいし、また折を見て来れば……」

「そういうわけに行かないから、落ち込んでるんじゃないやありませんか……はあ」

恨めし気にショウウィンドウの中のクリスマスツリーを見やるエメラダの手には、それでもしっかりとこの寒い中わざわざ並んで買った、流行りの店のジェラートのコーンが握られているのである。

「これからこうんなに寒くなりそうなのにくそれを着ずして帰らなきゃいけないなんて」
鈴乃は頬を掻いて、苦笑するしかない。

エメラダに、怒りの籠った帰還指令が出たのはつい二日前のことであった。

発信者は言わずもがな、エンテ・イスラ西大陸でエメラダの留守を任されているアルバートである。

曰く、

「もう限界だ。きつさと燃つてこい。さもないと次の年の予算が百倍になっても足りない大損害を出してルーマックに法術監理院を取り潰させてやる」

とのこと。

元々エメラダは、エンテ・イスラ全土を混乱の巷に陥れたオルバの審理の連渉を知らせにやってきただけで、惠美への報告を終わらせたら数日以内に戻るはずだったのである。

ところが日本ではライラが現れたり、イルオーンらセフィラの子に絡む事件が発生したりと問題が連発し、気がつけばエメラダの滞在日数は一ヶ月以上に及んでいた。

もちろんエメラダは常にアルバートに連絡は取っていたし、途中まではアルバートも惠美の身边を氣遣つてエメラダの不在を積極的にカバーしていたのだ。

しかしここ数日はエメラダの滞在が物見遊山じみてきたことに勘づいたか、本当にアルバート一人ではエメラダの不在を埋めきれなくなったか、ともかく概念感受の声色に陰が籠つてきて、遂に一昨日、エメラダに帰還命令が出たのであった。

「あーありタリスマスケーキ食べたかったなあー七面鳥のグリルとかー……」

「な、なんなら今日の昼食はそれにしてはどうだ？　どこかの店でクリスマスフェアか何かをやつていれば食べられるだろう」

だがエメラダ本人はこの際クリスマスや大晦日（おおみそひ）や正月といった日本の文化風俗をとことん棄しむ氣でいたために、不満たらたらでぶうたれているのだ。

だがそれはそれとして、職責のためには帰還もやむなし。

それに当たってはセント・アイレの留守を預かってくれているアルバートやヘイゼル・ルーマツタ將軍にそれなりのお返しをしなければならぬ。

だが、惠美（めぐみ）は今日もアルバイトで時間が取れないため、鈴乃（すずの）がエメラダの案内役を買つて出たのだった。

「そういうのはうその日に食べるからいいんですよ。フラインダしてもうそれは何か違います」

「そういうものか？」

日本の一般的なクリスマスマスの食卓など、とうの昔に本来の意味を逸脱（いつだつ）して形骸化（けいがい）しているのだからいつ食べても変わらない氣もするが、エメラダはちつちと指を振る。

「考えてみてください。いくら美味（うまい）しくてもうオゾーニはやっぱリオシヨウガツに食べるものでしょ？」

「うん、まあ、そうかも知れ、多分」

クリスマスをするつ飛はした先のことを言われても、鈴乃も困ってしまう。

鈴乃はまだ日本の正月を経験していないし、そもそもエメラダだって知らないはずなのだから、彼女から発せられる例えとして不適切ではなかろうか。

「あーでもー」「オゾーニ」って響きがうなんだかイタリアンやフレンチの料理みたいですわねー。
ビザ・マルゲリータ・オゾーニみたいなのー」

「ああ、最近はおながち無いでもないと思うな。イタリアやフランスの食材を使った雑煮風の汁物などあるらしいぞ？ 私はやはり、和風の雑煮が一番だと思うが」

「……ベルさんポケ殺しー」

「は？」

なぜかエメラダから非難するような目で見られて、鈴乃としては青天の霹靂である。

「でもーグチつてても仕方ありませんしーお土産を見繕って帰る支度しましょうかい」

「あ、ああ……」

何を非難されたのかよく分からないまま、エメラダと鈴乃は連れ立ってまずは新宿駅のコンコースへと足を踏み入れた。

するとエメラダはコートのポケットからメモ書きを取り出し、ときばきと目的地を割り出しはじめた。

「まずはーやはり靴下ですわねー」



プレゼントを入れられるような靴下は……多分売っていない」

見たことがあるわけでは無いが、エメラダが想像しているようなクリスマスマスアソートとしての靴下は、恐らく雑貨屋などで求めるべきものだろう。

「もしかして、私とんでもない勘違いを？」

「そうだな。勘違いというか、組み合わせ違いというか、まあ確かに大人同士でもプレゼントを贈り合う習慣はあるようだし、土産物の包装などもクリスマス仕様になるから、普通に日本らしい土産なりなんなり買えばいいのではないか？」

「う……ううう、困りました」

「何？」

「私、靴下に入れるからには、プレゼントはみんな細長いものなんだと思って、エミリアに頼んで、こちらのワインをネット通販で買ってもらってしまつて」

「……ええと」

懐くエメラダを前に、鈴乃は自分の数少ない知識の中からネット通販とはどういうものかを思い出す。

「ギフト包装などはしていないのだな？」

「頼んでません、靴下に入れる気でいましたから」

「西大陸は今の季節……ああ、ダメだな、向こうも聖誕祭が近いな。そんな状態で宮廷法術

士のエメラダ殿がワインを刺き身のまま人には贈れんか」

「は、はい。だからこちららの文化である靴下を」

「靴下から離れる。第一、アルバート殿やルーマック將軍以外は異世界のことを知らないのだから。靴下にワインボトルを突っ込むなど、どこの大陸の文化だと言いつつ祝する気だったのだ」

「あつ……」

エメラダの顔に浮かんだのは、本心からうっかりしていた、という表情。

「まず、包装紙か何かを買いに行こうか。ワインなら定型の箱などもあるかもしれない」

「よ、よろしくお願いします」

恥じ入った様子のエメラダを見ながら、鈴乃は少しの間、こんな姿の誰かを見たことがあるような気がした。

それが誰のことだったのか記憶を探りながら、包装用雑貨を賣える店を探して歩いていると、途中でマダロナルドが目に入り、それで気がついた。

先ほどのエメラダの姿は、半年前の自分自身の姿だった。

規模や手法を勘違いしたままお盆の迎え火を焚こうとして、真奥に盛大に説教されたのだ。

「ベルさん？」

「ああいや、私も随分怪しくなったものだと思つてな」

あのときの真奥のように鈴乃がエメラダをチョップすることは無いが、それでも自惚れでは

なく、自分は真美や惠美を凌駕するスピードで日本に馴染んだのではないかと思う。

もちろんそれは真美や青屋や漆原、それに惠美と千穂の協力あってこそなのだが、それでもまだ、サリエルや教会の手駒となつて真美や惠美や千穂と敵対したあの騒動から一年も経っていないのだ。

「エメラダ殿、結局何人に何を贈るつもりなのだ？」

「えつと〜人数はそんなに多くないんですけれど〜」

エレベーターに乗る間、指折り数えた送り先の数は本当にそれほど多くなく、大半はエメラダが自分で自分にお土産を持ち帰りたいだけなのだと分かった鈴乃は、それで却つて気楽にエメラダにアドバイスをすることができたのだった。

「本当に助かりました〜。これでなんとか面目も立ちます〜」

結局贈り物の包装雑貨以外にも、あれがいいこれがいいとあちこちショッピングして回つた末、午前中に来たはずなのに時間はもう夕方になっていた。

二人共両手に余るほどの買い物袋を掲げ、もちろんそれだけでは収まらず、結構な量、惠美の自宅に配達されることになっていた。

「そ、それは良かったが、その、いいのか、本当にルーマック將軍への土産がそれで……」

満面の笑みを浮かべて鈴乃に頭を下げるエメラダが抱えているのは、ゲームセンターのプライズゲームで取得したリラックス熊の巨大なぬいぐるみだった。

「はい。あの人もあ見えてく可愛い物にメが無いんです」

「そ、それは意外だ」

若くしてセント・アイル騎士団の総帥を務め、中央大陸復興のための五大陸連合騎士団の中でも重責を担うあのヘイゼル・ルーマックが可愛い物好きだったことは意外だし、エメラダがこの巨大なぬいぐるみをたった三百円でゲットしたことにも驚いた。

「ベルさんもう可愛いのは嫌いじゃないでしょう？」

「ま、まあそれはそうだが、そういうことでもないような……」

「それにこういう物で有力者に目頃から根回ししておけば、来年度の予算取得にも有利に働きますし」

ゆるいデザインの可愛らしい熊が極めて高度な政治的取り引きに用いられるのかと思うと、鈴乃の顔は引き曇る。

「というか、そこまで行くともはやこれは賄賂に当たるのではなからうか。」

かつて大法輪教会の汚れ仕事を一手に引き受けていた鈴乃だが、綺麗なものには極力綺麗なものにしておいてほしいものだ、と、リラックス熊の服そうな瞳を見ながら強く思う。

「ん？　ここは」

そのとき、鈴乃はふと見覚えのあるビルを見つけて顔を上げた。

「ああ、エメラダ殿。ここがエミリアが以前勤めていた会社だ」

「そうなんですかー」

エメラダがリラックス館を抱えたまま、ビルを振り回すと、屋上の看板には『DoCoDeMoJ』の文字。

「ということはい、リカさんもこちらに？」

「ああ、そういうことになるな。今日出勤しているかどうかは分からないが」

そういえば、最近芦屋が突然スリムフォンを持ちはじめたのには、梨香が関わっていると鈴乃は聞いていた。

以前テレビを買いにいったときとは違い、芦屋と梨香は二人だけで出かけたようだ。

「……いや、まさかな、アルシエルや梨香殿に譲ってそんな」

鈴乃はテレビを購入したときに真央が嘆きつけた梨香の想いのことに思い当たるが、すぐに自分の想像を否定するように首を横に振る。

梨香は身持ちが固そうに見えたし、第一今の梨香は、あのとときと違い芦屋の正体をきちんと把握しているのだ。

当然エンテ・イスラでの芦屋の所業も知っているはずで、そんな状況で芦屋への思慕を残したままにするなど……。

「う」

正体も事実も全て理解した上で未だに真奥への思慕を募らせているごく身近な人物の顔を即座に思い出し、鈴乃はまたも自分の想像を否定する羽目に陥る。

「ベルさん」

「いやでも、あの日もアルシエルはそんなに遅くならないうちに帰ってきていたし、その後梨香殿がアパートに来た様子も無いし」

「ベルさんあの」

「し、しかしこのところ、魔王も忙しそうにしているし、アルシエルやルシフェルもこそそこそと妙な動きをしているし、まさか……？」

「ベルさんったら」

「ん、んん？ どうした？」

「あそこ、あそこに」

「ん？」

「リカさんが」

「何っ？」

鈴乃が驚いて顔を上げると、道の向こう側から鈴木梨香がこちらを認めて手を振っている姿が見えた。

考えてみれば時間的には仕事を上がってもおかしくない場合である。

そんな折に会社の前を通りかかれば、鉢合はちあひわせてもおかしくはない。

梨香は鈴乃とエメラダが自分に気づいたことが分かると、そこで待っていてくれとジエスチヤーしてから、手近な信号を渡ってこちらにやってくる。

そして、梨香が信号を渡りはじめてから気がついたことだが、梨香の後ろから一人、女性がついてきている。

鈴乃も知らない類だが、梨香の同僚だろうか。

「鈴乃ちゃんエメラダちゃん、どうしたのその荷物の量！ えらく買物したもんだね」

二人の下までやってきた梨香は、鈴乃の知る普段の梨香と変わらない様子である。

「あれ？ 恵美は？ 今日はいないの？」

「はい！ 実は私が至急帰らなければいけなくなってる」

「え？ そうなの？ ええと……その、実家？」

梨香は一瞬だけ背後を気にしてから、不自然に「実家」という表現を使った。

後ろの女性は恵美の正体を知らない、という合図である。

「はい！ それで色々お土産を買おうと思っただんですが、エミは今日お仕事を抜けられないというのでー」

エメラダもそのことにきちんと気づき、エミリア、ではなくエミ、と呼ぶ。

「お土産とかをかうために、スズノさんにお付き合いたいだいてるんです」

「そうなんだ。でも随分急だね」

「いいえ、実はそうでもなくて、実はもっと早くに帰ってなきゃいけないかったんですけれど」

「へえ。でも、また来られるんでしょ？」

「それはまあ、状況次第ですかね」

大きな仕事が付いたからじゃあまた、というわけにも行かないのが宮仕えの辛いところである。

それに、これからの惠美とライラの関係性の進展によっては、エメラダはエンテ・イスラで誰よりも重い責務を、政治家として背負わなければならなくなるかもしれないのだ。

当分は、おいそれと日本に観光には来られなくなるだろう。

「でも実は私も一昨日まで実家に帰っててさ、昨日こっちに帰ってきたばかりなんだ。行っちゃう前に、会えて良かったよ」

「ご実家に？」

「うん。神戸のね。二年ぶりくらいだったかな。気づいたら随分帰ってなかったんだなって……っと、そうだ」

そのとき梨香は、ようやく自分の後ろでもじもじしている女性のことを思い出して、彼女を二人に紹介した。

「彼女、私と恵美の後輩で、清水真季ちゃん。んで、こっちが恵美の友達の時月鈴乃ちゃんと……ええと」

梨香は一時、エメラダをそのまま紹介していいのか悩んでしまうが、

「エメラダ・エトウ・ヴァと申します」。エミとは学生時代の友達で」

エメラダはストレートに本名を名乗った。

「あつ、遊佐さんのうちに滞在してるっていう、留学時代のお友達さんですね」
そこで初めて女性が生を出す。

「私、清水真季と申します！ 遊佐さんと、佐々木先輩にはお世話になってます！」

「佐々木先輩？」

清水真季と名乗った女性の口から出てきた名前が一瞬誰のことだか分からず鈴乃とエメラダは顔を見合わせると、

「千穂ちゃんのこと、千穂ちゃん」

それを察した梨香が補足する。

「実は真季ちゃん、千穂ちゃんとも知り合いなのよね」

「っていうか、梨香さんが佐々木先輩にうちを教えて、来てもらったんです！」

真季はなぜか顔の前でぐっと両手を握りながら、得意げに言う。

経緯は分からないが、恵美と梨香の共通の知り合いなら、千穂も知り合う機会があっても不

思議ではない。

だが、どう見ても真季の方が千穂より年上に見えるのだが、千穂のことを先輩呼ばわりしているのは何故なのだろうか。

「あれ……もしかしてこの前エミがお世話になったのって？」

「鎌月さんとエトウ・ヴァさんは、佐々木先輩ともお知り合いなんですか？」

「ああ、親しくしている」

「はい」

「遊佐さんと佐々木先輩、その後、どうされていますか？」

「どうとは？」

鈴乃が真季の問いを測りかねていると、

「何かね、恵美も千穂ちゃんも、真季ちゃんのうちで揃って進路相談してっみたいなのよ」

「『進路相談？』」

「はい！ そのときは遊佐さんがうちに二泊していつでもくれたんですけど、丁度遊佐さん、大学について知りたいことがあったみたいなんです、私の大学含め色々案内したんです。その最終日に佐々木先輩がうちに来て、やっぱり進路に悩んでたみたいだったので、悩んでいるから少しだけアドバイスさせていたいたんです」

「恵美殿が……」

「大学ですか？ それは日本のですよねー」

「はい、農業系の学部を色々手広く見てましたね」

鈴乃とエメラダの顔裏には、期せずして同じ思いが去来していた。

恵美はやはり、ライラの依頼を受けないのではないか、ということだ。

恵美がどれほど本気で大学を案内してもらったのかは分からないが、恵美は日本や地球の便利なもの、進んだものをエンテ・イスラに導入したいと常々言っていた。

そこに降って湧いた父ノルドとの再会は、恵美に故郷の村を復活させるという具体的な目標を与えたはずである。

小麦農家を実家に持つ娘が農業系の学問を修めようとするのはごく自然な流れであり、もし本当に学ぶ気があるのなら、エンテ・イスラで学ぶよりも日本で学んだ方が得るものは圧倒的に大きいだろう。

日本の大学は原則四年制だから、もし恵美が今から本気で日本の大学で学ぼうと思うなら、最低五年は日本から動かない計算になる。

「それが彼女の選択なら、何があっても私はそれを支持しますよー」

エメラダは真平の話を聞いて、自然に顔を緩ませた。

「エメラダ殿……」

「今の私は、世界中の人類……自分の家族よりもエミの生き方を優先したいですからー」

その言葉には、梨香と真季には分らないエメラダなりの決意が込められていた。

エメラダも鈴乃も、練馬のモズバーガーでガブリエルからエンテ・イスラを襲う驚異の真実とその原因にまつわる話を聞いている。

その上で、エメラダは恵美が世界を顧みず自分の幸せだけを追ったとしても、それを支持すると言っているのだ。

「彼女の邪魔をする奴がいたら、私が命を賭けて排除します。折角マキさんに色々願望を示してもらったのなら、エミはそれを活かすべきだと思います。」

「エメラダ殿の、思いの強さはよく理解した。」

鈴乃も、恵美に関してエメラダと気持ちは一緒である。

「もし千穂殿と二人で通えれば、恵美殿も心強いだろうな。」

「うーん、ちよつと志望が違えば大学も学部も学科も違っちゃいますからねー。一緒についてるのはなかなか難しいとは思いますが……」

真季はそう言うてから、ふと思ひ出したように口元をニヤけさせる。

「あーでも、佐々木先輩は、もしかしたら進学でも就職でもない第三の道があるみたいな感じもしましたし、正直言つて、そっちの方面でも色々気になると言うか……」

第三の道とはどういうことだろうか、鈴乃とエメラダが分からずにいると、梨香は苦笑しながら真季を窺める。

「真季ちゃん、悪趣味だよ」

「えー、だってだってー」

だが躊躇として目を輝かせる真季は引き下がらない。

「気になるじゃないですか。遊佐さんと佐々木先輩が気に入ってる男の人なんて、お二人を知ってたら気に入らない方がおかしいですよー」

「……っ目」

鈴乃とエメラダは、思わず吹き出してしまわぬよう必死で自制心を働かせた。

気に入ってる、の方向性は正反対だが、どう考えても真奥のこと以外有り得ない。

一体恵美と千穂は、真季の家でどんな進路相談をしたというのだ。

「アラス・ラムスちゃんが変わった苗字を言ってたんですけど、あの子がパパとか呼んでるところみると、その男の人は遊佐さんともたたらぬ関係って感じしますし！」

真季の推測がいちいち正しくはないが間違ってもいいので、鈴乃とエメラダは冷や汗しきりである。

他人の交友関係にとにかく言いたくはないが、これ以上真奥や恵美の周りに真実を知る日本人が増えるのは決して好ましいことではないし、本人達にとっても良い影響があるとは思えない。

なればこそ、恵美にはこれ以上誰かに自分と真奥達との関係性を知られてしまうような事態

は招かないでほしいのだが、どうも惠美の微妙な脇の甘さは、母親譲りの性格な気がしてならない二人である。

そんなことを考えていると、梨香がふと思い出したように尋ねた。

「アラス・ラムスちゃんて思い出したけど、惠美が仕事なのに鈴乃ちゃんとエメラダちゃんが二人で出かけてるってことは、今日アラス・ラムスちゃんは……」

「ん？ ああ、そうだ、今日はエメラダ殿の予定に付き合うために、芦屋殿に」

「ん、そっか。芦屋さんなら、安心だわね。携帯、うまく使えてそう？」

「あれはやはり梨香殿が？」

「まあね」

「ああ、私は滅多にやりとりはしないが、人との連絡がしやすくなったとは聞いた」

「ん、そっか」

それだけ聞くと、梨香は小さく微笑んでから、真季に向き直る。

「真季ちゃん、馬に蹴られて死にたくなけりやその辺にしときな。その分今日は私が身を挺して付き合っただけで言っただけよ」

「えー……でも私、死体蹴りの趣味は……」

真季は不満とも不本意とも思える表情で眉根を寄せて、言わなくていいことを口にしてしまふ。

瞬間梨香は、笑顏満面の般若へと生まれ変わった。

「よしよしよし、これは今日深夜コースだね。真季ちゃん、あんた今日、ゾンビにボコボコにされるサンドバッグね。とことん付き合ってもらうから覚悟して」

「え？ あ、え？ え、ええっと……そ、そうだ！ 折角ですからお二人も一緒に行きませんか？」

「え？」

下手を打つたと判断した真季は慌てて鈴乃とエメラダに振るが、それを止めたのは他ならぬ梨香であった。

「逃げは許さんぞ。あとこの二人も結構忙しい身なの。口は災いのもとだと今日はみっちり心に刺んで爆りなさい。爆すつもり無いけどね」

「あうう……」

「それじゃ、二人共、突然引き留めてごめんね。エメラダちゃん、もし帰る日決まったら後で教えてね。時間あったらお見送り行きたいからさ」

「あ、ああ」

「は、はい、分かりました」

真季という正体不明の嵐をひっ掴んで、二人に手を握って歩き出す梨香は、数歩歩いたところで足を止めると、

「更美に、もう少ししたら落ち着いて話せると思うって伝えといて。今日は、ごめんね」

「あ、あの、失礼しましたー！ いずれまたー！」

振り返らずにそう言い、二人の逸事も聞かないまま、叫ぶ真季を抱えて新宿の雑踏に消えていった。

既に日の暮れた繁華街に取り残された二人は、訳が分からないまましばらく立ち尽くす。

「なんだったんでしょー」

「分からん。分からんが……」

芦屋の名を聞いた瞬間の梨香の微笑みが、痛ましいほどに悲しく見えたのは、きっと気のせいではない。

梨香の芦屋への想いは鈴乃も以前から知っている。

先ほどの想像は杞憂ではなく、梨香と芦屋の間に、何か二人の関係を劇的に変化させてしまうような事態が起こったのだ。

「考えたところで仕方ない……が、しかし」

鈴乃もまた、梨香と芦屋の関係が、そのまま千穂と真奥の関係にも当てはまってしまうことを理解している。

そして今、悪魔達と人間達の間に大きく打ち込まれてしまう楔こそ、ライラと彼女の依頼なのだ。

現状、鈴乃スズノは真奥マウキと恵美ケミが、ライラやガブリエルの話に乗るとは思えないでいた。

全ての原因となる過去の話を聞かされて尚なほそう思える理由は、やはり千穂チホや漆原ウシハラと同じで、過去にどのような悲劇的な出来事があり、それがどれほど現在に強い影響を残しているように、今を生きている真奥や恵美には直接関係が無いということだ。

結局は、真奥と恵美が、ライラとのやりとりの中で個人的に決心をするか否かというごく単純な、個人のスケジュールの中で決まる話であり、そして現状、真奥と恵美のスケジュールは今の日本の生活こそがメインストリームとなっている。

だが、一方で鈴乃には不安もある。

千穂が、真奥との関係に悩んでいる。

戦う力の無い、自分の行く道を自分一人の力では決められない千穂は、ライラの登場によって真奥と自分の関係がなんなのか悩み、答えを欲していた。

もし千穂が、何かの形で真奥に自分との関係性を明白にするよう迫った場合、真奥の心の天秤てんびんがどう傾くのか、鈴乃には全く予想ができなかった。

「真奥真夫」であれば、千穂と心を通わせて、千穂を受け入れることもあり得るだろう。

だが「魔王サタン」は、今も彼の臣民しんみんと、エンテ・イスラ侵攻によって散った数多の命への責任を負っている。

エンテ・イスラ義征によって真奥の心の深い部分に触れた鈴乃だからこそ、真奥の心の動き

が全く読めないのだ。

何より鈴乃が憂慮するのは、真奥にとって千穂の気持ちを受け入れることも、千穂と共に生きる事が同義ではないかもしれないという想像である。

「意外と、逃げ腰だからな」

「誰がですか？」

「ん、ああいや、なんでも……」

「それにしても、リカさん何かあったんですかねー」

「どうだろうな。あまり突っ込んで探っていい話でもなさそうだが」

「うーん……」

「どうした？」

梨香と真季が消えた雑踏をしばし眺めたままエメラダは少し考え込んでいるようだったが、

「帰るのやめようかなー」

「はっ？」

突然そんなことを言い出した。

「い、いや、やめようかなって、そんな、い、いいのか？」

「はい、なんだか帰っちゃいけない気がしますしー」

「帰っちゃいけないというか、帰らないといけないんじゃないのか？」

「というか爆つたら勿体ないような」

「勿体ないって……クリスマスは別に来年以降だって……」

「来年以降があれば、ですよ」

「んっ」

エメラダがすっぱり言つてのけたことに、鈴乃は塵を突かれた。

「来年以降、ありそうですか？」

「いや、それは、その」

「例の話、もし魔王やエミリアが受けると決めれば、ササキさんの言う通りいつまでかかるかわからない。魔王とササキさんとエミリアの選択次第で、私達はもう二度と日本のクリスマスを見ることは叶わないかもしれません」

表情はいつもと変わらないまま、厳しい声色で告げるエメラダに、鈴乃は一言も返すことができなかった。

「だからこそ、今私は日本を離れるわけにはいかない。エミリアは、日本にいたがっています。今のリカさんとマキさんのお話を聞いて確信しました。エミリアは、望みが無いと分かれば最初から足掻いたりしない子です。でもあの日のエミリアは、私にも秘密でマキさんのお宅で自分の夢を探ろうとした。エミリアは、残りたがっている。なら、私はエミリアの傍で、エミリアの道を応援しなきゃいけません。来年も、来年以降も、この国のクリスマスを通すことが

できるように……だから」

エメラダは、ここでようやく鈴乃の顔を見て笑顔（笑顔）を浮かべた。

「今年のクリスマススをエミリアと一緒に目いっぱい楽しんじやいますう!! さう! 予定変更しー 皆さんに配るためのクリスマスプレゼントを買いに行きましょー!」

「はあ? ちょ、ちよつと待て? セント・アイレやアルバート殿は……」

「そんなの知ったことじゃありません。お詫（わ）びのお土産（みやげ）をうぐーとで全部送りつけてやればいいんです。はらうまずアラス・ラムスちゃんへのプレゼントですよ。未だにあの子私に慣れでくれませんかからね」

「え? こ、これからまた色々買い足すのか?」

「クリスマスプレゼントはまず子供がもらうものなんでしょう? あの子の好み（好み）のことは、ベルさんの方がよくご存じでしょうから」

「い、いや待て、ちよつと待て! 本当にそれでいいのか!」

「ふふふーシャンパンやワインで乾杯して、ターキーダリルにスコッチエッグにネギト口巻（くまき）にイセエビに栗（くり）さんとのブッシュ・ド・ノエル」

「何か妙なものが色々混じっているぞ! エメラダ殿! 待ってくれ!」

唐突（いきなり）に駆け出すエメラダの後を、鈴乃は泡（う）を食って追いかける。

それから、たっぷり二時間、エメラダの買い物行動（かいぶどう）に振り回された鈴乃は、帰宅する頃には

くたびれ果てて言葉も出なくなっていました。

「ベルってそんなスタミナ無い奴だったっけ？」

「いや、スタミナがどうこういう話ではなくてだな……」

「来たばかりの頃は無闇やたらと買い物をしていたと魔王様に聞いたが？」

「いや、そういう話でもなくてだな」

「すずねーちゃ、おつつかしました」

エメラダにさんざん新宿を引き回された鈴乃は、二〇一号室のコタツにあたりながらぐったりとしていた。

漆原と吉屋とアラス・ラムスが三者三様の感想を漏らす中、鈴乃はエメラダとの買い物道中を思い出してげんなりとする。

「人酔いというか、とにかく熱気に当てられてしまつて……」

平日とはいえ、輝走のクリスマス商戦まつた中、アフターファイブの新宿の町を、大荷物を抱えたまま買い物のハシゴをするのにはそれなりの覚悟が必要である。

「それで？ エメラダ・エトウーヴアは永福町に帰ったのだろうか？ 今日はまだエミリアも魔王様も仕事中だが、貴様は一体なんの用があるのだ」

「ああ……」

「う？」

芦屋の問いに、鈴乃はパソコンに向かう漆庫の屑の上で肩車をしてもらっているアラス・ラムスをちらりと見た。

「まあ、エメラダ殿の頼みというか、お使いというか」

「何？」

「彼女は、あまりアラス・ラムスに好かれていないようなのでな」

「なんなのだ、ハッキリせんな」

ジャガイモの皮を剥きながら首を傾げる芦屋は、鈴乃の言わんとするところがピンと来ないようだ。

「……すまない、少し、いいか」

はつきり言わないと分からないと踏んだが、きりとしてアラス・ラムスの耳にはまだ入れたくない話題であるため、鈴乃は少しだけ名残惜しそうにコタツから離れると、芦屋を共用廊下に呼び出した。

「なんだというのだ」

「いや、実は……魔王とエミリアの許可が必要な話なのだが」

鈴乃は、エメラダがアラス・ラムスの気を引くために、クリスマスプレゼントを贈ることを

画策していることを話した。

「実は今日のうちに買ってしまったが、結局アラス・ラムスの好みが分からないことにはどうにもならないのと、あとは周りの大人の空気もな」

「ふむ」

「確か、魔王もエミリアも、二十四日、二十五日の両日仕事だろう？」

「なるほど、そういうことか」

声屋は鈴乃の言わんとするところを理解して頷いた。

このアパートに集う千穂以外の者にとって、クリスマスは異世界日本に数多あるイベント事の一つに過ぎない。

せいぜいがアルバイトのシフトが乱れる時期、くらいの感覚だが、エメラダがアラス・ラムスにクリスマスマスブレゼントを贈りたいとなると話は変わってくる。

年中行事を教えるということは、子供にとって重要なことだ。

その目を、季節を、街の空気を特別だと教えることにより、それは子供の中で習慣化し、これから生きていく中でずっとその空気の特別感を認識させることになる。

だがここで問題になるのは、先述の通りクリスマスは日本、もっと言えば地球の習慣であり、鈴乃にとっても声屋にとってもなんら重要視すべき習慣ではないということだ。

そもそも鈴乃は信奉する神が違うし、悪魔の声屋にとっては人間の聖人の記念日など何故視

わなければならぬのかといった具合だ。

「正直、アラス・ラムスにクリスマスという習慣を教えていいものかどうか判断ができなくてな」

「貴様の言うことは分かるが、どうとでもなるのではないか」

「そうか？」

「エメラダ・エトウーヴァがアラス・ラムスに物を贈りたいというのを止める理由は無いし、クリスマス教えるのがまだ早いと言うのなら、クリスマスとは無関係にプレゼントをしろと言えればいいだけの話だろう」

「それはまあそうなのだが」

「逆に魔王様やエミリアがアラス・ラムスにクリスマスを教えてやりたいと言うのであれば、それを止める理由も無い。私と魔王様も、色々理由をつけながらも、この前の一月は初詣などに行つたものだ。アラス・ラムスも日本で暮らしている以上、ある程度社会常識を知る権利や必要はあるだろうからな」

芦屋の言うことは至極最もだが、鈴乃の胸中には素直に頷けない理由があった。

エメラダの、あの一言である。

「その日本暮らしはいつまで続く？」

「何？」

「来年は、あると思うか？」

「……何を言っている」

鈴乃の见上げる瞳から目を逸らすように、芦屋は軽い調子で言った。

「貴様とて話は聞いているのだろう？ 魔王様が今、マダロナルドでどんな仕事をしているか。魔王様はようやく日本での大望の足掛かりを得たのだ。それを放り出して、どこかに行くとも思っているのか」

「……信じていいのだな」

鈴乃の思いつめたような目に、芦屋は怪訝そうに言う。

「なんだ。貴様はどちらかといえば、魔王様やエミリアにあの話を受けてもらいたい側だろうに」

「見損なうな。友の人生を生贄に差し出すような趣味は私には無い」

鈴乃は吐き捨てるように言った。

「ならば色々余計なことは考えるな。アラス・ラムスにクリスマスプレゼントをするかどうかは、貴様やエメラダ・エトウ・ヴァが、エミリアに伺いを立てればいいことだろう」

「……そうか、分かった」

「話は終わりか？ 私は食事の準備に戻るぞ」

芦屋がそう言って身を翻したその背に、鈴乃は思い出したことを口にした。

「アルシエル」

「ん？」

芦屋はまた呼び止められて顔を壁めて振り向いたが、

「今日、新宿で梨香殿に会った。アルシエルが携帯電話をうまく使えているかどうか、心配していたぞ」

「……そうか」

その瞬間、自分の表情が変わったことには気づいているのだろうか。

だが本人が気づいていてもいなくても、鈴乃は、芦屋と梨香の間でただならぬ何かがあったことだけは十分に察することができてしまった。

「連絡してやったらどうだ？」

「そうだな」

芦屋はそれだけ言々と、そのまま部屋の中に戻り鈴乃を廊下に残したままドアを閉めた。

「……何をしているんだか、私達は」

鈴乃はぼつりと歌くと、聞きされた二〇一号室の扉の前で悄然と立ち尽くした。

悪魔と一緒に赤ん坊にクリスマススを教えるかどうか悩むなど、冗談にもならない。

だがこんなことをいちいち「日常だ、日常でない」と振り返って自嘆してしまうほどに、今、鈴乃は永遠に続くかと思えたこのアパートの奇妙で居心地の良い日常が失われつつあるという

予感に囚われていたのだ。

みんなで練馬に行ったあの日以来、真奥と恵美とライラとの間で密な交渉が持たれているようにも見えないし、二人共まるであの日はライラの悪態を見た以上のことなど無かったように振る舞っているように見える。

「私は……みんなにどうしてほしいんだろう」

鈴乃がしまっておけぬ形の分からない思いを隠れさせたときだった。

「あれ？ スズノ？ 何してんノこんなとこデ。ぼんやりしてサ」

いつの間にか、鈴乃の目の前にはどこかのコンビニで買ってきたと思しきアメリカンドッグを両手に持ったアシエスが立っていた。

「ああ……アシエス。なんだ、魔王はもう仕事を上がったのか？」

鈴乃は心なし疲れた表情で真奥の姿を探すが、気配すら無いので首を傾げた。

アシエスと真奥は、アラス・ラムスと恵美のように、一定以上の距離を離れることができない。

真奥がマダロナルド・幡ヶ谷駅前店で働いている普段ならば、笹塚近辺はその距離の範囲内なのだが、真奥が今取り掛かっている正社員登用研修は、笹塚や幡ヶ谷を離れた色々な場所に移動することになる。

必然アシエスは真奥に帯同せざるを得ず、かと言って木崎の前でアシエスを連れまわすわけ

にはいかないために、真奥が研修に出ている間、アシエスはずっと融合状態なのだ。

「ううん。マダ。でも幡々谷のお店には帰ってきてルヨ。見えないとこで出してもらッテ、私だけ先に帰ってきたんだ。今ごろなら丁度アシヤが夕食作ってるだろうからッテ」

姉のアラス・ラムスと違い、こらえ性のないアシエスは、真奥に言わせると融合状態を一分一秒でも早く解除したいほどにうるさいらしい。

それで幡々谷に帰ってきたのでこれ幸いと彼女を放逐したのだろう。

「夕食を食べに来ているのに何故買ひ食いをしてるんだ」

「この前ミキタイとアマネがサ、オトーさんかミキタイん家以外でご飯食べるときは、外である程度お腹に物入れてからゴチソウになりなさいってお小遣いくれたんだ。そうじゃないとみんなが泣くッテ」

「ああ……」

鈴乃は幾度となくアシエスに食事をたかられて米びつの底が見えてしまい真剣に涙目になっていた。芦屋の顔を思い出してつい納得してしまう。

するとアシエスは、そんな鈴乃の納得顔を見て、少し不満そうに頬を膨らませた。

「あのサア、前からちよっと気になってたんだけど」

「うん？」

「私ッテ、そんなに食べすぎてル？」

「お……っ」

鈴乃^{すずの}は立ち止まっているのに何かに願^{ねが}いて転倒^{てんたう}するような錯覚^{さくかく}を覚えた。

そしてその錯覚^{さくかく}はどうやら表情に表れていたらしく、アシエスは何かを察^{さつ}したように膨^ふれっ面^{めん}を締め顔^{かお}に変えた。

「そっカー、やっぱそうなのカー」

「あ、アシエス？」

「ウスウスそうじゃないかとは思ってタ」

ウスウスという日本語の意味をどこまで把握^{はさ}しているのかも怪しいアシエスに、鈴乃は色々な意味でかける言葉^{ことば}が見つからない。

鈴乃^{すずの}が知る限り、アシエスが食べすぎていない姿など見たことが無い。

その割には体型に目立った変化は見られないが、宇宙一の弁護士^{べんごし}がついたところでアシエスが度を越えた大食いであるという世界の審判^{しんぱん}は覆^くらないだろう。

「うーん、これはマオウに直談判^{ちくだん}しかないカナ？」

するとアシエスは、突然そんなことを言い出した。

「魔王に直談判^{ちくだん}？ 何をだ」

「色々。もっとアシヤにお米買^かってあげてーとか、融合^{りゆうごう}してる間に今の倍食^くべてーとか、ケータイ買^かってーとか」

まだ携帯電話を諦めていなかったのかとか、そもそも米の量の問題ではないとか色々あるが、いずれにせよ残念ながらアシエスの言う色々を真奥は絶対に許さないだろうということは鈴乃にも分かる。

「イヤー、意外と行ける行ける。ネーサマ盾に取ればマオウなんてラクシヨードヨ」

「その切り札は使いすぎるとエミリアやアルシエルも敵に回す諸刃の剣だぞ？」

アシエスが自分の要求を通したいときには何かとアラス・ラムスをダシに使うシーンが多いことは鈴乃も承知していたが、真奥も恵美も、そして芦屋も鈴乃も、アラス・ラムスの将来を思えば簡単にアシエスの要求には屈しない。

事実、

「聞こえているぞー」

二〇一号室の中から、芦屋の釘を刺す声が飛んできて、鈴乃もアシエスも揃って思わず首を練めた。

「アチャー、シツパイシツパイ。そうだこのアバート壁薄いんだよね。次からはバレないよう計画練らないとナ」

「アシエス……」

一応怒られているのにまるで惹かれる様子の無いアシエスにさすがの鈴乃も呆れ顔。

「確かにルシフェル並みに動かずに食べてる私が言うのもナンだけどさー、今はそーゆーお願

いしたっていい時期じゃナイ？　だから私は諦めないヨ！」

「ん？　いい時期？」

「そウー　マオウはシラバツクレタけど私知ってるんだからネー　クリスマスはゴチソウが食べられるんだ！」

「ひっ……」

アシエスの食べかけのアメリカンドッグからケチャップが飛びのを鈴乃は間一髪で回避しながら、自分ではなく、二〇一号室の中から男性の息を呑む声なき悲鳴が聞こえた気がしたが、敢えて無念無想でそれを聞き流した。

「ま、持ったアシエス！　まずそれを全部食べてからにしろー　ケチャップが衣類についたら洗濯が大変だ！　あと、アラス・ラムスの前では、その話はまだ控えてくれー」

「へ？　アメリカンドッグ？」

「違うクリスマス話だ！」

言ってから、鈴乃は自分の方が声が高くなっていることに気づき、慌てて声を壓めてアシエスに耳打ちする。

「その……アラス・ラムスは、クリスマスを知らない。何かするにしても、折角なら直前まで内緒にして、喜ばせてやる方がいいだろう？」

「オー　ナルホド！　サブライズってやつだね！」

先ほど音屋とタリスマスを教えるかどうかで話し合った鈴乃だが、アシエスを止めるにはアシエスが楽しいと思う方法で止めるしかないことはよく分かつていた。

アラス・ラムスを喜ばせるため、たとえば、少なくとも当日まではアシエスの口からアラス・ラムスにタリスマスの概要が漏れることはないだろう。

「分かったヨー。じゃあそれも含めテ、マオウには色々相談しよう。今は慣れないことやって気が立つてるっばいカラ、少し落ち着いてからになりそうだけド……」

アシエスは、鼻から上は真顔のまま両手のアメリカンドッグを同時に頬張るという離れ業を見せ、やがて両手に串だけが残る。

「とにかくネーサマへのサブライズは了解したヨー！ てことはスズノも何か考えてるんだネ？」

「あつ？ ああ、私はその、まだ計画段階だが、エメラダ殿がかなり気合を入れて……」
突然振られた鈴乃は、勢いでエメラダのことをバラしてしまう。

嘘ではないが、他にもタリスマスで何がしかを企画している人間がいると知ってしまったら、いざというときにアシエスが引っ込んでくれなくなるかもしれない。

だが、一度口から出た言葉は取り消せない。

アシエスはまるで両の瞳に炎が灯ったように気合十分の表情になり、食べかすの残ったアメリカンドッグの串をまるで勇者の聖剣のように高々と掲げて吠えた。

「シーー 気合入ってきター！ ついでにお腹も減ってきター！」

「なっ？」

「ベルー 貴様！ 後で覚えていろ!!」

「アシヤーそろそろ魔王帰ってくるヨー今日のご飯なーニーー！」

共用廊下に面したキツチンの窓からの声屋の恨み節が聞こえてくるや否や、アシエスは二〇一号室へと駆け込んでいってしまった。

「恐ろしい嵐だ……」

鈴乃の目の前から過ぎ去った嵐は、これから二〇一号室内で猛威を振るうことだろう。

「……仕方がない。アルシエルに申し訳ないし、魔王も帰ってくるというから何か腹に溜まるものをさっと作って差し入れるか」

アシエスのおかげと言うべきか、せいでと言うべきか、気落ちが強制的に切り替わった鈴乃は、間もなく聞こえてくるであろう声屋の怒声に背中を押されながら、一度二〇二号室へと戻ったのだった。

漸

アシエスによって魔王城の夕食が蹂躪されてから数時間後の夜遅く。

ふたふたうちこす

永福町にある恵美の家のベッドで、アラス・ラムスはもうすやすやと寝息を立てていた。

その横の床の上で、恵美は頭を抱えて蹲うずくまっており、その隣で恵美を慰めるようにエメラダがその背をなでている。

「まあまあそんなに落ち込まなくても」

「これが落ち込まずにいられると思う？」

「仕方ありませんよう。エミリアも色々大変だったんですし、元々エンテ・イスラには無い習慣ですし」

「そういう問題じゃないのよ……」

恵美は顔も上げられないまま呻うないた。

「いくら自分が大変だったからって、アラス・ラムスのことを考えなくていい理由にはならないわ……この子だって、沢山たくさん大変な思いしたのに」

恵美はそこでようやく顔を上げて、引きちぎらんばかりに握っていたシフト表を聞いた。

「ああ、なんてこと」

恵美は一か月前の、己の浅はかきを呪ののっていた。

十二月二十四日と二十五日。

恵美も真奥まおくも、ぼっちリシフトに入っているのだ。

「もおっ……」

そしてまた、恵美は頭を抱えて蹲うつすまってしまおう。

「これは一言わない方が良かったかもー」

恵美の劇的な反応に、エメラダは少し困惑していた。

仕事上がりで魔王城からアラス・ラムスを引き取り、恵美はマンションに帰ってきた。

エメラダは恵美がアラス・ラムスを寝かしつけるのを待ってから、アラス・ラムスにクリスマスプレゼントを贈ってもいいかどうかを、なんら他意なく尋ねたのだ。

ところが、質問した途端に恵美は凝固してしまった。

「クリ……スマス？」

「は、はい。そのうちこちらの聖人の誕生を祝うお祭りだと聞いたんですけど」

「クリスマス……ス？」

「え、エミリア？」

「クリスマスって、いつだった？」

たった今アラス・ラムスを寝かしつけたのに、起きてしまうのではないかというほどの悲鳴を上げた。

そしてカレンダーとシフト表を確認してからずっと、この有様なのだ。

「去年は……どうでも良かったから……っ！」

「え、エミリアーあんまり自分を責めないで……」

「どうして私、今日まで気がつかなかったの……いくらでも気づくチャンスはあったのに、シフトの希望出すときも、シフトが出たときも、センタッキーがチキンバーレルの予約始めたってサリエルが騒いでたときも……」

「それはうすがにどこかで気づくべきだったと思いますねー」

サリエルの段になって、エメラダも苦笑気味だ。

「聖人の誕生日でしょう？ お祭り騒ぎするって感覚が私には分からなくて、去年も変ななって思いながら過ごしてたのよ。一応ケーキとかは買ったんだけど、近くのコンビニで一人で小さなホールケーキ買って食べただけで、特別なことした感覚全然なくて……それで」

「忙しかったですから、最近は特に自宅とアパートと仕事の往復だけで、それほど町の華やかな雰囲気も見なかったんですねー」

「しかも明日からクルーは全員サンタ帽着用よ……ああもうー」

恵美も、クリスマス自体を失念していたわけではない。

だが、逆に去年の経験が仇となり、何かを祝ったり誰かと遊んで盛り上がったたりするような日であるという認識が全く無かった。

覚えてることといえば、二十五日の夜から二十六日の朝にかけて、街の装いがクリスマスからお正月に一齐に模様替えしてしまったのに驚いたことくらいだ。

「大丈夫ですよ。違う日にやったっていいじゃないですか。実際私達には直接関係の無

「話ですし」

「関係ないわ。関係ないわよ。でも……アラス・ラムスには、これから楽しいことがいっぱいあるって、教えていきなかつたのに……その最初から……ううう……」

「えうとく」

エメラダはこの一言に、少し意外そうな顔になった。

「教えたかつたんですか？ クリスマスを」

「うん」

「それってつまり、来年もまたやるってことですか」

「……うん」

「……………それってつまり」

「深い意味は無いわよ」

惠美はようやく身を起すと、深くため息をついた。

「来年の地球の十二月二十五日に、私とアラス・ラムスがどこにいるかなんて分からないもの。去年の今頃は、絶対に魔王を倒してエンテ・イストラに帰るんだって思ってたし、一昨年の今頃はひたすら戦ってたのよ。今、うっかりバイトのシフトを入れちゃって後悔していることを、きくと私は来年の今頃、バカなことしたなあって後悔しながらきくと笑ってるわ」

「……………でも、きくと来年の今日もう一緒にいるんですね。この子と」

「……うん」

「その子の他には、誰がいるんですか？」

「みんなよ」

「みんなって？」

「みんな、そのとき私が大切に思うみんながいるわ」

そう言うとき、恵美は立ち上がり、バッグの中からスリムフォンを取り出し、どこかへ電話をかける。

「もしもし、今ちよつといい？　なんだか後ろから凄まじい泣き声が聞こえるけど取り込み中？」

ああ、アシエスが夕食に……そう、それはお気の毒にね」

アシエスの名が話題に出るということは、ヴィタ・ローザ^{ヴィタ・ローザ}嫁^嫁の住人の誰かだろうとエメラダは見当をつけた。

「それでね、クリスマスamasのことなんだけど……そうじゃないわよ。人数ギリギリだし、今更シフトを変えてはいいなんて言いやしないわ。そうじゃなくて、エメがね……もう何か聞いたの？　ええ……うん、私も同じような感じよ。とにかく、その話の発端はエメがアラス・ラムスにクリスマスamasプレゼントをあげたいって言い出して……うん、そういうこと。だからね、当日はもうダメだけど、二十三日か二十六日のどちらかで、私達のどっちかきえいればいいから、何かできないかなと思って。そう」

ここで、エメラダは少し意外に感じた。

相手は真奥だ。アラス・ラムスに関すること、恵美が「私達のどちらか」という相手は、真奥以外有り得ない。

エメラダが推移を見守っていると、恵美はしばらく相槌を繰り返していたが、

「え!? あ、ちょ、ちょっと待って、千穂ちゃんにはまだ……え? なんぞって……なんでもよ! 最終的にはきちんと相談はするけど、まだちょっと早いわ! 相談するときは私から話すから、明日会っても余計なこと言わないでよ? いーから!」

真奥が、千穂に相談をしようかと提案したのだろうか。その途端、恵美は目に見えて慌てはじめたが、会話の全貌が聞こえないエメラダには理由は分からない。

「エメ? うん、なんだか帰るのやめにしたみたい。知らないけど、エメが大丈夫って言うんならそうなのよ。うん、はい、じゃあね、お疲れ様」

特に双方が声を覚げることもなく、数分で通話は終了した。

「魔王ですか?」

「うん、寝る間際だったらしくて怒ってたけど」

寝る間際まで一体誰が電話の後ろで泣き声を上げていたのか気になるエメラダだが、恵美はそのことには触れず、ベッドで両手を上げて眠るアラス・ラムスの寝顔に目をやる。

「言わんとすることは分かってくれたみたい。でも、あいつも悪魔でしょ? アラス・ラムス

とクリスマスなんて考えてもいなかったみたいで、ちょっと凹^くんでたわ」

「凹^くむんですか」

「アラス・ラムスのことだからね」

恵美はスリムフォンを充電器に挿してテーブルの上に置くと、脱力したようにため息をつく。
「特に魔王も今忙しくしてるから、クリスマスが近いつてカレンダー上では分かってても、実感は無かったみたい。人間がケーキやチキンをやたら食べる日くらいにしか思ってたって、言い訳してたわ」

「マダロナルドのケーキは誕生日仕様だけじゃないんですか」

「去年はシフトから外れてて、アルシエルと一緒^{いっしょ}にどこかのコンビニでケーキ販売のバイトしてたらしいわよ」

恵美はそう言うのと、ぐしやぐしやになってしまったシフト表を眺^{なが}める。

「二十四日は千穂ちゃんがお休みだけど……この前の誕生日会^{たんじうひ}のときと違って、魔王の研修の予定がどうなるか分からないし、お店でつてわけにもいかないのがね」

「お店でアラス・ラムスちゃんか、魔王とエミリアが揃^{そろ}ったところで『ママ』って言っちゃったらそれこそパニツクじゃありませんか」

「それもそうだし、その日は他の先輩クルーの人達もいるから、ますます誕生日会^{たんじうひ}のときみたいなグレーゾーンのことはできないわ。ああ、どうしたらいいんだろ」

言いながら恵美の視線は、衣装ダンスの上に飾られているフォトフレームに行っていた。十月の千穂との合同誕生会でもらったフォトフレームの中の一つで、そこには恵美と千穂を中心に、あの会に参加した真奥以外の全員が写っている。

真奥は、なぜかあのとき頑なに写真の輪に入ろうとしなかった。

この写真を撮ったのは真奥で、戸屋が撮影役が変わると言っても、今自分は仕事だからとかなり強い口調で言っていたように思う。

エメラダも恵美の視線を追って写真を眺め、恵美の顔で笑顔を浮かべる千穂の顔を見ながら尋ねた。

「どうしてササキさんに相談しちゃダメなんですか？ クリスマスをよく知らない私達があれこれ考えるより、彼女からアドバイスをもらった方が確実だと思うんですけど」

「あー……それはね……」

エメラダの問いに、恵美は考え込むように口を開くが、なかなか言葉が繋がらない。

それどころか、なぜか少しだけ顔を赤らめさせているようだ。

「その……私の考えすぎ、というか、自意識過剰というか、とにかくそういうのかもしれないんだけど」

「はい？」

「最近ね、ちよっと私、千穂ちゃんと微妙にうまく行かなくて」

「ええー!? まさかエミリア、ササキさんとケンカでもー!?」

エメラダは心底驚いた。

恵美と千穂が仲たがいするような事態は、千穂との付き合いがまだ深くないエメラダでもなかなか想像できない。

「ううん、そういうんじゃないの。普通にお話するし、ケンカとかそういうんじゃないの。でもその、アラス・ラムスのこととなると、どうしても魔王抜きには話せないから、それをのっけから千穂ちゃんにどうしようって相談するのは、なんだか、ね、ちょっと」

「ええー? なんだかよく分からないんですけど?」

「うー、もうなんて言えばいいんだろう。ああ、変な汗かいてきた」

「エミリアー? なんだかおかしいですよ?」

「わ、分かってるわよ、自分がおかしいのは自分が一番よく分かってるわ。その、つまり」

恵美はこの寒いのいうっすら汗をかいていて、ばたばたと自分を刷^{かき}ぎながらわざとらしくエアコンのリモコンを手にとって温度を見たりしている。

「……私、さ。この前の東大陸の一件で、かなり魔王に助けられたじゃない?」

「そうですねー」

「それで、その、今、マダロナルドの新人タルーとして働いてて、当たり前のように時間帝責任者の魔王が私の研修をしたわけで」

「私に何を言っただけですか？」

「……………えっと」

恵美はたつぷり三十秒は黙^{もく}ってから、蚊^すの鳴くような声で言った。

「……………分かんない」

「じゃあ、素直な感想でいいですね？」

「……………はい」

「事と次第によっては、私は今すぐ魔王を討伐^{とうはつ}しに行かなければならないかもしれませんが、エメラダの声色は本気であった。

「なんだか今のエミリアは、私が知っているどのエミリアとも違うエミリアです。こうなった原因^{ゆえん}如何^{いか}によっては、私は各方面に然^{しか}るべきご挨拶^{あいさつ}が必要です」

「……………えっと」

「今の私はとても感情的です。これまでの理屈抜きに、何があったか知りたいと思っています。あなたと、魔王の間にあった「色々」について」

「ま、待って？ な、何も無いわよ？ 変なことは何も……………」

そこまで言ってから、恵美はあの『重大なエラーを起こした夜』のことがフラッシュバックしてしまい、顔が一段階また赤くなる。

そして、恵美のそんな分かりやすい変化をエメラダは見逃さない。

「あなたがササキさんにヤキモチを妬かれた、ということを目覚してしまふほどの「何か」があった、というだけで、私の心中は大嵐です。穏やかじゃありません」

「ほ、本当になんでもないの！ なんでもないことの積み重ねなのよ！」

「なら話してください。なんでもないことなら話せるはずでしょう？ あの粗暴で汚い悪魔は、私の大切なエミリアに何をしたんですか？」

「だ、だから何も無いって！」

「アラス・ラムスちゃんが起きてしまいますよ。お静かに」

「え、エメが変な責め立て方するからでしょ！ 話すから！ 話すからちょっと離れて！」

恵美の悲鳴に、エメラダは素直に従うが、本当にちよつとだけ離れた場所で正座して、真っ直ぐ恵美の目を見据えている。

「ほ、本当よ、本当になんでもないのよ」

その目が怖くて、つい言い訳じみた一言から始まった恵美の話の顛末を聞くうちに、

「はあ……ばあつかばあつかしい……」

エメラダの姿勢はどんどん崩れていき、目からは責めるような光が失われて呆れに溺り、最終的には寝そべてどこから取り出した煎餅を嚙りはじめてしまった。

「知ってますか？ そういうのってー地球じやストックホルム症候群で言ってる！」

「知ってるわよ調べたからっ！」

一方の恵美は、上がった体温と冷や汗で溶けてしまいそうになっている。

「まうあ？ 私もですわー？ いっくら表面上偉くなったからってわー？ 魔王とエミリアの間にも？ 何かあったなんて思ってますけどわー？ はあーあー、ササキさんもう大人びて見えてー、やあっぱりまだまだ女の子なんですわー」

恵美や千穂より余程幼く見えるエメラダに言われては、形なしである。

「まーあの魔王の性格なら分らないですしー？ エミリアのためというよりもう？ アラス・ラムスちゃんのためと言って通じそうなことばかりですしー？ そのいっぱいっばいになっちゃったときにも？ 思わず抱きついちゃったってのを除けばですけどー？」

「うううううう」

恵美はその場で溶けて委^じんで消えてしまいたくなっている。

「ササキさんがヤキモチを妬いてしまうような事象はうどこにも起こってませんわー」

「で、でも実際に魔王とライラがそう言ってる」

「魔王とエミリアの距離がうなまじ今まで開いてたからー、普通のこととしてでもグッと距離が縮^{ちぢ}まったように見えちゃっただけですよわーそれー」

「う……ま、まあそういうこと、かも」

「はあーいばかばかしいーばかばかしいー」

「あ、あんまりバカバカしい言わないでよー 自分でも自分に混乱してるんだからー」

「ああ、エンテ・イスラがエミリアから奪った青春の代償は大きいですね。一緒に旅して苦勞を分かち合った男性も、むっさいオッサンとジジイでしたしね、はあ」

どうやらエメラダが、ライラと同じ次元で自分に呆れているであろうことは、恵美も理解している。

だが、いずれにしろ恵美にしてみれば、そんなこと言われたってしょうがないじゃないか、ということになるのだ。

「でもまあ、そういう事情なら、ササキさんに相談し辛いっていうのもなんとなくは分かりました。そりゃあ自分でシフト埋めておいて、あなたの片思いの相手との子のクリスマスパーティー開きたいんだけどどうしようなんて言えませんかよね」

「エメっ!!」

さすがにストレートすぎる物言いに、恵美は怒りとも驚きともつかぬ悲鳴を上げるが、

「うぐむう……」

「あっ……」

さすがにアラス・ラムスが不快そうに顔を歪めて寝返りを打ったので口をつぐんでしまう。

「分かりました。そういうことでしたら、私が言い出しっぱでもありますし、私からササキさんとはベルさんに相談して、なんとかしますよ」

「え？　そ、そう？」

「あり……それとリカさんにもお願いした方がいいですかね。誕生会のこと考えてもうリカさんがいれば色々アイデアをいただけそうですし」

「え、あ……その、梨香は……」

「なんですか？ まさかりカさんとも何か気まずい事が？」

「そ、そうじゃなくて……」

「今日会いましたけど、特に変わった様子は見受けられませんでしたよ？」

「え？ 梨香と会ったの？」

「ええ。会社の前で。マキさんと仰る後輩の方と飲みに行かれる途中だったみたいですけど」

「最近まで遠方のご実家に帰省されてたらしいです」

マキさんとは清水真平のことだろう。

実家に帰省とは、つまり故郷の神戸に帰っていたということだろうが、恵美はその事実を知らなかった。

「……」

もちろん梨香には恵美に逐一行動を報告する義務など無いが、声屋と出かけたときのメールから今まで連絡が無い間に帰省していたのだとしたら、色々と気になってしまう。

「あ……それともこれは私が伝えていいことかどうか迷うんですが、伝言を承ってたんでした」

「何？」

「もう少ししたら落ち着いて話せると思う」って、エミリアに伝えてほしいと。なんのことはかは分かりませんが」

エメラダには分からなくても、恵美に思い当たることは一つしかない。

「……そう、分かった」

「それもうりかさんに相談しちゃダメっていうのと関係してるんですか」

「ん、もう、何が関係してて関係してないのか、分からなくなってきたわ」

「エミリア？」

「来年……来年、私は、どこで、誰を大切に思ってるんだろう」

「来年のことを言うと思魔が笑うのでは？」

「鬼よ。鬼と思魔は全然違うわ。鬼に笑われた方がまだマシ。思魔なんかに笑われたら……」

恵美はふっと顔を伏せて、膝を抱えた。

「今の私だと、本気で凹んじやいそう」

「……」

さすがのエメラダも、ここまで来るとかける言葉が見つからなかった。

エメラダが惠美からどこまでも果てしなくとことん通俗的な告白を聞いた翌日のこと。

エメラダはごくさっぱりと、まだまだ爆らない旨をアルバートに概念送受した。

伝えた瞬間のアルバートは二の句が繋げないほど驚いていたが、エメラダが理由も無くそんなことをするはずがないと分かってもいるので完全に認め声で、

「どうなっても知らねえからな」

と、捨て台詞を残して概念送受を切った。

理解してくれたことは嬉しかったが捨て台詞はムカついたのでアルバートにだけは土産を買わないことを固く心に誓った。

「ううんうでもう、ササキさんがエミリアにヤキモチ妬くなんてあり得るんでしょかねー」
もう昼近いというのに夜間着のまま、惠美のベッドの横に敷かれた客用布団の中でぬくぬくと考え事に耽る。

「んがーっ……考えててもう分からないことは分からないですわねー」

それからまた一時間近く昼寝して、はっと目を覚ましたエメラダはようやく身を起こし、

「実際に様子を見てみればいいんですよねー」

と、とんでもないことを思いついた。

冷蔵庫に貼ってある、昨夜の件でぐしやぐしやになってしまったシフト表を見ると、今日は惠美も千穂も、そして真奥も夕方のシフトが重なっている。

「いっけんで、ひゃっくぶんをし、崖から蹴落としすり潰せう」

謎の歌を歌いながらエメラダはいそいそと出かける準備を始める。

だが、千穂の出発時間まではまだ間があるため、今からマドロナルドに出向いても観察がうまく行かないばかりか意図を察した夏美に追いつかれてしまう可能性もある。

なので、

「というわけでうちよつとインタビュースさせてくださいあい」

「よく分からんが、まあゆっくりしていきなさい」

エメラダは三十分後、ヴィラ・ローザ監獄の一〇一号室にいて、ノルドとイルオーンを相手にコタツにあたっていた。

エメラダの急な来訪に驚いたノルドだが、それでも彼女を歓迎して部屋に上げてくれた。

「こんにちはイルオーンさん」

「……こんにちは」

イルオーンは、本を読んでいた。

日本語で書かれた本のようだが、ノルドにそのことを目で尋ねると、

「ああ、志波さんにもらったり、古本屋で買ってきたりしたものばかりだが、この子達は特に教わらなくてもこの国の言葉を分かっているようなんだ。まあどうぞ」

ノルドが差し出した湯呑を受け取り、エメラダは少し冷えた体を内側から温める。

「それでですねえ、今日お伺いしたのは他でもないのですが」

「うむ？」

「お父様はエミリアの……娘さんの結婚相手の男性にはうどんな条件をお求めですか？」

「……うん？」

ノルドは質問の意図が分からずに固まった。

「いえ、決して深い意味は無いのですが、私は未だ独りの身の上ですけれど、親御さんなら当然子供の幸せを第一に考えると思ひます」

「そ、それは勿論……」

「お父様としましては、これからエミリアにどんな生活を送ってほしいとお考えなのかと思ひます」

笑顔（えんごう）を崩さないエメラダの意図（いど）を掴みきれずに、それでもノルドは自分の湯呑（ゆづみ）を手に握ったまましばし考え、

「……特に、無いな」

そう言っていた。

「ええ？　そうなんですか？」

「ああ、無い」

ノルドは難（が）しい顔で、コタツ（こたつ）に頬杖（ほづえ）をつく。

「何せ私もライラも、娘に幸せな人生を送らせてやれなかった親だ。そんな私達がエミリアの伴侶となる男に『娘を幸せにしろ』などという資格は無いだろう」

「資格の問題ですか？ どちらかという父親の義務のようにも思えますが」

「エメラダさんはそう言ってくれるがね、ここに住むようになって、時折考えるのだよ。これからエミリアがどう生きていくのかと考えるとき、案外この日本に永住する方がいいんじゃないかとね」

「その理由はなんですか？ 差し出がましいようですがエミリアは旅の間もずっとお父様と一緒に故郷の畑を復活させることを望んでいたんですよう？」

「ああ、知ってる。エミリアも話してくれた。でも、私も日本でそこそ長く暮らしたからな。この国のことに、少しは詳しくなったつもりだ」

そして苦笑。

「この国……いや、この世界には、エミリアより強い男はいないだろう？」

「……………まあ……………そうでしょうねえ。色々な意味で」

父親の身も蓋も無い言葉に、さすがのエメラダも驚いた。

「だったら、エミリアが誰かと結婚して不幸になるようなことは無い。そう思わないか」

「ちよっと飛躍しすぎな気がしますけど」

「旅の間に、精神的にも並々ならぬ力を得ただろう。この国での孤独もエミリアを鍛えたはず

だ。それらは経験せずに済むならしに越したことはなかったのだろうが、経験してしまつた以上は彼女の人生にプラスに働くよう生かしていくべきだと思ふ。それに、あの子はバカじやない。怠け者や心の貧しい男に惹かれるようなことはないだろう。だから、あの子の選んだ男に、私は何も言うことは無いよ」

「……そうですか」

「興味本位で尋ねるが、エミリアにそんな男の影があるのかい？」

「いいえ、そのうまだ無いんですけど……さすがに実際にあつたらうのに私は私がお父様にこんな相談できませんし」

「それもそうか」

ノルドはおどけたように笑つた。

「では少し突っ込んだことを聞かせていただきたいんですが」

「いいよ。答えられることであれば」

「はい。では遠慮なく」

エメラダは一切表情を変えず、切り出した。

「エミリアは、来年もこの國でクリスマススを祝えると思いますか？」

「……………」

ノルドは、黙つた。

「タリスマス……美味しいものをいっぱい食べられる日だって、アシエスが言ってた」

代わりにイルオーンが、表情を変えないままアシエスに思いきり感化された発言をする。もしこの場に天祢か芦屋がいたら、双方とも表情を強張らせていたことだろう。

「来年も、さ来年も、その次の年も」

エメラダの語尾からは、柔らかなさが消えていた。

「お父様は、どう思われますか？」

「それ、は」

「ご存じなんでしょう？ 奥様が、エミリアに何を期待しているか」

「……ああ」

ノルドの喉に、苦渋の錆が浮いた。

「前にも申し上げましたが、私はエミリアの味方です。ササキチホさんに負けず劣らず、エミリアの望むことを誰よりも支持します。だからこそ、彼女が望まぬ戦いに身を投じることが私は決して望みません。例えば世界中がそれを望んだとしても」

「……」

エメラダの柔らかない声色と、イルオーンが本のページをめくる音と、上階の二〇一号室で津原らしき軽い足音がばたばたと空際とキッチン側を往復する音だけがしばし続いた。

ようやくノルドから言葉が絞り出されたのは、たっぷり五分近くしてからだった。

「最近ね、時々ライラとエミリアが、一緒に帰ってくるんだよ」

そう言うところノルドは、一〇一室の薄い支障屏に目をやった。

「私は……きつと分らないから何も望めないんだ。彼女達の未来がどうあるべきなのか、どうあつてほしいのか、分らないから」

エメラダが千穂達と一緒に練馬のモズバーガーでガブリエルから聞いた話を、ノルドが、ライラを愛しているノルドが知らないはずがない。

そして知っているからこそ、今、彼は苦悩している。

自分の娘が、望まぬ不老不死を得ているかもしれないという事実。

「妻のマンションに行ったあの日は、我が妻のことながら恥ずかしいが、本当に部屋に片付けだけで終わってしまったんだ。夜には練馬のファミレスで食事したが、あれが初めての、親子揃つての食事だと気づいたのは、この部屋に帰つてきてからさ。疲れ果てていて何を注文したかも記憶が醒めた」

ノルドは寂しさと喜びが同居する、奇妙な笑みを浮かべた。

「でも、とても幸せな時間だった。彼女達がそう思っていたかは分らないが」

「……」

「私はきつと、変わらぬ日常であの、一日前に何を食べたかすら醒めになるような生活を、彼女達と送りたいんだ。彼女達もそれを望んでいてほしいと思つている。だが、今のままではそ

う遠からぬうちに、その幸せに必要なピースが確實に欠ける」

それは恵美なのか、ライラなのか、それともノルドなのか。

「エミリアはもう知っているよ。ライラが何を望んでいるのか」

「？」

想像だにしない一言に、エメラダは息を呑んだ。

ライラとの距離が縮まってこそいるが、まさかそこまでとは思ひもしなかったからだ。

「エミリアがライラを受け入れたというのは少し違う。だがさっきも言ったように、最近エミリアは、ライラと並んでこの部屋に帰ってくるんだ。仕事上がりだね。真実さんとはまた違う形で、エミリアなりにライラとフェアな立場に立とうとしたんだろう。ここのところ、よくこの部屋で二人で話し込んでいるよ」

二人で、とは言うが、恐らくノルドがいない場で、という意味ではないのだろう。

真実が千穂を立ち合い人として指名したのと同じように、恵美も、そしてライラもまた、公平な話し合いのための立ち合いを父に、夫に求めているのだ。

「もしかしたら話を聞いた上で、真正面から突っぱねるつもりなのかもしれないがね」

最初こそ驚いたエメラダだが、確かにそれはありそうな結末に思える。

そして、ノルドが傍らで聞いた話の概要は、エメラダが千穂達と共に練馬のモズバーガーでガブリエルから聞いた話と、概ね一致する内容であった。

「私は、ライラが天使と知って結婚した。彼女に求婚したのは私からだった」

「はあ」

また憶気が始まるのかと一瞬エメラダは身構えるが、

「彼女は自分が不老不死だと言った。既に人間ではないと。子供も望めず、あなたと一緒に老いることはできないと。泣きながら言った。私は構わなかった。ライラを心から愛していた。

彼女も私を愛してくれていたから、私は彼女の人生に一時寄り添えるならそれほど幸せなことはないと思って、重ねて頼んだ」

やっぱり憶気で、少し頭が前に落ちた。

「だがエミリアが生まれ……きつとライラは恐れた。自分はエンテ・イスラの人間となることのできた。でも、もしかしたら自分の血を受け継いだエミリアは、エンテ・イスラの人間とは違ってしまったかもしれない。私がこのことを聞いたのは、もう魔王軍が侵攻してきて私がエミリアと離れ離れになってからだ。いつぞや調布に行くときにも話しただろう？ 私に日本に来る少し前のことだよ」

そういえばあのときも憶気話をされたんだった、とエメラダは口をついて言いそうになり、慌てて顔くにとどめた。

「私は不老不死が良いものなのかどうかは分からない。娘と妻が、私が死んだ後も若く美しいまま生きていてくれるなら、それもいいのかもしれない。だが、きつと彼女達は、多くの愛す

る人との別れを永遠に経験し続けなければならなくなる。そして不老不死である以上、生きるのに飽いてしまったら、きつとその最期は……」

ノルドは、敢えてその行為を言葉にしなかった。

「分らないんだ。親として、娘には少しでも長く幸せに生きていてほしい。この世にはどれほど長く生きようとも全てを見ることは叶われないほど素晴らしいものが沢山ある。だが、長く生きれば生きるほど、苦しいこと、辛いことも増える。だからエミリアには人間らしく生涯を閉じてほしいとも思う。だがそうするためにはエミリアを望まぬ戦いに送り出さねばならない。送り出せば、戦いの中で殺されてしまうかもしれない。そんな戦いにさえ身を投じなければ、いつまでも若く美しいまま生きていられたかもしれない娘を、死地に送り出してしまったということになるば私は一生後悔するだろう。どうしたらいいのか、何がエミリアにとって、ライラにとって幸せなのか、分らないんだ」

「お父様……」

「私が自分で戦うことのできる身であれば、エミリアに戦わせたりせず世界の未来を守るために喜んで戦場に行った。その過程で不老不死の秘密に触れることができれば、父親として、夫として、娘と妻の決断を支えることもできただろう。だが私の力は、エミリアの足元にも及ばない。彼女達の役にも立たない。彼女達が選ぶのをただ見ていることしかできない。それが齒がゆくて仕方がない」

「……何が幸せなのか、僕には分からないけど……」

湯呑を碎くだいてしまうのではないかというほど力を含めるノルドの手に、イルオーンの小さな手が添えられた。

「僕が分かるのは、ノルドが二人を思う気持ちをも二人共分かっているってことくらい。だから自分を責めないで。ノルドは、ライラやエミリアだけじゃない。僕や、アシエスも幸せにしてくれている」

「イルオーン……」

「毎日、お腹一杯食べてるし」

「あは……お腹が一杯になるのはとても幸せですよわー」

エメラダも、イルオーンが真面目な顔で言う冗談について微笑ほほえんでしまった。

「僕は自分で選ぶことはできないけど、でもきつと、この町でノルド達と過ごす幸せな時間は、生なまに忘れられない。エミリアも、ライラも、どんな選択をしても、そうだと思う。だから、ノルドは役に立たないなんてことはない。絶対に」

「……………ああ、そうだいいな」

イルオーンの言葉を胸の中でどう受け止めたかはエメラダには知る由もないが、ノルドは涙を浮かべた瞳を手に拭くと、再びエメラダに向き直った。

「見ていることしかできない私は……きつと、こう答えるしかないな。最初の質問に」

ノルドの、やけっぱちのようで、どこか吹っかった表情からは、一切の虚飾は感じられなかった。

「エミリアが来年もクリスマスを日本で過ごしたいと願うなら、私はサンタクロースの扮装でもなんでもやるよ。彼女が望む道に可能な限り寄り添う、それこそが私の望みだ」

「……ありがとうございます。失礼な質問を、お許しください」

だからエメラダは、その心を試すような真似をしたことを、素直に詫びたのだった。



グイラ・ローザ世界一〇一号室。

向かい合う母と娘は、まだどこちなさそうだが、それでもノルドの目からは、あの大掃除の日を境に劇的に関係性は暖まっているように見えた。

ライラが、イダノラが母屋を蝕む風土病に対抗する過程で、人に不老不死をもたらす技術を発見するに至った話を語り、それを恵美が黙って聞くともなしに聞いている。

この構図の中でノルド自身はアラス・ラムスと遊んでいる。

どこちないが、それでも幸せな空間であった。

ライラの物語自体は、ガブリエルが千穂達に語って聞かせた内容とはほぼ同じなのだが、この

時点では東美もノルドもそのことはまだ知らない。

「その二人は最初、研究のための追加人員ということでも月の研究所に現れたの。研究所に出入りするためのバスに載ってる写真を見て驚いたわ。だってどう見ても学校出たての子供だったのよ。実際に会ったとき、益々そのイメージは強くなった。彼らを連れてきたのは、当時研究所の法務部門を出入りしていたサリエルだった。研究所を後援する有力者から、彼らを預けられた付添人としてね」

「ふうん……」

ライラとガブリエルの母星を蝕む風土病の研究が一年近く行き詰った頃、二人の若い研究員が母星から派遣されてきた。

二人の研究者の名は、カイエルと、シェキーナ。

「男の子の名はカイエル。女の子の名はシェキーナ。カイエルはね、銀色の髪に、前髪に一房だけ紫色の髪を持っていた」

「銀色と紫色の髪って」

「ん？ どうした？」

「まあ、なあに？」

エミリアの驚愕の視線の先には、ノルドの背の上に乗って満悦のアラス・ラムスの顔があった。

その視線を追って、ライラは頷く。

「そういうこと。カイエルは、私達の星のイエソドの化身で、シェキーナはマルクトの化身だった。でも当時の私達はそんなこと知る由もない。研究所の成果に一早くあやかりたい母星の権力者達が、大学出たての身内を寄越したって研究所ではかなり色眼鏡で見られてたわ。一年も研究がとん挫しっぱなしだったからギスギスしてたのよ」

ところが、イダノラの助手として二人が配属されてから、研究が一気に進捗する。

「マウス実験……もちろん私達の星でいうマウスに当たる実験動物だけど……で、初めて風土病に対抗し得る遺伝子が発見されたの。それ以来、研究者達のカイエルとシェキーナを見る目が変わった。他ならぬイダノラが、二人の手柄だと喧伝した。こういうことすると研究者の世界では余計な感銘を買いがちだけど、ある人がイダノラ達の、そういう浮世離れしてる部分をいつもサポートしてたおかげで、なんとか軋轢を生まずに済んだわ」

「ある人……」

恵美はハッとして天井を見上げる。

ライラの話の一番最初に出てきて以来登場しなかったが、ライラの言い方から察するに、その人物こそが……。

「そう。その人がサタナエル・ノイ。イダノラのパートナーとも呼べる優秀な研究者で、強い法術士で……こめんねあなた、実は当時、憧れの先輩だったの」

「まあ、長く生きていればそういうこともあるだろう」

ライラがノルドを見ながらそんなことを言うと、言われたノルドは大して表情も動かさずにアラス・ラムスの馬遊びに徹している。

徳氣話が始まると限度を知らない夫婦だけに父がヤキモチを妬きはじめるのではと危惧した惠美だったが、さすがにそこまで大人げない事態にはならず胸をなで下ろした。

「イグノラは言うなれば典型的な天才肌の研究者。一方でサタナエルは努力の研究者だった。サタナエルは、実力でイグノラには敵わないことをよく分かっていて、だからこそイグノラと彼女の才能を愛していたの。結婚に駆られて敵対するとか、そういうことをしない人だったわ。そんな彼女から私含め男女問わず人気があったし、当時医局の新人だった私はイグノラのところによく医療器具や薬品を届けていて、それで話す機会が多くて懐けたってのもあったわ」

「参考までに聞くが、どんな男だったんだ？」

「お父さん……」

折角先ほどこらえたと思ったら、話の腰をもの凄く急角度で折りに来た父を惠美は目で測しようとするが、ライラが意外にもそれを受けた。

「それ、実は結構大事な話なの。公平な人だったわ。法術士としても優秀だったし、研究者にありがちな浮世離れしたところも無くて、常に現実が目が向いてた。それでいてカタブツってわけでもない。深酒しちやって翌朝遅刻するなんてところも平気でさらけ出す人だった。強く

てね。一回所内のレクリエーションルームで、警備主任だったガブリエルと格闘訓練したことがあったらしいの。信じられないことに、軍人上りのガブリエルに圧勝したらしいわ。十本やって、一本も勝てなくて悔しがるガブリエルに、俺は自分の身しか守れないが、お前は他人を守り、いるだけでみんなを安心させている。俺がお前より強いところを見せたって、誰も安心しちやうくない。そんなこと言っちゃって、それがサマになる人だったのよ」

日頃からノルドへの愛を微塵も隠すつもりのないライラがここまで言うからには、それくらい男性として、人間として魅力的な人物だったのだろう。

それでもノルドはまだ少し不満そうだったが、とりあえずは納得したように引き下がった。「でもね、だからあのとき、変だなんて思ったの。カイエルとシェキーナの補助でイグノラが成果を出してしばらくして、サタナエルがイグノラと口論する機会が妙に増えたわ。大体がカイエルとシェキーナに関することだった。サタナエルは二人をイグノラから引き離そうとしていたような気がする。最初は自分が二人を庇ってたのにね。後から理由を聞いたんだけど、カイエルとシェキーナの発見は、未だどの研究者も研究対象にできず、文献の一つも存在しない遺伝子のものだっていうのね。それを観察するための技術すら、現代ではまだどこの国にも無いはずだって。それを発見している彼らは、どこか妙だって」

その話を聞いた当時のライラは、イグノラの才能が二人の力を得てその全てを見出したのではないかと想像した。

そしてサタナエルは、自分の疑念を打ち明けた全員から同じ返事を聞かされていたようだ。

「その話は一旦そこで終わったけど、その後イダノラの研究は目に見えて捗りはじめてたわ。サタナエルすらついていくことが困難なほどに。それなのに、カイエルとシェキーナは変わらずイダノラの傍にいる。誰もが訝しがったわ。サタナエルすら把握できないほどの研究を、イダノラが指導しているとはいえ何故あんな若い子達が把握できるのかって。研究が進むことが最優先だからサタナエルは疑問を抱きつつも引き下がったけど、それでも心のどこかには二人の出自や存在や頭脳に漠然とした疑念を抱いていた。そしてサタナエルはあるとき、サリエルを丸め込んで二人の素性を調べさせたの」

休暇と偽って母星に降り立ちカイエルとシェキーナの素性を調べていたサタナエルは、彼らの出生記録が改ざんされている痕跡を発見する。

二人には、正確な出生地の記録が存在しなかった。

それどころか身許を特定する情報や親や係累の記録まで、全てが偽造されていた。

サリエルの追跡調査の結果、カイエルとシェキーナは二人を提議した有力議員の傍に、唐突に降って湧いたとは思えない存在だったのだ。

「サリエルの調査って、それ信用できるの？」

「彼はああ見えて仕事自体は真面目なのよ。本当、あの悪い癖で損してると思うわ」

この話の中で「ああ見えて」と言われるということは、サリエルはその当時から女性に気を

振りまく性格だったということだろう。

とにかく、カイエルとシェキーナに決定的な不審を抱いたサタナエルが月の研究所に帰ると、そこでは予想だにしない事態が待っていた。

「イダノラはイダノラで、優秀すぎるカイエルとシェキーナにさすがに不審を抱いていたらしいわ。イダノラは、健康診断だと偽って二人の全身をスキャンした。戸籍に登録されたDNAの記録を追跡しようとしたらしいわ。でもそのDNAからイダノラは、二人が普通の人類と決定的に違う遺伝子を持っていることに気がついたの。それこそが、マウス実験で注目されて、人間にも存在すると予想された不老不死の遺伝子らしいわ。当時私は医者ではあったけど遺伝子工学の分野には疎くて正確なところは分からない。なんでもカイエルとシェキーナの体細胞には、代謝の限界を決定する遺伝子が全く働いていなかったらしいの」

全ての生き物は、多少の個体差こそあるがその形質により生涯における細胞の代謝の限界量が決まっており、これが限界に達すると、寿命を迎え死に至る。

代謝のみが生命の寿命を決定するものではないが、それでも現代の地球では代謝は生命の寿命に関わる重要な要素として位置づけられていて、代謝の制限を取り払うことで老いや死を先延ばしにできるのではないかと考える学説がある。

「それ以外にも二人の遺伝子は既知のあらゆる病に対して強い抵抗力を持っていた。何よりイダノラが驚いたのが、二人の体にはたった一片ですらガン化した細胞が無かったってこと」

「ガン化した細胞が無いつて、つまりガンじゃなかったってこと？　若いならそんなに珍しくないんじゃないの？」

「これは私達の星の医療……つまりは一万年近く前の知識になっちゃうけど、人体は常に様々な要因で体のどこかで細胞のガン化が起こってるのよ。それでもガン抑制遺伝子が正常な間は、発生しそうなったガンは瞬く間に排除・修復されるの。抑制遺伝子が働かなくなったり、その他色々な原因で細胞が異常を起こしてガン細胞が広がってしまうことを、私達は悪性新生物が発生、つまりガンにかかった、って呼んでたの」

恵美がガンという病の存在を知ったのは日本に来てからのことであり、ガンという病気に対する知識は極めて曖昧である。

「紫外線や活性酸素やその他にも沢山の原因によって人の体は傷つきそれを修復しを常に繰り返している。極めて初期のガン化はその過程に時折挟まって、決してそれ自体は特異なことじゃないわ。でも、それが完全に起こっていい体、というのは普通有り得ないはずなの。要するに細胞が全く傷ついていないってことだから」

そこまで話してから、ライラは念を押すように続ける。

「この話はいくまで私達の母星の人類の話だから、エンテ・イスラや地球の人間のガンにこの話が適用できるかは分からないわ。でも私が知る限りだと、それほど極端な違いは無いはずよ。カイエルとシェキーナの体の秘密を知ったイダノラは、二人の遺伝子と自分達の遺伝子の違い

を克明に観察して、信じられないけど、たった一ヶ月で人類の遺伝子のどこをどうすれば二人の遺伝子に近づけるのかどうかを発見してしまったらしいの。サタナエルが休暇明けで帰ってきたときには、既にそんな状態だった」

その後、なぜかイグノラの研究は再びの停滞を見せる。

理由は、カイエルとシェキーナが突然行方をくらしましたからだだった。

誰もがその理由を訝しがったが、イグノラはもはや二人がいようがいまいがどうでも良かった。サタナエルを助手にイグノラは遺伝子工学の分野で再び風土病へのアプローチを始め、ある結論に達する。

「カイエルとシェキーナは、私達とは似て非なる人類。つまり、エイリアンみたいなものだった。原生人類のどの人種とも遺伝子的に適合しないDNAの持ち主。でも二人は間違いなく人間としてそこに立っていた。イグノラは、二人の出自を探り当てることが二人の遺伝子をさらに深く研究するための手がかりになると信じて、彼らの出自が偽られていたことを知ったサタナエルとも協力して、カイエルとシェキーナの出自を追ったわ。それで……見つけてしまったのよ。月で。彼らの母体とも言えるものを」

それは、一見枯れた巨木だった。

だが異様だったのは、十分な大気が存在しない月面に樹木が枯死しているというその様相だった。

そんなものを、星系の惑星探査すら可能な人類が何故見逃していたかも知からない。

だが、その木は丁度月面の地図で研究所のある基地の裏側に位置し、有望な地下資源も宇宙からのスキャンで確認されなかったため、開発の手が伸びていなかったということが後の調査で結論づけられた。

「イダノラがその木を見つけたのは、聖法気スキャンのおかげ。何も無い土地に、妙に聖法気濃度が高い場所があった。月の裏側の、その聖法気の湧き水とも言えるいくつかの場所の一つが、その木のある場所だったの。もう分かるわよね。それこそが私達の星のセフィロトの樹だった。カイエルとシェキーナを生み出した、セフィラの母体だったの」

木のサンプルを採取したイダノラは、木のDNAがカイエルとシェキーナのそれと一致することに気づいた。

カイエルとシェキーナはいなくなってしまうたが、巨本からはいくら研究しても余るほどのサンプルが採取できる。

イダノラとサタナエルの研究は毎日大きく前進した。

「ここで一つ視点を変えた話をするけど……元々サタナエルは、イダノラに好意を抱いていたの。彼女の才能に加え、人柄も深く愛していた。私が憧れだけで悪心を抱かなかったのは、それがとても分かりやすかったからなんだけど、とにかくカイエルとシェキーナがいなくなってから不老不死が実現されるまでの時間はたった五年だったわ。その間、二人は研究者としてだ

けでなく、男と女としてもぐつと接近してた。遂に風土病を恐れる必要の無い不老不死の遺伝子改造方法を確立した日に……二人は結婚した」

「え」

これには恵美も、さすがに頓狂な声を上げざるをえなかった。

「え、そ、それって、つまりその、い、イグノラがルシフェルの母親っていうことは……まさかサタナエル……いえ、古の大魔王サタンって、えええ？」

「そういうことね」

これまでも最も劇的な反応をする娘に、ライラは大きく頷いた。

「サタナエル・ノイは、ルシフェルの父親なのよ」

ノルドの気持ちを確認めたエメラダは一〇一号室を辞すと、当初の予定通り仕事中の恵美と千穂の様子を観察するためにマドロナルド轄ヶ谷駅前店に向かう。

店を訪れるのは合同誕生会以来であつたが、幸い迷わずに到着することができた。

早くも空が赤く染まりはじめる夕方、エメラダは店の前で掃き掃除をしている千穂と鉢合をせた。

「あれ？ エメラダさん？ 食べに来てくれたんですか!?」

エメラダに気づいて笑顔を浮かべて駆け寄ってくる千穂の表情からは、嫉妬などというような昏い感情は一切見当たらなかった。

そして彼女の顔には、制服のバイザーではなく件のサンタ帽があることに気づく。

「今日来ること、蓮佐さんは知ってるんですか？」

「いいえ！ 特には言つてなかったのど！」

「そうなんですか！ じゃあエメラダさんが来たら、きつと驚くと思いますよ。寒いんで、中入ってください」

「では！ お言葉に甘えて！」

千穂に促されて店内に入ると、昨夜恵美が言っていたように全員サンタ帽を着用していた。それで何が変わるのかは不明だが、なるほど雰囲気だけは出ている。

「注文の仕方とか、大丈夫ですか？」

日本の飲食店に慣れていないだろうエメラダを千穂が気遣う。

「大丈夫だと思います。分からなかったら、外国人を誘ってレジの方にお聞きするので。」
それにしてもうなんだか店内が華やかですわー」

「はい！ 今日からお店の中がクリスマスマス仕様なんです。私こういう中で仕事するの初めてで、ちよっと楽しみだったんです。あ、それじゃあ私これ片付けて仕事戻らないといけないんで、ゆっくりにしてってくださいね！」

「はい、頑張ってください！」

エメラダは帯とチリトリを手にした千穂を送り出すと、とりあえずレジの前の列に並ぶ。物珍しげに周囲を見回していると、レジのやや奥まった場所で頭に何かの機械をつけて、誰かと通話している凄美の横顔を発見した。

二階にいる背の高い女性は、店長職にあるキサキという女性だ。

レジの進みが悪い中、千穂が再び現れレジを一つ開けて、並んでいた行列を解消させつつ、エメラダにウインクを送ってくる。

「……あれ？」

エメラダは近づいてくる自分の順番を待ちながら、妙なことに気がついた。

確認してきたシフト表と人数が合わない。

この店の従業員の全員を把握しているわけではないエメラダにも、誰が足りないのかはすぐ

に分かった。

「魔王はどうしたんですか？」

千穂のいるレジに呼ばれたエメラダは、小声で千穂に尋ねる。

千穂も他のお客の目がある中なので、小声で返事してきた。

「今日も真真さん、研修で外に出てるんです。後でまた」

そういえば恵美も昨夜、真真が研修で忙しいと言っていた気がする。

千穂のおかげで滞りなく注文を終え、ポテトが揚がっていないというのでバーガーと飲み物だけをトレーに載せて番号札を受け取って空いている席に腰掛ける。

すると千穂が、レジの奥の恵美に声をかけている様子を目にすることができた。

二人の会話の様子には、エメラダが見る限りなんの異常も無く、およそ恵美が危機に陥っていたような関係の悪さなど感じ取ることはできない。

恵美は千穂の示す先にエメラダがいることに気づき、少しだけ慌てたような顔をした。結果的に、エメラダの席に揚げたてのポテトを運んできたのは恵美であった。

「どうしたのよ、突然」

周囲のお客の様子を気にしながら、恵美が尋ねてくる。

「いいえ、昨日のエミリアの様子がおかしかったので、心配になっただけです」

「……嘘、野次馬でしょ」

「そういう面も否定はしません」

エメラダは悪びれることなく頷く。

「でも、魔王の姿が無いんじや野次馬のしようもないですね。研修だと聞きましたけど一体なんの研修に行ってるんですか？」 魔王はこの店の主力なんでしょう？」

「……ああ、話してなかったっけ。正社員登用研修よ。ここのところ毎日ね。いよいよ、本格的にマダロナルドの正社員になるみたい」

「セイシャインって……ええ？」

さすがのエメラダも驚いて、思わず椅子から腰を浮かせた。

「ほ、本当に魔王はこの国で労働者としての道を歩むつもりなんですか？」

「ずっとそれを目指にしてきたらしいから、私達以外は誰も驚かないみたいよ。昨日までは木崎さんと一緒に似合わない背広なんか着て色々回ってたみたいだけど、今日はよその業態のお店に出向してるらしくて、一人で行ってるわ」

マダロナルドはデリバリーとカフェだけが特殊業態だと見られがちだが、意外と細かい分類がされている。

スーパーマーケットや大型商業施設内にあり、客席はフードコートなどで他企業の店舗と客席を共用しているミニマッド。

国道沿いなどにあり、車に乗ったまま注文ができるドライブスルー店舗。

アミューズメントパーク内などにあり、規模と営業時間が制限され、観光地特有の特殊なオペレーションを要求されるパーク内マッドなどである。

「正社員になったらどんな店を担当するか分からないから、あちこちの店舗や事業所に派遣されて実務経験を積むらしいわ」

「へえ、じゃあもしかしたら魔王がこのお店の店長になるのも秒読みですか？」

「このお店かどうかは分からないけど、でもそう簡単じゃないみたいよ」

正社員登用研修は、当然だがそれに足る実力を持つクルーしか受けることができない。

その上、研修を受ければ誰もが正社員になれるわけでもない。

通常の採用ルートとは異なるため、店長職にある木崎もその全貌は把握していないらしいのだが、とにかくアルバイトクルーの身分のまま一年近い研修を受けて、結局正社員になれない者もいるという。

「それじゃあ元々ライラにいい感情を持ってない魔王はくきつと彼女のお話は受けたりしないでしょうね。折角頑張って目標にできたことが叶いそうなんですから」

「……………そうかもね」

恵美の答えは歯切れが悪かった。

「ごめん、仕事戻らなきゃ」

「あ、はい、すいませんお邪魔してしまつてー」

「いいのよ、ゆっくりしてっつね。……お待たせいたしました、マドロナルド様々谷駅前店、遊佐がお伺い……」

恵美は足早にエメラダから離れると、耳の機械を押さえながらまた誰かと通話を始めた。

エメラダがしばらくそんな恵美の仕事の様子を眺めていると、今度は千穂が近づいてきて声をかけてきた。

「どうですか？ それ、この前のパーティーのときには無かった冬のフェアセットなんです」

「はい、とつても美味いんです。でも毎日食べてると太っちゃいそうですね」

「あはは、間違いないですね」

「エミリアから少し聞きましたけど魔王は、今結構頑張っているらしいですね」

「あ、正社員登用研修のこと聞いたんですか。真奥さん、ずっとそれを目標にこのお店で働いてきましたからね。最近お店に顔出すときは、いつもすごく張りきってますよ」

「そうでしたか」

「その度に元氣すぎる真奥さんと遊佐さんが喧嘩になりそうになるんですけど、なんだかんだ言って遊佐さんも、結構真奥さんのこと応援してるみたいで」

「へえ。それは意外かも」

「最近はどうでもいすよ？ エンテ・イスラから帰ってきてから真奥さんと遊佐さん、前はどいがみ合っていないですし」

エメラダは一時、悪美の懸念のことを思い出すが、少なくとも見上げる千穂からは、やはり一片たりとも妬みの感情を読み取ることはできなかった。

「それなのに家主の真央さんが忙しくなっちゃったから、最近あんまり二〇一号室でみんなでご飯とかできなくなっちゃったんで、それが残念といえば残念なんですけどね。折角だからこれを期にみんなもつと仲良くなればって思うんですけど、なかなか思い通りには行きません」これを聞いたエメラダは、意地悪な質問を試してみた。

「でもエミリアと魔王があんまり仲良くなっちゃったらアラス・ラムスちゃんを挟んで本当に夫婦になっちゃうかもしれないじゃない？」

慌てるだろうか、怒るだろうか、否定するだろうか。

千穂の反応は、そのどれでもなかった。

「うーん、個人的に負けるつもりはありませんけど、でもそうならなっちゃったならそうならなっちゃった時じゃないかなって」

エメラダがきょとんとしていると、千穂は少し鼻の穴を膨らませて挑戦的な笑顔を浮かべる。「もちろん私だって、憎味えて見てたりしませんからね！ いざというときは相手が聖剣の勇者だろうが、悪魔大元帥だろうが、全力で立ち向かいます！」

「はあ……………んん？」

悪魔大元帥とは誰のことを言っているのか、エメラダが考えるよりも先に、

「それに、私は真美さんも遊佐さんも大好きですから、何があったって、ずっと仲良くしていただける自信があるんです！」

発せられた高らかな宣言にも、やはり一切曇りは無く、千穂の本心からの言葉であることが手に取るように分かった。

要するに、結局恵美の杞憂であつたわけだ。

「敵いませんねー」

エメラダはなんだか妙な探りを入れた自分がとても卑小に思えてしまう。

観念したエメラダは、本来この場でするつもりになかった相談を、千穂に耳打ちした。

「後からまたご相談したいんですが……」

アラス・ラムスのためのクリスマスパーティーを企画したいと告げると千穂は目を輝かせ、仕事上がりに魔王城へ芦屋達を説得に一緒に魔王城へ行くと約束したのだった。

千穂が仕事を上がり、エメラダと共に二〇一号室を訪れたのは十八時頃である。

「クリスマスパーティー？　なんでそんな面倒なこと思いついちやつたわけ？」

漆原の謙虚な声は、二〇一号室にいる全員に無視された。

「アラス・ラムスちゃんも、遊佐さんと一緒に一杯頑張りましたもん！　エメラダさんナイス

アイディアですー」

「飾りつけは千穂殿の指南で進めればいいか？ 私は時間なら有り余っているから買い出しが必要なら任せてくれ」

「アラス・ラムスのために聞くパーティならばやむをえまい」

「皆さんありがとうございます。賛成していただけると自信が持てますー」

「僕は賛成してないぞおーい！………おおい」

芦屋までがエメラダの発案に乗るものだから、漆原としては一応言うべきことは言ってお

くがきつと自分の意見は通らないだろうと既に諦め顔だ。

「だがどんな規模にするにしろ、問題は場所だな」

芦屋はざっと室内を見回す。

「アラス・ラムスのためとなると、人数はもつと増えるだろう。さすがにこの部屋というわけにはいかんぞ」

そもそも日頃、二〇一号室は真奥、芦屋、漆原、恵美、千穂、鈴乃にアラス・ラムスの七人で、限界ギリギリなのだ。

そこにパーティの発案者であるエメラダ、アラス・ラムスの妹のアシエス、最近アシエスが弟分として連れまわしているイルオーン、アシエスとイルオーンが揃うときには必ずお目付け役として一緒にいるノルドと天祐が最低人員として加わると考えると、二〇一号室では立鑑

の余地も無い。

そもそもただ人が集まるだけでなく、クリスマスパーティーともなれば、食卓に供されるメニューの種類も増えるし、鈴乃の言うように飾りつけも必要になるのだ。

「佐々木さんとエミリアの合同誕生会のようなようにマダロナルドで聞くこともできんな。そここのところを、どう考えているのだ」

「はい、それなんですが」

エメラダは、芦屋と漆原の様子を窺うように言った。

「エミリアの部屋がいいと思ってます」

「……何っ？」

「あ、僕もう行かないでいいよね」

「漆原さんっ！」

やはり芦屋はエメラダの提案には眉を顰め、漆原は露骨に態度に出して千穂に窘められている。

「ベルさんとササキさんは？ エミリアの部屋はご存じですよね？」

「ああ。確かにあの広さなら人数が集まっても大丈夫だな。エミリアは、そのことについては……」

「まだ話していません。そもそも二十四日と二十五日は全員集まれませんし。それにメイ

ンはアラス・ラムスちゃんですから魔王を抜きにするわけにもいきませんし」

「ううむ……魔王様もアラス・ラムスのことなら大抵は否（いな）とは思（おも）うが、エミリアの家、となるとどうにも……というか」

芭屋（かや）はその事実（じじつ）に今気づいたように、はっと顔を上げた。

「考えてみると、私も漆原（うるは）も、それに恐らくは魔王様も、エミリアがどこに住んでいるのかわらん」

「えっ」

この発言（はつごん）に驚（おどろ）きの声を上げたのは千穂（ちほ）で、その事実（じじつ）を重実（しげみ）本人（ほんじん）から聞（き）いている鈴乃（すずの）は静（しず）かに話（わ）の成（なり）行き（いき）を見守（みも）っている。

「芭屋（かや）さんも真奥（まおく）さんも漆原（うるは）さんも、遊佐（あそ）さんのおうち知らないんですか？」

「永福（えいふく）町のマンションに住んでいるということはもちろん知（し）っていますが、正確（せうさく）な住所（じゅうしょ）はどこかと、住（す）んでるマンションを見（み）たことがあるかと聞（き）かれると、知らないということに今更（いま）気がつきました」

「今まで一度も行（い）ったこと無いんですか？」

「だって真奥（まおく）の方（か）からいちいち行（い）く必要（ひつや）ないだろ？ 大体（たいたい）いつも向（む）こうからこっちに來（き）て騙（だま）ぐだけ騙（だま）いで帰（かえ）ってくんだからさ」

「あ、そ、それはそうかもしれませんけど」

漆原の身も臺も無い言葉に、千穂は納得せざるを得なかった。

「エミリアも別に我々を招きたいとも思っていないかったでしようし、そもそも以前の我々は魔力を自由に扱えませんでしたから、無理にエミリアの自宅を探して攻め込んでも返り討ちに遭うのは目に見えていましたし」

最近あまりに関係が良好に見えるので忘れがちだったが、そういえば真実と恵美は宿敵同士なのだった。

千穂の驚きをよそに、吉屋は話を元に戻す。

「そもそもエミリアの部屋を使うとして、奴は我々が行くことを好しとはしないだろう。だが、アラス・ラムスは魔王様がいなければ納得しないだろうし、他の場所を考えた方が良いのではないか」

「ご懸念はもつともなんですけども、実はエミリアの部屋にしたい理由は広さ以外にもあってエミリアの部屋だからこそ来てくれる人がいると思うんですよ」

「遠佐さんの部屋だから？　もしかして、ライラさんですか？」

「はい、そういうことです」

エメラダは千穂の言葉に深く頷いた。

「エミリアとライラは、この前のこともあって少しは距離感が縮まっていると思うんです。でもだからこそ、ライラの目論見は簡単には通らないということをも見せておく必要があるんじゃないか」

やないかと思ひまして」

「つまりそれは、アラス・ラムスにタリスマスを教えることで、エミリアが日本に根を強く張ることを望んでいると見せつけるということか？」

エメラダは、製香や真季と会ったあの日、楽年があるのかどうかを強く疑っていた。

とりもなおさず、エメラダは惠美をライラの依頼に乗せたくないと思つていふことだ。「忌憚の無いご意見をお聞きしたいんですが」。アルシエルもルシフェルも、ササキさんもベルさんも、エミリアと魔王がライラの話に乗つてもいいとお考えですか？」

四人はそれぞれ、束の間お互いの目を見た。

「この部屋でライラの話を聞いてるアルシエルとルシフェルなら、私達がガブリエルから聞いた話もある程度把握していると思います」。聞けば聞くほど正直エミリア達が何かを手助けしてあげる必要が感じられなくて」

「まあ確かに？ 僕は当時の関係者の一人として勝手にやれよとは思つてるよ。真奥がやりたいつてんなら別だけど」

「私は、魔王様がやると仰つても反対だ。特に今、魔王様は仕事が大切な時期だ。余計な手間を増やして、魔王様の将来が閉ざされては本末転倒だ」

「同感だ。二人の選択は尊重したいが、受け入れ側の誠意があまりにも乏しい」

「私も、前に漆原さんには言いましたけど、天界の人達の過去には同情しても、今のガブリ

エルさん達の言うことは勝手すぎると思います」

「ですよー」

エメラダは四人の意見を聞くと、得たりとばかりに笑顔で頷いた。

「エミリアとライラの距離が近づくこととエミリアがライラの話を聞くかどうかは全く別の話だと思ふんです。エミリアには彼女を大切に思ふ人達が沢山いて、エミリアにも大切なものが日本にもエンテ・イスラにも沢山あって、口説き落とすには一筋縄ではいかないってことをきちんと見せつけてあげる必要があると思ふんです」

「でも、それってエミリアの話だけで、真実関係なくない？」

「だって魔王が正社員になるってことはより日本との結びつきを強めることになるんですよ？ なら今更何かを見せつけなくても今この時点でもうライラの話には来ないんじゃないですか？」

「まあそれは」

「確かにそうだが」

千穂と声屋はそれぞれに頷いた。

「それにもこれは結果的にお招きする相手を利用することになっちゃいますけども、エミリアの部屋だからこそさらに味方になってくれる方を呼べると思ふんです」

「それはもしや」

鈴乃が身を乗り出すと、エメラダは頷いた。

「マキさんは事情をご存じないから難しいかもしれませんが、リカさんは来てくださるんじゃないですか？」

「……」

その瞬間、意図せず千穂と芦屋の顔が同時に強張り、漆原と鈴乃はそれをしつかり視界の端で見ていた。

「エミリアにはササキさん以外にも日本に大切な友達がいるということをしつかりライラはきちんと知るべきだと思います」

二人の強張りをどう捉えたか、エメラダの説明には熱がこもる。

「悪魔の皆さんには面倒だとは思いますが、もしパーティーの開催にご賛同いただけるなら、会場をエミリアの部屋にさせていただきたいと思います。もちろんアラス・ラムスちゃんへのプレゼント以外の費用は全てこちらが持ちますし、エミリアの説得も私がしますから」

「費用がそっち持ちなら、あとは真実がどう言うかによるんじゃない？」

漆原は様子を窺う意味も込めて芦屋に振ってみるが、芦屋は硬い表情のままだ。

「魔王様は今たださえ忙しい身だ。賛成した手前伝えることは伝えるが、実際にパーティーが開かれても、参加できるかどうかは断言できません」

「はい。当然だと思います。『ばば』の意見を伺うという話さえ通せればというところも

ありますので、後のご都合はそちらの良しように。」

極めて日本人的な発想でエメラダは芦屋にべこりとお辞儀をすると、足早に二〇一号室を辞していった。

千穂はその後しばらく乗り気でない芦屋や漆原を、鈴乃と共に半分説得、半分は真奥の仕事に関する雑談をしていたが、時間が遅くなっていることに気づき立ち上がる。

「それじゃ私もそろそろ帰りますね」

「お帰りですか？ 夕食を召し上がられては」

「ありがとうございます。でも今日夕食こちらでってお母さんに話してこなかったんで帰らないと……漆原さん、もし真奥さんがやるって言ったら、ちゃんと来てくださいよ！」

千穂が釘を刺すと、漆原は感情の見えない顔で、

「まあ、前向きに善処する感じ？」

それだけ答えた。

「佐々木さん」

「はい？」

玄関で靴を履いていると、芦屋が声をかけてきた。

「お送りします。買物のついでもありますので」

「え？ あ、はい」

最近は特に危険なことも無いため増りは一人のことが多く、そうでなくても芦屋あしやの申し出をやや唐突とうとつに感じた。

芦屋は千穂ちほの返事を聞くよりも前に押し入れの前に掛けられていたウルトラライトダウンを覗み、千穂に続いてアパートを出た。

「……すいません、お送りするというのも買い物も、実は話のついでですて」

「そうだと思います」

アパートの敷地を出たその瞬間、芦屋は白状した。

千穂も芦屋らしからぬ性急で有無を言わさぬ行動は何か理由があつてのことだろうとは思つたので、そう言われても意外とは思わなかった。

「あ、もちろんご自宅にはきちんとお送りしますし、買い物があるのも嘘うそではないのです。でも、その……」

「鈴木すずきさんのことですか？」

「……はい」

千穂に一步遅れて、芦屋も歩き出す。

「佐々木ささきさんはお会いになられたのですね？」

「はい。当日に」

芦屋の質問に、千穂は正直に答えた。



「そうですか。それで合点が이었습니다」

芦屋は千穂が見たこともないような困り顔で頷いた。

「エミリアが何も知らない様子だったので」

その一言には、もし自分が製香にしたことを恵美が知ったら、恵美が何かしら攻撃的な行動をとると思っていたというニュアンスが含まれている。

「鈴木さん、何も言っていないと思います。遊佐さんには言えないって言っていましたから」

「そうでしたか」

芦屋は大きく息を吸い込み、ポケットから真新しいスリムフォンを取り出した。

「申し訳ありません。結局我々魔王軍の……その……脳の甘さを、佐々木さんにケアしていた
 だくことになってしまつて」

芦屋は今、言葉を選んだ。

本当はどう言うつもりだったのか、何故言葉を選ぶべきだと思つたのか。

「ふふふ、そう言いますけど、私達は、その脳の甘いところに惹かれちゃつたんですよ。全く
 甘いままでも困るんですけどね。その点私が聞いた限りでは、芦屋さんは真奥さんよりはまだ
 誠実だと思いますよ」

千穂は殊更明るい声で、真奥をくさしてみせた。

芦屋は驚いた様子で千穂の顔を見下ろしたが、すぐに苦笑する。

「魔王様を責め奉る資格は私にはありませんでしたわ。全く……」

地蔵通り商店街も繁華駅も、気がつかない内にクリスマスマスカラーがかなり濃くなっていた。その華やかな装いを、二人はどこか遠い世界の風景のように見上げる。

「人間など捨て置けばいいと思っていたのに」

芦屋の、信じ難いほどに人間的なため息を、千穂は初めて聞いた気がした。

そのため息は、芦屋が自分の過去に吐いた、初めてのため息だった。

「後悔はしていません。それでも考えてしまうのです。その後、どうしているのだろうか」と

「鈴木さん、フラれたくらいでメソメソと泣き寝入りしちゃうような、弱い女の子じゃありませんよ」

「だから心配なのですよ」

芦屋の言うことは、もつともすぎるほどもつともすぎた。

「色々ね」

芦屋の視線の先には、千穂。

千穂も芦屋の言いたいことは痛いほどよく分かっている。

だがそれは、二人がどう考えてもこの場で答えの出るはずの無い話だ。

「クリスマスパーティーを遊佐さんのおうちでって、真奥さんには私から話します？」

だから千穂は、身近な問題に話題を変えようと提案し、芦屋もそれに乗った。

「いいえ、エメラダ・エトウ・ヴァもまあ言っていましたから、ここは魔王軍での意思統一を迅速にするためにも、私から話すべきかと思えます」

「そうですか。その方がいいかもしれませんね。最近真奥さん、お店に顔出すタイミングが私のある時間じゃないみたいで、今思ふと結構長い間顔合せてないんです」

「そうでしたか。やはり正社員になろうとすると、色々と複雑なのですね」

その後は、主に真奥や店のことなどのありきたりな世間話をしながらすぐに千穂の家まで着いた。

別れ際、門の前で千穂は芦屋に言う。

「ありがとうございます。それともしパーティーをやることになったら、芦屋さんも来てくださいね」

「私は……」

「芦屋さん、こんなこと言うの、生意気かもしれませんけど」

「はい？」

「芦屋さんも鈴木さんも、一つ大きな勘違いをしてる気がします。私はその場にいたわけじゃありませんけど、どうも芦屋さんの様子見てると間違いないんじゃないかって」

「は……」

千穂は、満面の笑みを浮かべて言った。

「今の芦屋さん、本当に真奥さんを責めたりできませんよ。だって、答えを出したつもりになつてるだけで、実は出してくれてないんですもん」

「え？」

「と、いうわけで、送ってもらってありがとうございます。また！」

芦屋に壮大な謎かけを残した千穂は、呆けた顔の芦屋をその場に残し家に入つていつてしまつた。

「出したつもりで……出していない？」

生真面目な芦屋はその意味を測りかね、買い物もせずにそのまま一度アパートまで帰つてしまい、もう一度出かける羽目に陥つたのだった。

※

「うーん……ちょっと自作は無理かなあ。終わった後のことも考えないといけないし」

翌日も出勤日だった千穂は、店のあちこちを彩るタリスマス飾りを観察しては困つたような顔をしていた。

「どうしたー、ちーちゃん。飾りが何か気になるのか？」

「あ、木崎さん」

すると、そんな千穂の行動を不思議に思った店長の木崎真弓が、千穂の丁度上にある金色のセーラーを指差した。

「どこが壊れてるか？」

「あ、違うんです。クリスマススの飾りつててもそんなのだったかなーって、ちょっと空いた時間に観察を……」

「空いた時間は仕事を見つけるための時間だぞ」

木崎はわざとらしく腰に手を当てて、千穂を睨む。

「す、すいません」

「それで？ 見回った結果、飾りに破損や不審な点は？」

「えっと……ありませんでした」

「よろしい。ならば仕事に戻りなさい。今日もまーくん不在でシフトが一本欠けてる状態だ。ディナータイムは混雑が予想されるから、頼むぞ」

「はいっ！」

千穂はさばりを見逃してくれた木崎に感謝しつつ、後についてカウンターに入る。

「真奥さん、今日はどこに行ってるんですか？」

「私の同期が店長をしている別業種の店だ。とはいえまーくんは何度も行ったことがある店だから、今日の研修はお手の物だろうな」

「もしかして、富島園ですか？」

本崎の同期が店長を務め、真奥が頻繁に行つたことのある店といえば、テーマパーク富島園のパーク内マッドが一番ありそうだ。

「知っているのか。特にイベントシーズンのパーク内店舗は稼働ベースが極めて特殊だからな。登用研修のときには、必ず受け入れ先に指定されるそうだ」

「されるそうだって、研修のスケジュールって、予め決まってるんじゃないんですか？」

「……」

千穂の問いに、本崎は目だけで少し眉間の様子を窺つてから慎重に口を開いた。

「これは私もまーくんを研修に送り込んで初めて知つたことなんだが、登用研修を受けた者が実際に正社員になる確率は、決して高くないらしいんだ」

「えー！」

「研修内容は人事課と経務課しか知らず、最初の付き添い期間を過ぎると研修生を管理する上長……つまり、私のような店長職だ……には、研修生がいつどこそこへ行くという話が事前に来るだけなんだ。普段は富島園の本島という私の同期の店長がなんだかんだと色々裏事情を教えてくれるんだが、今回ばかりは上が絡みすぎていてダメだろうな」

本崎は少し顔を伏せて、考え込む。

「まーくんは優秀なクルーだと思ふ。だが幹部社員の話を聞くと、登用研修に合格する者は必

ずしも現場で優秀な者ばかりとは限らないようだ。正直、私も基準はよく分からない。もちろんまーくんのことは信じているし、頑張つてほしいと思つてゐるが」

木崎は帽子とインカムを一度取つて、また付け直す。

「でも、まーくんにはもっと大きな世界を見せてやりたいとも思うしなあ……」

「木崎さん？」

「……ああいや、なんでもない。これこそ仕事に関係ないことだな」

ぼんやりと言う木崎は、そのまま仕事へ戻つてしまった。

「木崎さんは真奥さんに社員になつてほしくない……つて感じでもないか。なんなんだろう」
真奥が正社員になりたがつていたのは木崎もよく知つてゐるはずだ。

だが今の言葉には、真奥が今のままキャリアを積んでいくことに不安を抱いてゐるようにも見える。

その後、木崎の言葉通りデイナータイムの店は大いに賑わい、千穂は退店の二十二時までほとんど休みなしの大車輪だった。

「あら、千穂ちゃんもこの時間の上がり？」

「あつ、遊佐さん、お疲れ様です」

恵美も出勤していたのに、今日はほとんど会話した記憶が無い。

こうして上がりの時間になつて、あまりの疲れでスタッフルームの椅子でノックアウトされ

ていたところに恵美が来て、ようやく落ち着いた感じだ。

「今日混みましたねー」

「本当にね。デリバリーもどういうわけか遠い住所ばかりだったから、川田^{かわた}さんなんかこの寒いのに今日はずっと外にいたんじゃないかしら」

「外回りは実は寒だって言っていましたけど、この寒さだとしんどそうですね」

「ね。それにヘルメットに無理やりクリスマスツリーのシールを貼るのはどうかと思うわ」

事業所から配布されたマダロナルドマークのついたシールがあるのだが、当然手で貼るため、まさしく取ってつけたようにしか見えないと本崎が嘆いていた。

「そういえばさっき、クリスマススの飾りで何が言われてなかった？」

「見られちゃってましたか？」

千穂は体を起こすと、スタッフルームのカレンダーに描^{えが}かれているクリスマスツリーを指さす。

「クリスマススの飾りってどういうものがあつたかなって、観察してたんです。考えてみると大きくなってからまじまじ見たことが無かつたなって」

「ああ、なるほど。もしかしてエメが言ってたやつ？」

「そういうことです」

恵美は苦笑して、千穂に手を合わせる。

「ごめんね、なんだかエメが張りきっちゃってて」

「そんな。私凄く楽しみにしてるんです。最近みんなでご飯食べられる機会も減っちゃってますし、それにエメラダさんが遊佐さんに言ったかどうかは分かりませんが、決起集会だと思ふと余計に気合い入っちゃいます」

「決起集会って？」

決起とはまた血気盛んな言葉が出てきたものだが、なんのことを言っているのか恵美もすぐに思い当たった。

「ああ、エメがライラや梨香まで呼ばうって言ってたの、そういうことなのね」

「はい！ 私達の大切な友達を、簡単にには譲ってあげません！」

千穂の熱え上がるような気合いが、恵美にはとても眩しい。

「だから気合いを入れて飾りも手作り！ って思ったんですけど、七夕とはかなり勝手に違ふみたいで」

「そうかもね。ツリーもまさかどこかの山から切ってくるわけにもいかないしね」

「そうなんです。金銀のモールとか、ツリーのオーナメントとか、とても手作りできるような感じじゃなくて、そうするとお金をかける必要が出てきますよね」

「そこまで本格的じゃなくても……」

「ダメです！ アラス・ラムスちゃんにクリスマススを楽しんでもらうなら、手を抜いちゃダメ

ですー」

「そ、そうね……」

眩しきが、ちよつと強くなった気がする。

「とはいえあんまり気合い入れすぎで、それこそ七夕のときの真央さんみたいになつてもそれはそれでダメですし、お金かけるならちゃんと相談しないと思つたところで、木崎さんに見つかっちゃつて」

千穂は少しかだけ決まり悪そうに微笑む。

「七夕ね。あれは大変だったわね」

恵美もつい微笑みに釣られながら、千穂の言う七夕を思い出した。

鈴乃が日本に来たばかりの頃、真央が店に働くための七夕の笹を、近所の常連客の家からもらってきたのだ。

存在感のある笹とタルー全員で手作りした笹飾りは大変に評判が良かったが、七夕を過ぎたからが大変だったのだ。

何せ生の笹なので、放っておけば枯れてしまう。

七夕が終わるまでは、希望者にはミニ七夕ツリーとして笹を切り分けてプレゼントしたりもしていたのだが、結局大半の笹が余ってしまい、真央はあろうことがそれをアパートへと持ち帰ったのである。

提供してくれた常連客の手前、目につく場所でゴミに出すのは忍びないと言うのだが、何日もアパートの廊下を迷惑に占領した上、結局枯れてしまって泣く泣く何日にも分けて燃えるゴミで出す羽目に陥ったのだった。

「魔王のああいうところ、どうなのかしらね」

「へ？」

「ああいう臨機応変さって、社会的にどうなのかしら」

「どういうことですか？」

「基本的に魔王のやることって、お客さんに評判いいじゃない？ もちろん木崎さんの根回しあつてのことなんだろうけど」

「はい……」

恵美は少し真面目な顔になって、千穂の向かいの椅子に腰かけた。

「でもマダロナルドに限らず、こういう企業って商品以外のところでも『均質のサービス』にこだわるでしょう？ 魔王のあれは『均質』を逸脱してたりしないのになって」

「あ」

そのとき千穂は、マッダカフェが幡ヶ谷駅前店で始まってすぐの頃を思い出す。

木崎の淹れるコーヒート真奥の淹れるコーヒートには、はっきりと味に違いがあった。

美味しいコーヒートが飲めればそれでいいのでは、と思っていた千穂だが、真奥が「木崎のコ

「ヒーを飲めない客に、質の劣る品を提供していることになる」と言っていたことを思い出した。

「知ってる？ 最近お客さんの間で、木崎さんのコーヒーの味が落ちたって言われてるの」

「えっ？」

千穂は、心底驚いた。

木崎に限ってまさか仕事に手を抜いているはずがない。

ということとは……。

千穂の表情を察して、恵美は頷いた。

「そう、不味くなったんじゃないかって『普通になっちゃった』って、常連の人が噂してるのを私も、明子さんも聞いたの。どういふことかと思って……」

「木崎さんも『均質なサービス』を逸脱しないようにしてる……？」

「のかな、って。本当のところは分からないわよ？ 木崎さんに面と向かって聞ける話でもないしね。ただ七夕のこととか、これまでの魔王の接客とか思い出すと、あいつのやってきたことって木崎さんの下だからできてたって面が大きいんじゃないかって思ってるね」

正社員への登用率は決して高くはないという事実。先ほどの木崎の独り言。『普通』になったコーヒー。『均質』の範囲を逸脱しているかもしれない、真奥の仕事。

それらはもしかしたら、マダロナルドという会社内においては真奥の出世の障害になってし

まうのではないか。

会社には会社の考える、利益の上げ方の枠というものがある。

「利益」とは金銭的な数字以外の目に見えない部分でも間違はなく基準が存在していて、呼び方を変えればそれはマダロナルドという企業が期待される上限と下限をいずれも逸脱しない「信用」と言い換えることもできるのだ。

だが真奥の、そして木崎の仕事は、その期待の上限を逸脱し、相対的に他店舗の信用を損ねているととられてしまうのかもしれない。

より良いサービスを顧客に提供できる力があるのに、それを敢えて抑制しなければならぬというのは一見理不尽にも見える。

しかし上限を設けなければ、期待される信用を悪意なく破壊的な方法で破壊させ、他の者に悪影響を及ぼす者が現れることがままあるのもまた事実である。

真奥が正社員への道を歩むことは、千穂にとって真奥や恵美がより長く身近にいてくれることと比例しているため、千穂の胸中に、急激に不安の霧がかかるが、それを察したかのように、恵美がぼつりと言った。

「そういうのに負けずに、頑張ってほしいところだけだね」

「え？」

恵美の口から真奥へ素直すぎる応援の言葉が飛び出たため、千穂は意外そうに顔を上げた。

恵美は千穂の疑問を先取りして頷く。

「だって、魔王が正社員になれば、あいつがこっちで頑張ってる間にエンテ・イスラは完全に復興して、二度とあいつに世界征服なんて馬鹿なことさせないで済むもの」

「遊佐さん……」

「それで私は、時々思い出したようにアラス・ラムスと二人で様子を見に来るの。バカなことやってないかなーとか、悪いことしてないかなーって、それで……ね。また来年も、アラス・ラムスと、千穂ちゃんと、大切なみんなと七夕やクリスマスをするの。もう……」

恵美はそこで立ち上がり、自分のロッカーへと向かう。

「殺したり殺されたりなんて暮らしは真つ平よ。私は決めたの。悪いけどアルシエルには二重の意味で泣いてもらうわ。魔王が無事正社員になって泣いて喜ぶその涙は、悪魔による世界征服が絶対^{絶対}に敵^{あか}わなくなる瞬間^{瞬間}を啼^なく涙になるの」

「……………そ、それじゃあ……………」

千穂は思わずパイプ椅子を蹴倒す勢いで立ち上がると、着替えるためにシャツを脱ぐ恵美の背に抱きついた。

「遊佐さん、遊佐さん！ それじゃあー」

「……………私の負けよ。全部千穂ちゃんの思い通りになっちゃったわ。本当、悔しい」

恵美は優しい声で、振り返らずに言う。

「私は……もう、戦わない」



イダノラとサタナエル、そしてルシフェルの意外な関係性に驚く千穂達の表情を満足げに見
 回しながら、ガブリエルは話を続けた。

「ルシフェルが生まれたのは僕らが母星から離れた後のことだけど、とにかくイダノラは人を
 不老不死にする道筋を発見した。だがそれはまだ実験段階で『ほぼ確実に不老不死になれるだ
 ろう』ということしか言えなかった。そりゃそうだよわ。寿命や病気（こころなげ）で人が死なないかどうか
 なんて、実際に年月が経たないと分からないんだからさ。でもイダノラ達の当初の目的である、
 星を覆う風土病への対抗方法が見つかったということが、世間では重く受け止められた。で、
 最初に言った通り、この不老不死の技術を盗って人が争いはじめ、僕の星は滅んだ」

「ま、待て！　いくらなんでも端折りすぎではないか？」

「そうですよ。不老不死を盗って争いが起こるのは分かりますけどもそれだけで滅んだって
 そんな」

「第一それだけじゃ、ガブリエルさん達が今エンテ・イスラの月にいる理由になりません」
 鈴乃（スズノ）とエメラダと千穂の連続攻撃を、ガブリエルは両手を上げて抑えた。

「慌てない慌てない。もちろんそれには色々理由がある。でもさっきクレステイア・ベルに言った通り、一つ一つの話は全然意外でも高尚でもないんだ。人間ってのは、斯くも愚かなのかと絶望したくなる話のオンパレードなのよ」

風土病が星を覆った初期、経済的にも軍事的にも未熟な国が、まず最初に亡んだ。人が死に絶えたわけではないが、人口減によって国家としての体面を維持できなくなったのだ。

小国とは言え、沢山の国が亡びれば世界の経済もタダではすまない。

大國が自國經濟の保護に走り、イダノラ達が月で研究を進める間に國家間の睚眦の緊張は極限状態に達していた。

イダノラを頂点とする月の入植都市には、世界各国からいつか風土病に対抗し得る結果が出たときに、真っ先にその恩恵にあやかろうとする国が競って金と人を送り込んだ。

イダノラも、サタナエルも、カマエルもラダエルも、ガブリエルもサリエルも、ライラも、全員出自はバラバラであった。

それ故に月の入植都市は世界の縮図であり、それでいて集まった者達は全世界の救済のために一致団結していた。

そしてある日、イダノラの研究成果が発表されたたん、彼らの拠って立つ『母なる大地』が、國境の形にひび割れはじめた。

まず、イダノラを派遣した国が、彼女を地上に召還しようとした。

サタナエルもまた、母国からの召還状を受け取っていた。

不老不死の研究に少しでも携わった者全員が、国への召還命令を受けていたのだ。

だが、研究者達にしてみれば不老不死の研究は始まったばかりでおよそ実用レベルには達しているとは言えず、今の段階で国に帰るなど考えられなかった。

サタナエルとサリエルが窓口となって、必死に母星との折衝を続けたが、結果ははかばかしくなかった。

そればかりか、月の入植都市を管理する国際機関に世界中から短慮に過ぎる訴えが寄せられ始めた。

曰く、某国が我が国の研究者を月の入植都市に拘束している。

曰く、某国が我が国の研究を盗むためにスパイを送り込んでいる。

曰く、月面の人員や物資が着陸する宇宙基地は我が国にあるのだから、研究の持ち出しには関税をかける。

恥も外聞も無く、誰もが不老不死の研究を自分のものにしようとした。

その内、イダノラの研究チームや入植都市がプレス向けに発表した文章だけで研究内容を類推し、国内の機関で無理矢理不老不死研究を再現しようとする国まで現れた。

大国が研究を独占するのは人類に対する罪だと、テロ行為に走る者が現れた。

世界の人々を救うはずの研究成果が、世界を混乱の巷に陥れていたのである。

だが、こうしている間にも風土病は星を蝕む。

ガブリエルの母星を覆う有害物質は、人体のあらゆる箇所ですべて別種の症状を同時多発的に引き起こすため、一度風土病を発症してしまうとよほど運が良くなければ助からなかった。

呼吸器が体内への主な侵入経路である有害物質は、消化器系では人体への栄養補給を阻害し、神経系では神経信号の伝達を阻害する。

肺で発症すれば酸素吸入率を著しく低下させ、血液で発症すれば簡単に血栓になっってしまう。凝固作用を起こす物質に変異した。

症状の発症率は個人差が大きく、有害物質を常時吸入しながら通常通りの寿命を終える者もあれば、ほぼ無菌状態だったのにたった一度、微量に吸入した程度で複数個所に症状が現れる者がいて、通常の医学的アプローチではすぐに限界に行き当たってしまう。

発症後の五年生存率が五十パーセントを下回るこの風土病の罹患率は全人口の三十パーセントを越えており、世界の平均寿命と人口動態は破滅的な速度で下降線を示した。

不老不死の研究が現実味を帯びてきた頃にはもはや、人類は未完成の技術すら先を争って奪い合うほどの限界に来ていたのだ。

母星を離れようと画策しても、月や他惑星の入植都市に移れるのは一部の富裕層のみで、そこですら星系内を漂う有害物質を完全に排除できている確証は無い。

事実イグナラ達の研究所でもわずかではあるが発症する者がいて、ガブリエルは幾度となく

ハザード警報を鳴らしたものだ。

それでも、大國が世界を力で押さえられているうちはまだ良かったのだ。

月の研究者達は色々な理由をつけて母國への帰還を先延ばしにしつつ、なんとか不老不死の研究を先に進めていた。

研究所では学術的技術的な困難とは無関係な障害が増し、ガブリエルは警備主任として、警備員の武装の方向性を、制止力から殺傷力にシフトする判断を下さざるを得なくなった。

それでもイダノラも、サタナエルも、ライラやカマエルを含めた研究に携わる全ての者が、自分達の研究が完成しさえすれば、世界が無意味な争いをやめると信じて、不眠不休で仕事を続けた。

母國や他國の工作員に拉致されたり襲撃されたりする危険を顧みず、何度も月の裏側にある巨木に行つてサンプルを取り、ただ不老不死を達成するだけでなくその技術を量産する方策も練った。

誰にも責任の無い降つて湧いた災禍から、全人類を救いたい思いだけが支えであった。そしてある日、それは起こった。

ガブリエルに通報したのは、ライラだった。

イダノラとサタナエルが、激しい言い争いをしていると、駆けつけたガブリエルの耳は、確かにその一言を聞いた。

「この子こそが人類の希望なのよ!! 滅びかけた人類全てに光明をもたらす晩の子なの!!」
サタナエルはその一言に激昂したが、イダノラは取り合わなかった。

「完成よ! 遂に完成した! 私ほ成し遂げた! これで人類を救えるの!!」
ガブリエルは、イダノラが何をしたのか分からなかった。

分からなかったが、イダノラが不老不死について一つの結論を出した、ということだけは理解した。

そのときだった。

入植都市全体に、深刻な異常事態発生を知らせる警報が響き渡った。

警備主任たるガブリエルに部下の警備員から届いた通信は、断末魔のそれだった。

「カイエルとシェキーナが来た! 大勢殺された! 早く逃げてください! ってね」

ବିଶ୍ୱାସୀ ଶ୍ରୀମତୀ ଶ୍ରୀମତୀ



エメラダが惠美と千穂がシフトに入っているマダロナルドに夕食を食べに行つたのとはほぼ同時刻。

帝城エレニエムの特徴的な尖塔屋根で照つていた無数の鳩が、怒号に驚いて一斉に飛び立った。

「俺は！ この国の連中が！ 嫌いだ!!」

大柄な体が小さな執務机から弾けるように飛び出して、書類は怒りの火花のようにひらひらと辺りに飛び散った。

「喧しいぞアルバート。私の目の前で堂々とそんな宣言をするなど、青同会議ものだ」

勇者の仲間達の中でも圧倒的な体軀を誇るアルバート・エンデの、野生の肉食獣を思わせる弾猛な叫びと俊敏な行動を、明すら動かさずに冷徹にいなした女がいた。

「うるせえヘイゼル！ お前も嫌いだ！ もうこれ以上やつてられっか!!」

戦場ではないため通常の執務服ではあるが、その内から放出される威厳は隠しようがない。

五大大陸連合騎士団西大陸代表にして、今やセント・アイレ近衛騎士団長として軍政のトップに君臨する若き女將軍、ヘイゼル・ルーマックである。

「エメが帰ってきたくねえのも頷けるぜ！ 西の連中は、揃いも揃って陰謀で陰険だ！」

「それを私に言っとうする、アルバート法術監理院院長代理」

ルーマックの水を思わせる一言に、アルバートは炎の如く喚き返した。

「そうだよ俺は代理だー さらに言えばあくまで法術監理院院長代理であって宮廷法術士代理じゃねえー それをなんだお前らも監理院の連中も、おおう? 「エメラダ院長ならこんなのすぐなのに」って、陰口叩くならまだしも俺の目の前で聞こえるように言うんだぞ! そんなに不満ならああいさ俺は今すぐこの椅子から降りてやる! その代わり今すぐあのチビブロッコリーを呼び戻せ! 別に俺は好きでこんなちんまい椅子に座ってんじやねえや!!」

「法術士共の陰口程度で泣き言とは、意外に細い神経をしていたんだな」

吠えるアルバートを見て、ルーマツタは意外そうに眉を上げる。

「敢えて偏見たつぷりに言うが、監理院の法術士や研究者など浮世離れした人種だから付き合ひ方が面倒だ程度に思えば腹も立たんだろうに」

「そんな段階はとうに過ぎた! なんだって俺が大気中の聖法気濃度分析調査の研究内容精査なんてしなけりゃならんだ! するだけならまだしもなんで「ココ間違ってますよ、これで二度目ですね」とかあんなモヤシ共に鼻で小馬鹿にされながら訂正印押さなきゃならんだ!」

「相当溜め込んでるな、ところで私は、お前が怖いから期限が迫ってる魔議書の催促ができないと泣きついてきた連中の代理で来たんだが」

「ああ!? 一昨日くらいに来た鎧ばかり立派な貴族のお坊ちゃま方の話か!? お前少しは近衛騎士団の採用基準見直せよ! あんなにピカピカ光って目立つ鎧着てても戦場じゃ彈差けにもならねえんだぞ!? むしろあいつら狙って法術が着弾して被害甚大だ!!」

「彼らの仕事は戦地に赴くことではない。帝城の裝飾となることだ。彼らは未来永劫刀槍を受けることのない鎧を顔が映るほどに磨き上げて、皇帝陛下の城を輝いているように見せるため陽光を他国からの使者のツラに跳ね返すことで給料をもらってるんだ」

「そりゃ大層なご身分だなあ？ ええ？ それで今中央大陸でヨソの大陸の連中や、悪魔の殘党連中とやり合ってる奴らよりいい俸給もらってんだろ！ 世の中間通ってるぜー」

「全くもってその通りだが、ではアルバート代理も彼らのような立場に立ちたいか？ きつとつまらんぞ？」

「あいつら自分がつまらん人生送ってるってことに一生気づかないだろ！ 気づかぬえならそれでもいい！」

「やれやれ」

荒れ狂うアルバートを見てルーマツタは家讀書の督促状が入った封筒をぐしゃりと握り潰し、執務机の脇にある屑籠へと投げ入れた。

法術監理院は官廷法術士エメラダ・エトウ・ヴァを院長に据えた皇帝直轄のれっきとした役所であり、建前上は騎士団から独立した組織になっている。

そのため騎士団からの問い合わせ、要請その他はきちんと書面を作る必要があるのだが、つまりルーマツタは、アルバートが督促状を受け取った上で却下した、という体裁を作ったわけだ。

「少し飲みにも出るか？ 北の大きな大地で過ごされた山の戦士には、都会の帝城は狭かろう。城下へ散歩に出てはどうだ」

「そのままどこかにトンズラしてもいいつつーんなら付き合うぜー」

「私も自分が困りたくないからな。お前が逃げ出したら帝国全土に手配書を配ることになる」
ルーマツタも本当に逃げ出すとは思っていないだろうが、それでもアルバートが連れていかれた場所は、彼女の執務室だった。

「なんとも色気のねえお誘いだな」

「時として女であることはそれだけで弱点たり得る。私もそれほど、自分の国の連中を好きではない」

いっそ無骨を絵に描いたような無骨さのヘイゼル・ルーマツタの執務室には、女性らしい華やかさは皆無であった。

儀仗用の鎧ですら、パーツ一つ一つが刃のよう^{やいば}に研ぎ澄まされて見える。

「珍しい酒が手に入つてな。だが、腐ることすら貴くある酒を好む連中には勧められん見た目の代物だ。その点世界を彷徨^{さまよ}した勇者の仲間になら、躊躇^{ため}いなく勧められる」

「うお」

ルーマツタが書棚の奥に隠すようにしてあった瓶^{びん}を取り出した途端、アルバートは目を見張った。

「南大陸の酒だな」

「さすが、知っていたか」

大容量の無骨な瓶の中には、見覚えのあるグロテスクで巨大な蜘蛛が丸々一匹潰けられていた。

「砂漠の国の王族にのみ製法が伝わる秘酒だそうだ。飲んだことは？」

「酒にまでなるとは知らなかったな。もし飲み干したら、中の蜘蛛はブツ切りにして香辛料をまぶして串を打って炭火で焼くといい。これがなかなか美味いんだ」

銀のタンブラーに注がれた薄く黄金色に染まった酒からは強烈なアルコール臭がしたが、思いきって口に含んでみると思いのほか柔らかい口当たりで、喉から胃の腑までをやさしくなでていく癖になる味がした。

「悪くないな」

「だろぅ？」

アルバートの空になったタンブラーに、ルーマックが遠慮なく高い酒を注ぐ。

「それで？ エメラダは他に何を言ってきたんだ」

「ああ？」

「ただ無責任に異世界滞在期間を延長したわけでもあるまい」

「どうだかな。美味しいもんを食い逃したくねってのが本音だと思っぜ。なんでも聖誕祭みた

いな祭があつて、その時期にしか食べねえもんが沢山あるらしい」

アルバートは、今度は酒を舌の上で転がすように、小さく口に含んで飲み下した。

「ということは、本音以外にも何か理由をつけてきたのだろうか？」

「ああ」

アルバートは、勧められもしないソファにどっかかりと腰を下ろした。

「エミリアが大学に通いたらしい。もちろん向こうのな。それを後押ししたいんだと」

「ほう」

ルーマツタは楽しげに目を見開いた。

「ニホンでは、平民の婦女子も高等学府で学べるのか」

セント・アイレでは、大学のような高等教育を受けられるのは貴族の男子に限られている。

身分の上下なく広く民衆に神の門を開いているという建前の教会神学校も、実状は大学に入る力の無い貴族の子弟の受け皿になっているのが実情だ。

なまじ家柄しか誇るものが無い連中が集つてしまつてゐるため、下手に平民が紛れ込めば針の筵に座るも同然だと巷間噂されている。

「身分は問われないらしいぜ。その代わり金がかかるらしいが」

「そうか。ことが異世界ではこちらから仕送りするわけにもいかんしな」

「もし金が両替できたとしても、エミリアはこつちの援助を受けたりはしないと思うぜ」

アルバートはタンブラーの中にくゆる酒の水面を眺める。

「そうだな。『勇者エミリア』相手に貸しを作れば、それだけでエンテ・イスラ全土のあらゆる局面に於いて優位に立ち得る。それを頼むしいと思うなら、エミリアはもうこちらには戻ってこないつもりなのかもしれないな」

むせ返るような香りを立たせるグラスをくゆらせながら、ルーマツタは口の端を上げる。

「随分嬉しそうじゃねえか」

「もちろん。私はエミリアに、帰ってきてはしくないからな」

笑顔でそんなことを言うルーマツタの真意を、アルバートは痛いほど分かっていた。

「蒼天蓋での一件は、思いのほか早く広く伝わっているぞ」

蒼天蓋での一件とはつまり、勇者エミリアと悪魔大元帥アルシエル生存の情報に他ならない。

「もちろんエミリアもアルシエルも今はエンテ・イスラにはいない。だが二人の姿をあまりにも大勢の人間が目撃した。遠くに行けば行くほど情報は着実に拡散されるが、それでもどんな薄められた酒からも、正体を突き止めるソムリエはいるものだ」

「だからって、答えは異世界だ、ってなる奴はそうはいないと思うが」

「絶対に無い、などと言うことは無いさ。悪魔だって天使だって実在した」

ルーマツタ自身は敬虔な大法神教会の信徒であるが、この世の全ての事象に神が関与してい

ると盲信するほど愚かでもない。

「帰ってきてもエミリアは絶対に幸せにはなれない。スローン村の復興を騎士団の情報統制の下に進めることはできるだろうが、蟻の穴は容易に、そして無数に空くものだ。勇者エミリア・ユステイナの名はもはや、存在するだけで誰かを犠牲にせずにはいられない」

勇者エミリアはセント・アイレ領内のスローン村に生まれた。その事実によって、ルシフェル軍を駆逐して救世の英雄として名を上げはじめた頃から、セント・アイレは折につけエミリアの名を旗印にして政治的に、経済的に、軍事的に他国より優位に立ってきた。

それでもまだ、人類共通の敵として魔王軍が立ち上がった頃、全世界がセント・アイレに最も犠牲を払う一着槍を押しつけている、という体裁があったから良かった。

だが、世界が共通の敵を失った今は違う。

諸外国や他大陸から、エミリアがセント・アイレ人であるという認識を得ることはできても、今度はセント・アイレ内部でエミリアの処遇や所屬を巡って政争が起こる。

スローン村はカシアス城塞都市の衛星自治体ということになるが、カシアス城塞都市にもスローン村を含めた近縁を治める貴族領主がいる。

先代のカシアス侯爵は先の近衛将軍ビビン・マダナスの没落にあり、『蒼天盞の一件』に絡みビビンが失脚したこととでその地位を追われた。

だが侯爵家自体が断絶したわけではない。

ビビン派が表舞台から消えたというだけで、侯爵家を継承し得る親戚戚戚はまだまだ腐るほど残っている。

中には地方や他国に影響力を持つ者もいるため、不用意に断絶などすれば他の貴族連やカシア侯領の下位貴族連の反感を買ってしまう。

そのため現在はカシアス侯爵家の一族の中からルーマツタ寄りの人物を配することで、カシア侯の家名は存続させ、先代の罪を手打ちとした状態だ。

そんな状態だから、もしエミリアがスローン村に帰還して隠遁生活を望んだとしても、人類最強の存在がそこにいる、という事実だけで、当代のカシアス侯の国内の影響力は圧倒的になるだろう。

ただ名前を利用されるだけなら良い方で、下世話な貴族などはカシアス侯爵やその背後にいるルーマツタ、果てはセント・アイレ皇帝への影響力を持つために、エミリアの女性としての尊厳すら利用しようとするだろう。

つまりは、エミリアを妻に迎え、家名を上げようとする者がこのセント・アイレには間違いない存在する。

そしてエミリアの性格は、自分が政争の具として扱われることを決して良しとしない。

「一生強身を貫くしがあるまいな。私のように」

「ハイゼル・ルーマツタの名は皇太子殿下も欲しがってるって噂に聞いたことがあるぜ？」

「私自身を求めない男はいらない、などと少女のようなことを言うつもりは無いが、それでも私は鎧よろいを磨き上げるしか能あたわない連中の親玉を、生涯愛する自信は無い」

「査問会議どころじゃねえな。帝室を侮辱したカドで死罪モンだ」

ルーマツタの齒に衣き着せぬところは、アルバートも氣に入っていた。

「エミリアが平民の男と恋に落ちれば、その男は謎の死を遂げることになるだろう。貴族に嫁よめげば自ら政争に飛び込むようなものだ。それこそ、鎧の親玉など話にもならん」

「英雄は伝説にのみ生くる、ってか」

「そうでなければ、英雄が英雄であることを誰一人知らない世界で、だ」

ルーマツタは斷腸酒に栓をすると、また書棚の陰に隠してしまう。

「今の私に彼女に対してできることがあるとすれば、エンテ・イスラを救ったことを後悔してくれるなと願うことだけだな」

「そこまであいつも彼量じゃねえよ」

「大人になれば、子供の頃に気づかなかったことに気づくこともある」

若く見えるルーマツタも、実際のところ国家の要職に就いて不自然でない程度には年を重ねている。

エメラダよりはアルバートの方が、年齢的には近いのだ。

そんなルーマツタだからこそ、自分より十以上年下の少女に国どころか世界全ての重みを背

負わせたことへの負い目は、エメラダ以上に感じている。

だがエミリアとの距離感と職責の問題で、それを減多に表に出さないだけだ。

「それでもエミリアが幸せに生きられる世界を作れるのならなんでもしてやりたいが……きつと彼女は、私にそんなことは望むまい。エミリアにとって私など、障あらば自分を利用しようとする権力者の一党にしか思えぬだろうからな」

少し寂しげに目を伏せるルーマックは、アルバートは意地悪く笑う。

「そういうことなら安心しろよ。日本にはこっちのしがらみを気にせず、エミリアのそういうグチを聞いてくれる奴がいるから、今更お前にできることなんざねえさ」

「ふん……参考までに聞いておくが、それは誰のことだ？」

「あ？」

アルバートは好奇心たつぷりに自分を見つめるルーマックの視線をしばし受け止め、やがて彼女が何を自分に言わせたいのか理解し、ため息をついた。

その手には棄つてやるものか。

「チホ・ササキって小娘と、リカ・スズキって女だな。二人共エミリアの仕事仲間さ。クレスティア・ベルも、教会の人間にしちや話が分かる女だぜ。カミサマを眞面に押し出してこないところがいい」

「はああああ」

するとアルバートの回答に、ルーマックは思いきり顔を曇め、いつそすがすがしいほど不満顔を隠さず吐き捨てた。

「つまらん！　なんだそれは！」

「なんだよ！」

「そんなことだからお前は監理院の連中に陰口を叩かれるのだ。タダ酒を呑んだのなら少しは私を楽しませろ」

こんな理不近な話があるだろうか。

「何やっただって叩かれるもんは叩かれるんだ。それなら少しでも自分がストレス溜めない方向でやるしかねえだろ」

「ふん、エメラダの薫陶なのか知らんが、察しの良すぎる男というのもつまらん」

「察しが良くなったって悪くなったって文句言う女よりはマシだ」

「なるほど、どうやら私達は一生独身のまよの方が楽しい人生を送れる人種のようなだ」

「北の遊牧民は一所に落ち着く生活してねえもんでな。高い酒をご馳走さん。お札にきっきの督促状は、一番に処理しておくぜ」

不満たらたらのルーマックの執務室を後にしたアルバートは、大人しく法務監理院への帰路につく。

道中何度も窓から聖都の様子を見下ろしながら、人々の生活は斯くもシンプルなのに、何故

人の世がそこまで複雑になってしまふかに思いを馳せることになる。

「……いかにいかに、高い酒で酔ったわけでもあるまいに」

本来はエミリアにとって、セント・アイルが特別生き辛いわけではない。

スローン村に限らなければエミリアの素性を隠しておける場所など世界中にいくらでもあるだろうし、逆にエミリアが日本で功成り名を遂げてしまえば、日本はエミリアの人生にそれなりの枷を課すだろう。

「そこ行くと、魔王の野郎は結構好き放題やってるよな」

アルバートも敵として多くの悪魔と相見え、その中でもかつて北大陸を制圧したアドラメタの人格に触れ、悪魔が理性の無い動物的な群れでないことも分かっている。

悪魔には悪魔の社会があり、王にはそれなりのしがらみもあるのだらう。

だが魔王サタンと勇者エミリアの日本での出発点は、やはり決定的に異なるのだ。

サタンは王としてエンテ・イスラに現れ、王として日本へと逃けた。

一方のエミリアは、望みのまま勇者になり、英雄としてあがめられたその責任を個人として全うしようとした結果、日本へと漂着した。

サタンは世界征服という大望こそ叶えられなかったが、彼自身が望んだ道を歩んできた。

エミリアは世界平和という大望を叶えたが、その道は彼女自身が望んだ道ではなかった。

エメラダがその違いを認識しているか分からないが、エミリアが望んで進もうとする道を応

授けたいという気持ちの根っこで、その動かしがたい事実を実感しているはずだ。

望まぬ道の果てにかつて抱いていたのとは全く違う理想を手に入れた、という話はよく聞くが、エミリアが今後幸せな人生を送るにはもうその生き方しかないのではないか。

ルーマツタの言うように、今のエンテ・イストラにエミリアの居場所はない。

彼女の名は存在するだけで誰かを傷つけずにはいられない。

「だから、日本ですっと魔王と悪口言い合うだけの勇者ごっこやってろってか」

それも何かおかしい。

世界はエミリアに大恩があるのだから、エミリアの望むことを一つくらい恩返しとして叶えてやっていいはずだ。

何故どこまでもこの世界は、勇者エミリアを利用しなければ生きていけないのだろうか。

「かと言って、滅びちまえてのも違うしな」

世界がエミリアを過剰に頼らなければそれでいいのだ。

そもそもエミリアと魔王が日本にいる間のエンテ・イストラは、それができていたはずだ。

「留守番してたガキが、帰ってきた親に甘えるようなもんか」

魔王と勇者の留守の間、なんとかエンテ・イストラは己を律することができていた。

だがもし頼れる保護者が帰ってきてしまえば、世界はまた欲することを止められぬ子供に戻ってしまうだろう。

そこにもし魔王まで戻ってきたら今度こそ「救いようのない世界」になってしまふのではないだろうか。

そして残念ながら、そういうときに頼りになるはずの「神」もまた、現在大きな疑いを持たれている状況だ。

エミリアとアルシエルの再来の情報が世界中に漏れているように、大法神教会の最高指導者たる六人の大神官の一人、オルバ・メイヤーの人類に対する重大な裏切り行為もまた、じわじわと広がっている。

教会指導部からはもちろん、オルバと結託していたビビン一派やオルバに導かれ悪魔を国に引き入れた東大陸の有力者に近い者からも、その情報は世の中に漏れはじめている。

「平和ってのは、難しいなあ。戦ってる方がよっぽど話はシンプルだ」

ばやいているうちにまた憂鬱な監理院長室へと戻ってきたアルバートは、先ほどルーマツクが放り棄てた督促状を屑籠から拾い上げる。

「えー、何なに？ 聖地周辺の聖法気濃度調査のための研究者派遣に関する稟議……ああ、なんかあったなそんなんの。えーっと、確か教会周辺の話はこの辺に……」

アルバートは何日も前に決断を延期扱いにした束を探りながら、ようやく問題の稟議書を見する。

「ああそうだ。研究員を三十人も派遣しろなんて無茶言うから後回しにしてたんだった。フザ

けろつての。ただでさえ人足りてねえ上に、教会ががつつり囃^{ハシ}んでる案件をどのツラ下げてエメンとこに回してくるんだよ」

元々は大法神教会の秘本山にして聖地、サント・イダノレッドにて採水される聖水の泉源の調査に人員を派遣する計画のようだ。

サント・イダノレッドの聖水は儀式に使うのはもちろん、その豊富な聖法気含有量から教会病院で治療にも用いられているのだが、最近この泉質が落ちてきているというのである。

エメラダが故なき異端審問にかけられて以来教会と法術監理院の關係は思い切り悪化していたが、さりとて教会とセント・アイレは極めて密接な關係を結んでいるため、その程度のこととで両者の關係が断絶するような亀裂が入ることもまた無いのである。

だがそれはそれとして、監理院の研究者達はエメラダのことで教会に遺憾のある者も多いため、エメラダ不在時にアルバートが教会の用事を受けたと言えば、陰口がまたぞろ加速することには目に見えている。

「はああああ……エメ、さっきと増ってこいよ……」

聖水の質の悪化は民の生活にも直接影響するし、もっと言えば教会の威信を必要以上に下げることにも繋がる。

教会の神学校の教授だけで解決できないことを法術監理院、ひいてはセント・アイレが解決したとなれば恩を売ることにも繋がるので、その方面でやる気を出させるしかない。

「にしても、聖法気含有量の顯著な減少ねえ……落盤で地下水のルートが変わったとか、そういうことなんじゃねえのかあ」

アルバートは首を傾けながらも、要請書に監理院長代理として承認の印を押し、派遣する人員のリストアップに取り掛かったのだった。



「カイエルとシエキーナの目的は、不老不死の技術抹消だった。彼らは不老不死にまつわるデータや設備を次々に破壊していった。普通の警備員じゃ、全く歯が立たなかった。僕とサタナエルとカマエルが最後の警として鎮圧に当たった、激戦だったよ。彼らの遺伝子構造を理解していたサタナエルがいなければ、僕なんかあの場で死んでいたと思う」

ガブリエルは身震いした。

魔王と勇者を同時に敵に回して尚、飄々としていた大天使の顔に子穂は、初めて「恐怖」の感情を見た気がした。

「そのカイエルさんとシエキーナさんは、イダノラの研究を助けてたんですよね？ それなのになんで……？」

その疑問は当然だったが、ガブリエルはその質問を想定していた。

「彼らは、イダノラの力を低く見誤ったんだ。自分達が手伝うことでイダノラが不老不死なんてとんでもない技術に迫り着くなんてことは思いもしなかった。もつと手前の段階で、風土病に対抗する方法を見つけさせるはずだったんじゃないかな。でも、結果的にイダノラが見つけたしまった不老不死を實現する技術は、セフィタの子の彼らにとって見過ごすことのできない『人類の危機』だったんだ」

セフィタが人類の歴史に介入するのは、人類が人類だけでは対抗し得ない危機に陥ったとき。風土病に対抗する研究が滞ったのは、間違はなく人類の危機であつた。

だが、セフィタの介入によって、人類は「不老不死を得る」という危機に瀕したのだった。「簡単なことだよ、人間がもし自然死しなくなったら、世界はどうなる？」

人口爆発、食糧不足、領土紛争。

そんな単純な事象が、千穂達の頭を過った。

「人間が歴史を作るには、人間が死ななきゃダメなんだ」

全ての人類が不老不死を得れば、世界は崩壊するのだ。

カイエルもシェキーナも、そんなことのためにイダノラに協力したわけではなかった。

だから、人類の危機を抹消するために戦いを起こした。

「でも……サタナエルとカマエルは、激闘の末に勝ってしまった。カイエルとシェキーナのDNA構造を把握していた研究者である二人だからこそできたことかも知れないけど……これが

通り巡って、最終的にはエンテ・イスラの不幸に繋がってしまったんだ」

セフィラの子を撃退した月の研究所だったが、母星では研究所の危機が全く違う形で伝わってしまった。

即ち全ての国が、どこかの国が研究成果を独占すべく月面を襲撃した、という判断を下したのだ。

そして、永遠に終わらない戦争が始まってしまった。

各国が自国の研究者を保護する名目で、一斉に月面に軍を派遣しはじめた。

だがそれらの軍が、地上で、空中で、宇宙で、月面で、衝突し、殺し合った。

研究目的を達成したときには想像だになかった事態が目の前で展開された月の研究所と入植都市は、一つの決断を下す。

それは、月面からの脱出であった。

このまま各国の軍に研究所が分断されれば、折角確立した不老不死の技術が失われてしまう。もはや、母星の国々は完全に冷静さを失っており、月の研究所が何を言ったところで、間違はなく研究の全てをご破算にしてしまうだろう。

イダノラ達は、母星を見限った。

ガブリエルは警備責任者として、入植都市の一部と共に研究所を宇宙に脱出させた。

全ての惑星入植都市は緊急時には稼働型の宇宙基地として運用できるようになっている。

基本的には宇宙進出当時に締結された約束事で、一国による占領行動をさせないための措置であったが、それが最終的に、母星の全ての国から逃亡するために使われるようになるとは、誰も思わなかっただろう。

研究所が月面から離れるのを、各国の軍はただ指を咥えて見ていることしかできなかった。下手に攻撃を仕掛ければ、不老不死が失われる。

それをした国は、世界中から攻撃されて滅びるだろう。

「でもその期に及んでも、母星の国々は戦闘をやめることをしなかったの」

ライラは悲しげに首を横に振った。

「ただ全ての国が、逃げるな、我が国に戻れ、と見当違いの命令を飛ばしてくるだけだったわ。私達が何から逃げているのか、彼らは遂に理解しなかった」

イダノラは母星に絶望し、月の入植都市を母星の衛星軌道から外れるコースに突入させる。

「母星と月が遠くに消えようとするとき、聖法氣スキヤナーが異様な反応を示したの。超長距離光学望遠鏡が捉えたのは、月面からゆっくりと離れていくあの枯死した巨木だった」

「人が、終わった」

「ごめんよ、ダート」

激戦の末、捕えたカイエルとシエキーナの姿が、その一言と共に掻き消えた瞬間を目にした者はいなかった。

その後、イダノラ連月の入植都市と研究所の面々は、超遠距離スキヤナーから、全ての惑星入植都市と母星の主な都市が消滅したことを知ることになる。

それは星系から逃亡し、たった十年、星系外縁を漂っている間の出来事であった。

あまりにもあっけなく寄る辺を失ったイダノラ連月の入植都市の民は、それから気が遠くなるほどの長い時間、宇宙を漂流することとなる。

「もう、分かるわよね。漂流の末、辿り着いたのがエンテ・イスラの月。聖法気スキヤナーがデータベースにある、例の月の裏側にあった巨木と同じ波彩を捉えたの」

「それって……!!!」

恵美が息を呑み、クイラは重々しく頷く。

「すぐ近くに、母星にそっくりな星がある。私達はそこを第二の故郷に選んだ。でも……そのときのエンテ・イスラにはまだ、月は一つしかなかったのよ」

新・女性漫画家・山口ゆづり・新



「なんで……なんでそれで、こんなことになつてるの?」

千穂の話を全て聞き終えた梨香の悲鳴が、もぬけの殻の二〇一号室の空気を寒々しく震わせる。

「みんなでアラス・ラムスちゃんのためにクリスマスしてー 恵美のお母さん達の昔のことなんか気にせずにー 戦いを忘れて、天界やエンテ・イスラの人類のことなんか放っておいて、みんな今の生活を大切にしようとしてたんじゃないの? それなのに、なんで!」

千穂の、感情の見えない横顔は、全てに冷静に答えた。

「クリスマスパーティーは、結局開かれませんでした」

「えっ……」

「最初に、エメラダさんが帰りました。その後、鈴乃さんが、蓮佐さんとアラス・ラムスちゃん、それにノルドさんとライラさんがその次に。真央さんと声屋さんと漆原さんとアシエスちゃんは、一番最後でした。二十六日のことです」

「二十六日って、クリスマスパーティーをする候補日の……」

「二十三日は祝日で、本当ならその日にパーティーをするはずでした。鈴木さんにも参加してもらうなら、祝日の方がいいだろうって決めたんです。でも……真央さん達は、二十三日を待つことなく、エンテ・イスラに帰ることを決め、二十六日にはもう、みんな」

「千穂ちゃんを、置いて?」

「……はい」

「そんなの、そんなのってヒドいよ！ 友達なのなんだからって言って、みんなで決めたバーティーもやらすじまいなんでしょ？」

「仕方なかったんです。何もかも仕方なかった。全て、たった一言で覆ったんです。あの漆原さんですら、戦いに身を投じる決意を固めてしまうほどの、一言で」

「そんな……みんなそれぞれに思いが違つて、やりたいことがあつて、それでどうして……」
表情の硬い千穂が、薄く笑つた。

「勝てませんよ。誰も。あんなこと言われちゃつたら」

「千穂ちゃん……」

自分よりも強く、自分よりもずっと長く、異世界の来訪者達と心を通わせていた千穂が、こ
うも簡単に諦めてしまうほどの事態が起こつたのか。

およそ梨香には何が起こつたのか、予想の手がかりを得ることすらできない。

「ライラさんは驚いてました。あれだけ頑なだった真奥さんと遊佐さんが、揃つて話を受ける
って言い出したんですから。ガブリエルさんと一緒に何度も意志の確認をしていました。真奥
さんと遊佐さんだけじゃない。私にも、芦屋さんにも、漆原さんにも、鈴乃さんにもエメラダ
さんにもノルドさんにも、本当にいいのかって。言いました。良いって。私も、そう言うしか
なかった。流されたわけじゃありません。本当に、そう言うしかなかったんです」

千穂が全く抵抗していないという事実が、梨香にはあまりに意外だった。

「それはどのことって」

「もちろん私には、一緒に戦うなんて選択肢は選べません……力が、無いんですから」

千穂の小さなため息を、室内の冷たさがそのまま白く染め上げる。

「鈴木さんには、知らせるのがこんな遅くなっちゃって、申し訳ないです」

「……仕方ないよ。私もなかなか恵美や青屋さんと顔合わせの覚悟が持てなかったし、実家でもごたごたがあつて年末年始はずっと向こうにいたから……でも……でも、そっかあ、行っちゃったのかあ。今年は恵美に、年賀状出したんだけどなあ」

昨年、恵美が年賀状を出しそびれたと言っていたのを思い出した梨香は、何年かぶりに手書きの年賀状を神戸の実家から恵美のマンション宛てに送ったのだ。

だが、今頃その年賀はがきは、アーバンハイツ永福町のポストの中で年明けの寒さに震えていることだろう。

「次は……いつ会えるの？ まさかもうずっと会えないままじゃ、ないよね？」

「……それは」

「その……神様を、イダノラっていう人を倒しにいくの？ すごく、時間がかかるんでしょう？ でも、きつと、毎日誰かと戦ってるわけじゃないんでしょう？ 帰ってこられる日だって、あるんですよ」

「分かりません、そのときの私には分からなかったんです。向こうに行つて、どんなことが待っているのか。だから……」

千穂は力なく、ゆらりと立ち上がつた。

梨香は立ち上がれず、畳の上でへたり込んだままだ。

現実を、受け入れられない。

いや、本来はこれこそが現実なのだ。

本当はいるはずの無かつた君達が、本来あるべき場所に自分達の意志で帰つたのなら、それを止める資格は梨香にも、千穂にも無いのだ。

真奥貞夫などという男は、この世界にはいなかった。

遊佐恵美などという女は、この世界にはいなかった。

全ての人間が、本来あるべき世界に、姿に、戻つただけなのだ。

「だから」

本来あるべき世界。

「そんなの、認められない。待つてられませんかよね」

心を、存在するはずのない「本来あるべき世界の姿」が支配し空虚に支配された梨香は、打つて変わつて乾いた声を出す千穂を、思わず見上げた。

「いつまでかかるか分からない。生きて帰つてこられるかも分からない。そんな戦いが終わる

の、待つてられないです」

千穂は吐き捨てるようにそう言うとき、突然口元を覆うマフラーを解いて畳に放り出した。

「ち、千穂ちゃん？」

それだけではない。

背負っていたリュックを下ろし、着ていたコートを乱暴に脱ぎ捨て、一度玄関に走っていったかと思うと靴を履いて、梨香の靴を手に持ってそのまま土足で畳の上上がり直すではないか。

「千穂ちゃん？ 何してんの？」

「鈴木さん！ はいこれ！ ここで履いてくださいー」

「こ、こでって、え？ ちよ、ちよつとヤケにならないで……」

「今回ばかりは、我慢の限界でした。待つてられません、待つてられませんでした、だってそうでしょう鈴木さん！」

「え、ええ？」

梨香は千穂に胸倉を掴み上げられかねない勢いで揺さぶられる。

「真央さんは結局答えてくれないんですよ？ 私、ずーっと前から好きだって言ってる、この前だって答えが見えたら教えてくれて言ったのに、そんなことぼーんって忘れて、あの一言だけで向こうに行っちゃうんです！ 私いつまで待てばいいんですか？ せめていついつまで

にって期眼を区切るべきだと思いませんか？ 私、こんなに真奥さんのこと好きなのに！」

「あ？ え？ ええ？」

「鈴木さんだってそうでしょう？ まだ声屋さんから答え聞いてないでしょう？ いいんですかこのままで！ 良くないですよね？」 答へ、欲しいですよね！」

「え？ こ、答へ？ も、もしかして、告白の？ え、だってそれはこの前……」

「声屋さん、鈴木さんのこと、嫌いだって言いましたか？」

「ええ？ はい？」

「好きだって、嫌いだって、付き合うって、付き合えないって、友達でいようって、もう会いたくないって、言いましたか？ 言ってませんよね？ 鈴木さん、泣いてたじゃないですか！ あんなことするくらいなら二度と顔見せるくらい言った方がいいじゃないかって！ あの人はいつつつもそうなんです！ それは優しいさかもしれないけど、いつまでもそればかりじゃ納得いくものもいかなくなります！ そうでしょう？ 声屋さん、自分の気持ちも言わずに向こうに行っちゃったんですよ？ 悔しくないんですか？」

「あの、その、ええっと」

「付き合えないならそう言えばいいじゃないですか！ それなのに、それを言わずに鈴木さんに自分から詰めさせるような言い方するなんて卑怯です！ 真奥さんも、いつまで経っても分からない分からないばかりで、分からないのはどっちだと思ってるんですか！」

「お、お、落ち着いて千穂ちゃん、何？ 一体どうしたの？ 何をそんなに……！」

「もう私は、大切な人達の帰りを自分の部屋で膝抱えて待つてゐるような、大人しい『ちーちゃん』を卒業するんです！ そう決めたんです！ だからっ！」

怒号と共に梨香を解放すると、千穂はやおら二〇一号室の中央の畳の縁に手をかけた。

「うんぬぬぬぬぬぬ！」

「ち、千穂ちゃん？ 何してんの？」

「畳刺がしてゐるんです手伝ってください!!」

「は、はい！」

梨香は訳が分からないまま千穂に手を貸すと、畳は簡単に持ち上がった。

持ち上げても、梨香には千穂の行動の理由が分からなかった。

刺がした畳の下には、ただ普通の床板があるだけだ。

そこに何か隠してあつたりするわけでもない。

だが、一つ妙なことに気づいた。

やたらに綺麗なのだ。

刺がした畳の裏というのは大抵埃が詰まっていたり床板に染みやささくれができていたりするのだが、そこだけ磨いたように明らかに綺麗なのだ。

「私達は暇えません」

千穂は決然と言い放つ。

「空も飛べない。剣も振れない。炎も出せない。ビルから落ちればべしやんこですし、碎けた高速道路を直したりもできません。……でも、私は、料理ができますー」

「ええ？」

「私は真奥さんと遊佐さんと斎屋さんと漆原さんと鈴乃さんとアラス・ラムスちゃんの好きな食べ物を知ってますー！ 嫌いな食べ物を知ってますー！ お掃除ができますー！ 裁縫も勉強してますー！ 大変なときにグチを聞くことができますー！ 携帯電話さえあれば概念送受だって使えますー！ 私は、この二〇一号室に集まった人達の、心安らぐ友達になれていたと、自信を持って言えますー！ だから！」

そして千穂は、ポケットから、それを取り出した。

淡く光る、細く小さな、千穂の手に収まってしまうほどのそれを、千穂は高々と掲げて刺さ出しの床板に叩きつけた。

その瞬間だった。

「うわっ!!」

梨香は思わず、顔を疵った。

ラワン材の床板が突然光を放ち、光る油膜のように表面を揺らめかせはじめたのだ。

光はどんどん強くなり、梨香は目を開けていられなくなる。

「ち、千穂ちゃん、これって!?」

「少し待ってください。もうすぐ境界面が安定して、向こう側と接続しますから」

「せ、接続……うわっ!?」

最後に一際強いフラッシュが部屋を支配すると、強烈な光は収まった。

「もう目を開けても大丈夫ですよ」

「な、何これ……?」

千穂の合図で顔から手をどけた梨香は、数瞬間まで床板だった場所に起こった変化を見て目を丸くした。

それは白と青が交互に入り混じる光の泉であった。

目に焼けてささくれだった残る五枚の畳の中に神々しいまでの光の泉が忽然と現れる様は、もう滑稽を通り越してどう表現していいのか分からない。

「鈴木さんも一度、見たことがあるはずですよ。上野で」

「上野……あっ!!」

梨香は何を言われているのか思い当たり、はっとする。

「地獄の門で、鈴木ちゃんが……じゃあ、これって」

「はい」

千穂は少し震える声で頷いた。

「これが、ゲートです。世界と世界を繋ぐ、星の海を越える魔法のトンネル」

かつて真奥と鈴乃が東美と声屋を助けるために上野恩賜公園で開いた、異世界への道。

「行きますよ」

「え」

気がつくとき梨香は、手を取られてそんなことを言われていた。

いつの間にか千穂は、先ほど下ろしたリュックをまた背負い直しており、ついでに梨香のシールドバッグまで担いで、その目は真っ直ぐ登の下の方の奥に向いている。

「え、待って、え？ 行くなって、どこに」

「鈴木さん、乗り物酔いとか平気ですか？ 私、初めてのときは結構厳しかったんで今日は酔い止め持ってきてるんです。よかったら途中で使ってくださいね」

「途中でって、え？ 乗り物？ な、なんの話してるの千穂ちゃん？ 行くなって本当と……」

「行きますよー」

「どこ行くのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

思いがけず強い力で梨香は、気がつけば千穂の手によって光の泉の中に引きずり込まれていた。

床板があるはずの場所は一切の足掛かりの無い底なしの空間で、梨香の全身は空中に放り出されたという恐怖に染まる。

永遠とも思える落下の後の一瞬、目を閉じ全身を緊張させていた梨香は、肩を柔らかく叩く感触に気づいた。

落下した、と思った割には、どこにも着地しない。

でも、落下し続けているような風圧も感じない。

恐る恐る目を開いた梨香が見たのは、これまで写真や映像でなら見たことがあるが、それそのものの全体像を肉眼で見えることは、一般人にはまず不可能であろう光景だった。

「うそ」

地球だった。

青い巨大な惑星が、梨香の目の前にあった。

梨香が、自分は宇宙空間に浮いている、と認識したその景色が急速に離れていく。地球が、月が、太陽の光が遠ざかり、周囲はうねる光のトンネルに様変わりする。

「こっちはです。ついてきてください」

「ち、千穂ちゃん！」

背後から梨香に触れたのは、千穂だった。

リュックと梨香のバッグを担いだ千穂が、梨香に手招きしながら光のトンネルをある方角目がけて進みはじめた。

その後ろ姿は、まるで空を飛んでいるようだった。

千穂は手も足も動かさず、ただ進むべき方角一点を見続けている。

千穂との距離が離れるのを感じた梨香は、慌てて千穂に追いつがろうと思った。

そう思っただけで、梨香の体は自分が空間内で前に進んだという感覚を脳に伝えてきた。

これは夢かと、梨香は思った。

全ては自分が見ている夢で、目が覚めればまた、恵美や戸屋のいる笹塚がある世界に戻るのではないかと思った。

だが、

「万が一のときはこれ、使ってくださいね」

横に並んで飛ぶ千穂が差し出してくるエチケット袋と液体酔い止め薬の瓶の感触は、とても夢とは思えなかったし、夢の無い品々だと思った。

「千穂ちゃんー あの、そんなことよりこれは……!」

梨香はようやく疑問を口に出すが、千穂の答えは混乱を深くするだけだった。

「ここはグートの中です。私達は今、グートが開いた道を飛んでいるんです」

「と、飛んで?」

「少し時間がかかります。私も初めてのときには気持ち悪くなっちゃったんで、そういうときは言ってくださいね」

「時間が? え? きっきのはなんなの? ここはグートって、グートって宇宙にあるの?」

「世界と世界を繋ぐ術ですから。今私達は地球を飛び出して、向かっているんです」

「む、向かつてるってどこに？」

「決まってるじゃないですか」

千穂のにこやかな微笑みをこれほど恐ろしいと思ったことは、梨香は無い。

「私達の大好きな人達がいる世界ですよ」

目覚めた梨香は、かき慣れた匂いに気づいた。

い草だ。畳の匂いだ。

「あれ……私……」

梨香はうつすら目を開けると、視界にはやはり見慣れた畳の目が飛び込んでくる。

「……やっぱ、夢？」

妙な夢を見た。千穂と一緒に、宇宙遊泳をする夢だ。

ヴィラ・ローザ牧場二〇一号室の畳の下に異世界への扉があって、そこに飛び込んで地球を

飛び出した夢だった。

「うーん……ん？」

そのとき梨香は、自分が妙に汗をかいていることに気づいた。

というか、暑い。室内の気温が高い。

「あれ？ 真奥さんちって、暖房……」

寝ぼけ眼の視界がはつきりしてきた梨香は、

「……………っ？」

一気に体中から血の気が引くのを感じた。

自分は畳の上にいる。それは間違いない。

だがそこは、どう見てもヴィラ・ローザ霊塚二〇一号室の畳の上ではなかった。

「え……………えええ？」

大伽藍、という言葉を梨香が知っていたら、そこは丁度そんな空間だった。

どこまでも果てしなく広がる圓い床面。見上げても圓が満ちた天井。古の原生林を思わせる巨大な柱が列を成し、自分のすぐ横手には、ちよつとした小山ほどもある祭壇らしきものの。

梨香の叫びを反響させる石とも煉瓦とも土とも、見た目には分からない素材で形成された広大で荘厳な空間は、ところどころ妙に壊れている。

床面にはよく見ると無数に穴が空き、柱の列の中には手ひどく欠損しているものもある。

古代の遺跡か、神殿かとか表現しようのないところになぜか畳が六枚敷いてあって、自分がそこに寝そべっているという光景はどこからどう見ても訳が分からない。

「あれ？　これって」

驚きから復活もできないままきょろきょろと視線を彷徨さまよわせていると、自分のいる畳六畳分のスペースに、自分以外の物体があることに気がついた。

「これ、真央まへさんちの」

それは、畳並みに見慣れたもの。

使い込まれた安物のカジユアルコタツであった。

「一体……これって……」

「あっ!?」

そのとき、およそ現実感の無い空間に、梨香りか以外の声が響き渡った。

空間が広大すぎてその声がどこから飛んできたかさっぱりとしない梨香が、また視線を四方八方に巡らせると、

遠くからかつんかつんと、硬いものと硬いものが打ちつけられる音が聞こえてきた。

やがてその音は、梨香のよく見知った姿形を取って、息を切らせて目の前に立つ。

「良かった、気がついたのね、梨香」

「恵美……?」

それは、梨香の大切な親友、遊佐恵美であった。

何やら梨香の見たことの無いエスニック調のデザインの服を着ているが、その顔、髪、瞳、

声を聞えるはずがない。

「恵美、ここ……」

「ごめんなさい！ 何も言わずに！」

「わぶ」

恵美は梨香の質問には答えず、泣きそうな顔で梨香に抱きついてきた。

「急だったから、話す時間がなくて。でも梨香には話すために、一度戻ろうと思ってたんだけど、色々こっちで用事が重なって、つい延ばし延ばしになっちゃって……もう年が明けちゃったのよね。本当にごめんなさい！」

「ああ……うん、あの、さ」

梨香は、香る匂いが恵美が好んで使っているシャンプーの残り香だ、などともうでもいいことを考えながら、ぼんやりと尋ねた。

「ここ、どこ？ なんでこんな変なところに、真央さんちのコタツがあんの？」

「……あ、そうよね。梨香、まだ何も知らないのよね！」

すると恵美は慌てたように身を離すと、ぼんと手を打った。

「とりあえず、暑くない？ まずコート脱いで。今は冬なんだけど、緯度が低くて結構気温が高いのよ」

「え？ ああ、うん」

促うながされるままにコートを脱ぐと、籠こっていた熱が解放されて体感温度がひやりと下がる。

「立てる？ あ、とりあえずこれ履はいて。ここ、足元冷えるから」

そう言つて恵美が畳の外に差し出したのは、革らしき素材で作られたスリッパだった。

「あのさ、恵美。私、真奥まおくさんの畳の下に飛び込んだんだけど」

「千穂ちゃんから聞いたわ。ほとんど何も説明せずに無茶な引き込みかたしたんですって？」

「ああ、まあ、うん。あの、これ、夢じゃないよね？」

「どうだろう。でも、私は夢みたいよ」

梨香の手を引いて、大伽藍を横切る恵美は心から嬉しそうな笑顔えんごを浮かべる。

「梨香にはいつか、私の故郷を見てほしいと思つてたから」

「恵美の……故郷？」

やがて二人は、伽藍の端に辿り着く。

そこには壁をくり抜いたような窓があり、そこから見える青色は空の色だと梨香はぼんやりと考へていた。

と考へていた。

「こういうこと言ふと怒る人もいるけど……ここからの景色が多分、一番いい眺めよ」

「はあ」

梨香は促されるままに窓枠に手をかけ、外を覗く。

その横で、恵美が告げた。

「製香。ようこそ、聖十字大陸エンテ・イスラへ」

その聲は、とても高い場所にあった。

抜けるような青空が地平線まで続き、遙か下の足元から伸びる草原は、視界のあらゆるところで森に、道に、沼に、湖にと様相を変え、どこまでも続いている。

空に舞う鳥は日本に存在するはずの無い巨大な猛禽の群れだ。

「……は」

製香は突然と、その光景に見入っていた。

神戸ポートタワーや京都タワーなど比較にならないほどに、地面が遠い。

そしてその地面には、大勢の人間がひしめいているのが見えた。

そして遠すぎるが故の錯覚なのか、明らかに生物的意思図を以て動いているにも関わらず、製香の知る生物とは全く異なる動きをしている有機体らしきものが見えた気がした。

「あの………恵美、今、なんて」

「ん？」



「ここが、どこだった」

「エンテ・イスラ」

「え？」

「エンテ・イスラの中央大陸の中央都市。旧イスラ・ケントゥルム跡ね」

「え？ え？ え？」

「実感湧かない？」

梨香の反応が鈍いことを気にしてか、恵美が尋ねると、梨香は糸が切れた操り人形のように首を一度だけ傾かせた。

「じゃあ、下に下りてみましょうか。歩いて下りてたら一日かかるから、悪いけどここから下りるわね」

「へ？ ここから？ どこに？」

「どこって、地上によ。下にいる人達と話せば、きっと実感湧くわ。失礼するわね」

「え……わっ」

次の瞬間、梨香は恵美の細腕に、横抱きにされていた。

体格が自分と全く変わらないのに、成人女性を軽々と横抱きにする恵美は、今更ながらに異世界の人なのだと実感するが、問題はそんなことではない。

つい最近も、こうやって横抱きにされた後には、とんでもない事態が待ち受けていなかった

だろうか。

「落としはしないけど、一応掴まってる」

「え？　ちょ、恵美？」

「行くわよ」

梨香を抱えた恵美は、たった今梨香が見下ろしていた窓枠に足をかけ、

「ちよっと待って……」

梨香の声は、大空へと溶けていった。

悲鳴すら上げられない。次の瞬間梨香は、見たことも無い空に飛び出していた。

見開いた視界には、ぐんぐん迫ってくる地上。

だが急降下というほどのスピードではない。

遊園地の絶叫マシンよりもずっとゆっくりな速度で恵美が下りている、ということに気づ

いたとき、梨香は見た。

地上をひしめく者達の姿を。

「な」

大勢の人間がいた。様々な形状の鎧や衣類を纏い、人種もバラバラだが、それでも彼らは梨

香の理解に収まる人間だ。

だが、それ以外が違った。

「な、な、な、な」

二足歩行の獸がいた。

小さな家ほどの体軀を誇る巨人がいた。

空を舞うのは、鳥ではなく鳥の形をした人であった。

人間の大人の腰ほどもない者がいた。

子供の頃に聞いた怪談話に登場した、歩く骨格標本がいた。

そして、そんな無数の異形の中で、脚立に上がって大鍋の中に巨大な混ぜ棒を突っ込んで回している、三角巾とエプロン姿の千穂の姿があった。

「ここは魔王城。魔王達が……真奥と真庭と漆原がエンテ・イストラに攻め込む拠点とした、本物の魔王城よ」

「なんじやこりゃあああああああああああああああああああああああああああああああ？」
梨香の絶叫を、恵美は顔を顰めながらも心地良さそうに聞いていた。

地上にいる者達の中で、千穂を含めた何人か（何体か？）が、梨香の絶叫に気づいてこちらを見上げる。

「あっ！ 鈴木さん！」

千穂は恵美と梨香の姿を認めると、大鍋の前の脚立から下りて二人が下り立ってくる地面に駆け寄ってきた。

「現実感が痛む」

梨香はぼんやりと言う。

「だって、話には何度か聞いてたけどさ、聞くのと見るのはそりや違ふさ。ちよつと腰抜けるけど勘弁。はー、エンテ・イスラ。ここが、異世界、はー」

梨香は遠くを見て、最後にこうしめる。

「たまげた」

「リカ・スズキ殿。あなたが、異世界ニホンで勇者エミリアを公私に渡り支えてくださったと伺っております。私は五大大陸連合騎士団を統帥する、ヘイゼル・ルーマックと申します。若輩ながら、將軍職を戴いております。以後、お見知りおきを」

「はあ……」

「貴国のお国柄に合わぬ不調法などあるかと存じますが、勇者エミリアの恩人は、エンテ・イスラ全土の恩人も同じ。ご滞在の間、必要なことはなんなりと我ら連合騎士団にお申しつけください。でき得る限り不自由の無いよう取り計らわせていただきます」

「はあ……」

千穂に続いて、勇者エミリアの大切な友人がやってきた。

そう聞きつけて梨香がとりあえず身を寄せた幕僚の天幕に参じたのは、この場にゐる人間側の勢力を束ねるヘイゼル・ルーマックだった。

挨拶されている梨香はといえば、もの凄く焼びやかな鎧よろいを着た凄く偉い立場にありそうな人が自分に日本語の敬語を使って頭を下げていて、自分は座ったことの無いふかふか高そうな椅子に座って触れるのも恐ろしいほど高そうなティーカップにお茶を淹れてもらっているという状況が、そもそもよく分かっていない。かと思えば、

「ふん、貴様か。マドロナルド・パリスタ・チホ大元帥閣下の友だという人間は」
カマキリが巨大化して人間の姿になったような化物が、千穂に伴われて現れる。

「我が名はフアーファレルロ。魔王軍の将だ。来る戦に向けての準備を、この地で人間共と共に進めている」

「は、はあ」

一度聞いただけではとても覚えられそうにない名の悪魔は、傍らの千穂を見て続ける。

「チホ閣下の友ならば、我らの友でもある。悪魔に人間のような気づかいはできぬが、ゆるりとしていかれるがいい」

「ど、どうも」

どう見てもあの鎧が一振すいりされたら千穂も梨香もまとめて死んでしまいそうな気がしてならないのだが、一度聞いただけでは覚えられない名前の悪魔は、千穂に対して目上の人間に対す

るような敬意を払っているらしい。

「あの、千穂ちゃん、つかぬこと聞くけど」

「はい？」

「マダロナルド・パリスタって、あの」

千穂は梨香とファーフアレロを交互に見て微笑んだ。

「ああ、私の魔界でのニックネームみたいなものです」

「ええ……」

何を説明されても情報が頭の中で混沌として整理されない。

「千穂ちゃん、なんか閣下とか呼ばれてなかった？ やっぱ千穂ちゃん、魔法使いとか超能力者とかだったらすんの？」

「色々あったんですよ」

梨香は泣きそうな顔で千穂と恵美の顔を交互に見上げ、

「色々で済ませていい問題かなあ、これ」

ファーフアレロが去り、その間にも多くの人や悪魔が忙しく歩き回る幕営の中を見回す梨香だが、ふとあることに気づき自分の胸に手を当てた。

「そういえば、さっきの液体柔軟剤みたいな名前って、悪魔なんだよね？」

「ファールさんのことですか？」

「あれ？ もっと長い名前……」

「ニツクネームです。ファーフアレルロだと長いんで」

「悪魔にニツクネーム……ねえ。と、とにかく悪魔なんだよね。なのに私……」

悪魔大元帥アルシエルを目の前にしたときに感じた苦痛を、今は全く感じていないことに察（さ）
香（か）は気づく。

考えてみれば、これだけの数の悪魔がうろついているのだから、周囲には相当量の魔力があるはずなのだが……。

「それはその、怪我（けが）の功名（こうきやう）と言（い）いますか」

千穂（ちほ）は申し訳（わけ）なさそうに説明（せつめい）した。

「ゲートを出た途端（とたん）、私が着地（ちゃくち）のときの注意（ちやうい）を忘れたせいで鈴木（すずき）さん、頭打（かぶうち）って気絶（きせつ）しちゃったんです。それで処置（しちし）を買（か）って出た鈴乃（すずの）さんが、魔力（まくりき）に近づいてもある程度大丈夫なように、聖法（せいぽう）気で防護（ぼうご）措置（そし）を」

その際（さい）も千穂（ちほ）は数々（かずかず）鈴乃（すずの）に怒（いか）られているのだが、それはまた別の話（わたりごと）である。

「その、結界（けいがい）、とかいう？」

「いえ、体（てい）の中の聖法（せいぽう）気を活性化（きふくちか）させて、魔力（まくりき）に対抗（たいかう）するんです。エンテ・イスラは聖法（せいぽう）気が大気（たいき）に満ちていますから、日本（にっぽん）よりもずっと簡単に処置（しちし）できるんです」

「……ダメだ、ぜんっぜん分（わ）からん。持（も）ってないハードで出（で）てる知らないゲームの解説（かいせつ）されて

るみたい」

「とにかく、真奥さんの魔王型クラスが全力出して目の前に現れない限りは、減多なことでは……」

「そうだ！ 真奥さん！」

真奥の名を聞いた途端に梨香が勢い良く立ち上がり、勢いで例のティーカップをサイドテーブルから落としてそうになり、慌ててその場で踏ん張る。

「真奥さんどこのの！ 状況！ そっちの状況説明！ 何か今まで誤分かんなかったけど、状況説明！ ここがエンテ・イスラだってことはよく分かった！ 分かったけど、なんで私連れて来られた？ なんで恵美達こっちに来た？ なんで千穂ちゃん普通にこの環境に溶け込んでるの！ そっち側！ 笹塚側の、アパートの人達の事情実情！ 説明よろしく！」

「えっと……」

「どこから話せばいいか……」

千穂と恵美が顔を合わせたときだった。

「おい、鈴木梨香が来たって？」

三人の顔が、天幕の入り口に向いた。

そこにいるのは、人間の姿をした男だった。

だが、梨香は知っている。

その男は、かつてこの世界を、恵美の故郷を蹂躪しようとした、悪魔の王なのだ。

「真奥……さん」

「おう」

真奥貞夫は、梨香の記憶と変わらぬ、ジーパンとユニシロのシャツという、日本中どこにでもいそうな青年の姿でそこに立っていた。

「ああ、ちーちゃんも、明けましておめでとう」

「はい、明けましておめでとうございませう真奥さん。高屋さんに頼まれてた昆布の佃煮、買ってきてありますからご飯のときに渡しますね」

「恵美……これは本当に現実かい？」

梨香にとって極めて非現実的な場所だ、梨香にとって極めて現実的な会話が交わされてるこの光景は、夢じゃないとしたら一体なんなのだ。

「現実ね。私にとっても信じられない、大切な現実よ」

すると梨香の親友は、楽しげに微笑んだのだった。

巻

「そもそもはエメラダのバカがタリスマスパーティーなんて言い出したのが悪かったんだ」

玉座の間に無理やり並べられた畳の上のカジニアルコタツの前に座って茶碗を左手に千總チソウが買ってきた個煮をつまむ真奥貞夫の姿は、ヴィラ・ローザ館二〇一号室で見ると、全く変わらなかった。

「アラス・ラムスのためって言われりゃ、いくら場所が恵美んちだったって行かないワケにはいかないだろう」

問題はここが本物の魔王城であり、真奥の背後は築六十年の木造アパートの壁ではなく、どこまでも広がる玉座の間、魔王と勇者のかつての決戦の場だということだ。

「だが全員バラバラにアラス・ラムスのプレゼント買ったら、どんな振り方するか分かったもんじゃない。俺は正社員登用研修で忙しかったからプレゼント買いに行く時間も捻出しなきゃいけなかった。だから提案したんだ。いくらアラス・ラムスが大事でも、浴びるほどプレゼントをあげて甘やかすのはよくねえ。アラス・ラムスが欲しい物に絞って、みんなで金を出し合おうってな」

「なるほどね。それは良い判断だと思ふ」

桜ぎの無い浅原はその場合どうするのかという問題があるが、そこを突っ込むのは野暮というものだろう。

「ブレゼントなんて、喜んでもらえりや大ヒット、使ってもらえりやめつけもの。だから心を込めて適当に選べって、木崎さんの教えでな。でも、アラス・ラムスにとっては初めての経験だ。下手にサブライズ狙ってハズしたらお互い落ち込むだろ。だから恵美に、それとなくアラス・ラムスが本当に欲しい物を聞いといってくれて頼んだんだ。そしたら……」

次の日の朝早く、恵美は目に涙をいっぱい溜めて、二〇一号室に飛び込んできた。遅えた真奥連は何事かと混乱したが、恵美は魔王城に上がり込んだまま訳も話さず、とにかく千穂と鈴乃を呼んでほしいと言う。

朝早くではあったが、恵美のただならぬ様子を察した真奥は、何も言わずに千穂と鈴乃を呼び出した。

二人とも恵美の様子を聞くと、何も言わずに二〇一号室に集まってくれた。

前の晩、恵美はそれとなく、アラス・ラムスに、欲しい物がないかどうか聞いたのだ。

アラス・ラムスはコーンスープが好きだった。

恵美の影響で、カレーも好きだった。

リラックス熊も好きだったし、小さな動物やおもちややぬいぐるみも大好きだった。

だが、アラス・ラムスが望んだのは、そのどれでもなかった。

「アラス・ラムスは……みんなに、会いたいって言ったの」

恵美は取り乱し、しゃくり上げながら言った。

「最初、なんのことだか分からなかった。魔王のことなのか、千穂ちゃんのことなのか、ベルのことなのか……でも、そうじゃなかった」

全員がある予感にかられ、息を呑む。

「マルクト達に、会いたいって。他に欲しい物、無いつて」

誰もが、恵美にかける言葉を失った。

アラス・ラムスにどんなプレゼントを買ってあげればいいか、そんな浮かれた気分を、恵美の涙は粉々に吹き飛ばしてしまった。

「魔王、みんな、私、バカだった。この子は、この子はずっと前から、ずっとアシエスと、イルオンと、会いたがってた。なのに、そのことから目を背けてた、耳を塞いでた。ねえ、私バカだった」

顕現していないアラス・ラムスを掻き握くように、恵美は自分の胸を抱くようにして蹲ってしまった。

「私………自分のことばかりだった」

無限とも思える時間が流れた。

実際には、たった数十秒。

だが、その数十秒は、二〇一号室に集う者達の心のありようを変えてしまうのに、十分すぎる時間だった。

「ねえ……魔王」

恵美は、涙も拭わずに真奥を見上げた。

「私、行っていていい？」

「……っ！」

真奥は息を呑んだ。

何故自分に許可を求めるのか。何故、それを自分に言うのか。

「エンテ・イスラなんか知らない。人類の危機なんか、どうでもいい。でも私、この子のことだけは、心から大切だから、放っておけないから」

アラス・ラムスがイエソドの矢片だとか、聖剣と融合しているとかが、そんなことはどうでもいいのだ。

「この子は、私の……」

「あああああああ畜生！！！！」

真奥はその瞬間吠えた。

これ以上、恵美に強白を許すわけにはいかない。

恵美に、この場の全員の罪を背負わせるわけにはいかない。

それだけは、あつてはならない。

真典はがりがり頭を掻き、

「声屋ー」

「は、はいー」

「漆原ー」

「うん」

「ちーちゃんー」

「はい……」

「鈴乃ー」

「ああ」

「……恵美」

「……魔王」

恵美の顔を上げさせると、その目を真っ直ぐ見て、言った。

「俺達みー……んな、自分勝手な大馬鹿だった！ それでいいな！」

真典の言葉に反論する者は、誰一人いなかった。

「セフィラとセフィロトの話は、いつだか昔屋が捕まったときに話したよな。ライラとガブリエルが俺達に倒させたい奴らは、アラス・ラムスの家族を人質に取ってるんだ。アラス・ラムスはそいつらに会えないのが寂しくて仕方ない。なら、俺達がやることは一つだ」

真奥は一杯の米と、佃煮と、インスタントみそ汁を食べ終わると、空の食器をコタツに置いて手を合わせた。

「アラス・ラムスとそいつらを会わせてやる。娘の大事な……友達？ 兄弟姉妹？ いとこ？ 厳密な関係はよく分かんねえけど、そいつらを粗末に扱ってる大人をぶん殴りに行く。ついでにイダノラをぶっ飛ばすとライラが俺らにやらせたいことが達成されるらしいけどそんなの知ったことじゃねえ。アラス・ラムスより優先すべきことなんか、俺達には無い」

空になった茶碗を見ながらしばらくして、梨香は小さく微笑んだ。

全てに、合点が行ったからだ。

「全部をひっくり返すたった一言、か」

「ん？」

「千穂ちゃんが言ってたんだよ。日本で生活するために努力してた恵美や真奥さん達が、一発で考えを変えた一言があったって」

梨香は大きく頷いて、朝食を終えた真奥と、玉座の間を見回した。

「冗談みたいな六畳一間だね、こりゃ」

「いいだろ？　これが俺の魔王城だ。正確には、俺のオリジナルじゃないんだがな」

「そうなの？　なんか首都高を作り直したとかいう話聞いたから、てっきり真奥さんが建てたのかと思っただのに」

梨香がそう言うのと、真奥は首を横に振る。

「外側は俺が作ったが、中身はずっと昔から魔界にあったものなんだ。そのずっと昔ってのが、恐らくガブリエルが言った、大魔王サタン……つまりはサタナエルが魔界に下りてきたときなんだ」

真奥は食器を重ねると、昼から出て例の窓に向かい、梨香もそれに続く。

「天界の連中が今の月に根を下ろせたのは、元の星の月面入植都市ごと落ち着いたからだっていうのは聞いたか？」

「うん、聞いたんですけど」

梨香は頷きながら、窓から見える空を見上げる。

そこにはばかりと一つ、真昼の月が浮かんでいた。

「イダノラ達は母星を離れてからしばらくして、カイエルとシェキナから得られたサンプルを基に人間を不老不死にする技術を作り出した。とりあえず段階的に施術をして、データを取りつつ新たに人が住める星を探そうってことになった」

「随分悠長な話だね。私なんか東京に出てきたとき、アパート五軒見ただけでへとへとにな

った記憶があるのに」

「一日で見たなら五軒は見すぎだろ。どこがどう良いか分からなくならねえか？」

真実の極めて普通の返しに、聖者は満足げに頷いた。

「とにかく、奴らは最終的にあそこに落ち着いた。第二のカイエルとシェキーナに襲われないためにエンテ・イスラのセフィロトを支配しようとした。だがサタナエルは、もう一度楽園を作り直そうとするイダノラと反目した。元々サタナエルは落ち着ける場所を見つけたら、全員の不老不死を解いて清浄な大地で人間として暮らそうとしていたんだ。だが人間の愚かさをまじまじと見てしまったイダノラ達は、そうは思わなかった。当時まだセフィロトが選定したてだったエンテ・イスラの人類を、自分達の力で理想郷に導こうとしたんだ。サタナエルとライラと一部の天使は大反対したが、大勢はイダノラ側にあつた。何故が分かるか？」

「……さあ」

「不老不死になつたって、命は惜しいんだ。いつまでも病氣も餓死もせずに生きていられる体を好んで捨てたい奴はいなかったんだよ。だからサタナエルは、息子のルシフェルと、イダノラの不老不死の技術ベースになつてゐるセフィラ・イエソドを奪つて逃げた。新しい星の人類に、不老不死の悪夢を拡大させないためにな」

「イエソド……アラス・ラムスちやんと、アシエスちやんってことだね？」

「ああ。イダノラの研究のベースは、奴らの星のイエソドから生まれたカイエルとシェキーナ

だった。ならばこの星の不老不死研究のベースにこの星のイエソドとマルクトを使うのは自然なことだ」

「ファンタジー世界の現実化に暴乱してる頭には、難しすぎる話だね」

「そうかもな。……一度下に下りるぞ」

「ん、お手柔らかに」

梨香は、真奥に負ぶさるようにして、またとんでもない高さの窓から地上へと下りていく。なんのためかといえば、食べ終わった食器を洗うためのだからもう笑うしかない。

悪魔の王が食器を洗うために水場に向かう間、梨香はようやく落ち着いてきた気持ちで、改めてこの幕宮を見回した。

屹立する魔王城の麓に展開されたこの幕宮は、梨香も挨拶をしたヘイゼル・ルーマック將軍と、マンプランケ筆頭頭領格フリーファレルロの合謀刺で動いているという。

実際に数年前は殺し合いを繰り広げていた悪魔と人間の橋渡しを務めたのは、先日の大混乱で再び悪魔に支配された東大陸の八市騎士団と、芦屋であった。

部隊の編成にあたってはエメラダ、鈴乃、そして漆原とライラと、さらには千穂までが先頭に立って指揮を執っているらしい。

この集団の表向きの目的は「魔王城の解体」。そして「残存悪魔の討滅に見せかけた魔界への吸収」。つまりは侵略の裏路を消し、敗残兵を故国へ帰還させる戦後処理だ。

今この場にいる悪魔は、ファーファレルロが率いる一部の悪魔を除けば、大半は真奥連が率いた最初のエンテ・イスラ侵攻軍の生き残りであるらしい。

計画の概要はトップシークレットで、真奥が悪魔型でなく人間型で活動しているのも、魔王サタンは勇者エミリアに討伐されたことにしておいた方が情報が漏洩した際の混乱が少なく済むためだ。

「サタナエルは入植都市を割って出ようとした。だが、イダノラもカマエルも、他の連中もそれを許さなかった。それどころかサタナエル連の行動を、人類の愚かき一端だとして糾弾した。自分達は勝手に他所の星で人類を『導いてあげよう』なんて言ってるくせしてな」

「当時のエンテ・イスラの人達は、それについて何も気づかなかったの？」

「無茶言うなよ。当時のエンテ・イスラなんて日本で言えば世界中が縄文時代とかそんなレベルだぞ」

「あ、そっか、天界の人達って凄く寿命長い人達なんだっけ。もうスケールがデカすぎて訳分らないわ」

「もう少しで終わるから後でノートに書き写してしっかり復習しろよ。テストに出るぞ」

真奥は喋る間も水場で食器をきちんと洗って水切りをして、所定の場所に片付けた。

「セフィラは助けるべき人類を選定する。だが、生存競争に負けた別の人類も、まだ絶滅してたわけじゃなかった。イダノラ達はセフィラに選ばれなかった奴らを使って、とんでもないこ

としやがった」

「……とんでもないこと？」

「ああ。セフィラに選ばれなかった人類を遺伝子改造して、サタナエルにイエソドが盗まれた後の研究で生まれた不老不死技術の実験台にしやがった」

「じ、人体実験ってこと？」

「まあな。そりやライラもサタナエルもキレるわな。遂に徹底抗戦ってことになったわけだが、人体実験された奴らにだって、生き残る意志があつた。奴らもセフィロトに選ばれなかっただけで、ちゃんと人類だったんだ。改造された全員が、イダノラ達の命令を素直に聞いたわけじゃなかった。サタナエルはそういった連中を取り込むことで、手勢を増やしていった。そいつらを守りなかつたってのもあつたらしいな」

このとき梨香は、真奥が「そいつら」と呼ぶとき、ひどく穏やかな顔をしていることに気がついた。

そしてその視線の先には必ずあの異形の生き物達、悪魔がいることにも。

「ま、持って、真奥さん持って。まさか、まさかその人体実験されちゃった、セフィラに選ばれなかった人類って……」

「イエソドを失い後退してしまった不老不死の技術のベースとなる遺伝子サンプルはシェキーナ、つまりセフィラ・マルクトだった。物質を司るセフィラだからなのか、そいつらは、不完

余な不老不死を願えつけられて、飯を食わなくても死なない体になり、寿命が半端に伸びたと共に、様々な肉体的変質を見せた。角が生えたり、翼が生えたり、尻尾が生えたり………心臓に貯えられるエネルギーが、聖法氣ではなくなってしまうたり」

真典は梨香の想像を肯定するように、少し遠くで千穂が煮込んだスーポの鍋に並んでいる大型の同僚達を指さした。

「俺達悪魔は、どうやら元々『人類』だったらしいぜ。今のエンテ・イスラで栄えてる連中とは別の系統のな」

「ふわぁ」

梨香は、とんだ創世記を聞かされてあくびのような間抜けな声を上げてしまったものだ。

「その話……」

「萬屋 津原はもちろん、恵美とちーちゃん和鈴乃。それにエメラダとアルバート。恵美の親父とアシエスとイルオーン、天祥さんに大家さん。それにこの計画を遂行する都合上、フアーファレルロとルーマックと主だった連合騎士共、それにエメラダ配下のセント・アイレの法術監理院の一部の法術士共が知ってる。それとここにはいないが、魔界で俺の名代として悪魔達を統治してるジジイがいて、そいつにも知らせておいた。んで、今お前が知った」

「その中では私が一番、知ったところでなんの意味も無い存在だね」

「何言ってるんだ。歴史ってのはお前みたいな、問題の中心から一歩離れたところにいる観察者

が語り継いでくものなんだぞ」

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、歴史が乱れたときの一個人の感想や声なんてのは埋もれがちにならない？」

梨香はそう言つて、まじまじと真奥を観察した。

今更改めて確認するまでもないことだが、目の前にいる「真奥貞夫」という人間の姿は、梨香のよく知る「人間」と全く変わらない。

元々魔力を失った結果この姿を得たという話は梨香にも既知のことではあったが、そうなる
とこの「人間の姿」が悪魔という生命体の核になっているという想像が働く。

だがそうなると、ある別の疑問が湧いてくる。

むしろ真奥は、その疑問を持っていないのだろうか。

「でもさー、セフィロトやセフィラは、なんのために人類を遠く好みするんだらうね」

「ん？」

真奥は洗った食器の水気を切りながら梨香の自然な言葉を聞くともしに聞いていた。

梨香は梨香で、自分が言うことにそれほど大きな意味を持っているとも思わず、速くで立ち
動くエフサハーン出身の八巾の騎士を眺めながら言った。

「だってさ、連合騎士の人達と今の真奥さんとか声懸さんって、見た目は全然変わらないから
さ。今の話を聞くと、真奥さん達は「選ばれなかった人類」の子孫って言えるわけじゃん。で

もセフィロトには今のエンテ・イスラの人達を選ぶ理由があったんでしょ？　どういう基準で選んでるのか、そもそもなんで一つだけ選んで助ける必要があるのかなーって」

「んー……」

真奥は生返事のように言うが、思わず水を切る手が止まる。

「……何か、あいつらにしか分からない理由があるんだろ。それこそ神のみぞ知るって感じじゃねえか？」

「ふうん。まあ、真奥さんがどうこう言ったって、あつちはとても似ても似つかないしねえ。

何か違いがあるんだろうね、それこそDNA的なところとかで」

梨香が視線を移した先には、如何にも「悪魔」といった感じの異形の生物達の集まりがあった、梨香は一人で納得した。

「そういえば、イダノラに人体実験された悪魔が、今はどうして魔界にいるの？　なんと言うか、捕虜みたいなもんだったんでしょ？」

「あ、ああ」

一方魚の骨が喉に仕えているような奇妙なしかめっ面をしていた真奥も、その骨をとりあえず放置することにしたのか、話の筋を戻すついでに水を切った食器も所定の什器置き場へと戻した。

「ええとだな、サタナエルは悪魔の原型を生み出したイダノラの狂気に絶望して、本格的に都

市を割って出た。戦術的に高度な編成が可能な戦力は、まだまだイグノラ達の方が強かったから距離を取る必要があった。サタナエルは悪魔達を保護し、数少ない同調した天使達を率いてイグノラから離れた場所で軍を作る必要があった。そうしてサタナエルは、魔界を生み出した。文字通り月を割ってな。一体地上にどんな影響が出たのか想像もできねえが……まあサタナエルは科学者だったんだから、最適なタイミングってものは測ったんだろうな。今でこそ悪魔が蔓延る荒れ果てた星だが、そのときの魔界はまさに、異星からの侵略者からエンチ・イスラを守る者達の乗る方舟……サタンの方舟だった」

魔王部サタナスアルク。

かつての大魔王サタンの居城。魔界統一事業を自論んだ真奥を含め多くの悪魔の間で古の大魔王の居城と語り継がれていたそここそ、サタナエルが母星の人類都市を割って出た、正真正銘の方舟を渡る方舟だった。

「俺が上洛したとき、サタナエルがイグノラ達と最後に戦ったときの記録が残ってた。初めて見たときは、それが何を意味するのか分かってなかったがな」

真奥は少し首を傾かしむように言った。

「サタナエルはイグノラとの戦いに負けて、命を落とした。サタナエルについた天使達も散り散りになって、もともと未熟な人類だった悪魔達は、魔界中に散るしかなかった。この魔土城は、サタナエル達が遺したサタナスアルクを、そうとは知らずに切り取ったもんでな」

「へい」

「ゲート衛は、一度にかなりの人数を遠くまで輸送できる。だがそれにも限界があるし、俺はゲート術を支える力のある悪魔連も、エンテ・イスラ征服の戦力として使いたかった。だから俺達はこれを使った。今、芦屋と漆原が、魔王城の動力部分の修理をするために悪魔と東大陸の騎士団連中の指揮を執ってる。エメラダの法術監理院の助けも借りてな」

「こ、これ、この城全部が……つまり、宇宙船ってこと？ こんなデカイのが空飛ぶの？」

かつて魔王城は中央大陸最大の都市、イスラ・ケントウラムに忽然と姿を現し一夜にして壊滅させたと言われていたが、それは文字通りの「潰滅」だったのだ。

魔王城は物理的に上からイスラ・ケントウラムを押し潰してこの地に立ち、その後、真奥と一部の悪魔の手で外装が城のように偽装されたのである。

「これくらいの規模がねえと、予定してた戦力を運べなかったからな。だが正直、切り取りはかなりのいい加減だったから、実はもっと魔王都を有効活用すべきだったのかって後悔もしてるんだ。魔王城がもう一度空に上がれるかどうか、まずはアラス・ラムスへのプレゼントを用意できるかどうかの第一歩になる」

「そっか、真奥さん達、アラス・ラムスちゃんにプレゼントするためこっち来たんだっけ」
創世記から話が始まり、スケールが大きすぎてもうなんの話が初めにあったのが、梨香は全く失念していた。

「三つの世界を股に掛け、多くの種族を巻き込んだ壮大な戦いは、たった一人の女の子にプレゼントを贈るためだけに始まるのだ。」

「そうだよ。だから俺達、それに関係しないところでは真面目に戦う気は無い。それに俺、明後日普通に正社員登用研修でシフト入ってるし」

だから、今真実が何を言っただのか、唯我には理解できなかった。

「……………今なんて？」

「え？ だから、明後日俺、年明け最初のシフト入ってるから修業帰るんだって。恵美も明日朝からだから今日の夜には永福町帰るって言ってたぜ。ちーちゃんは基本日帰り。正月松の内になんかに家留守にできねえだろうしな」

「え？ 何？ え？ ごめん言ってる意味分かんない。千穂ちゃん！ 千穂ちゃん！！」

「あ、はーいー！ すいません、ちよつと変わってもらっていいですか？」

梨香に呼ばれたことに気づいた千穂は、大鍋の担当を手近な悪魔に託して、駆け足でこちらにやってくる。

人間の数倍の体軀を誇る恐ろしい外見の悪魔が、女子高生にスーブ鍋の混ぜ棒を押しつけられて大人しうかき混ぜを続行している姿はいっそコミカルであった。

そもそも悪魔は食事を積極的に行う必要が無いのに、この場で料理をしていること自体悪魔本人にとっても意味不明だろう。

「千穂ちゃん!? あんた真奥さんと恵美、マグドのバイト辞めたって言ってなかった?」

「へ? 言ってませんよそんなこと」

言われた千穂の方が驚いて目を丸くしている。

「い、言ってたじゃん。二人がいなくても大丈夫なようにしてたって」

「はい。だから遊佐さんも真奥さんも、マグロナルドとこっちの仕事が被らないように、きちんとシフト揃り合わせてスケジュール調整してるんです」

「……………は」

「グートを使えば大体片道四十十分くらいで笹塚に戻れるんで、真奥さんも遊佐さんも、これからも普通に笹塚でアルバイトしますよ? 回数はこちらと減るかもですけど」

「……………片道、四十十分……あ……そう」

片道四十十分といえば、京王線なら、特急に乗ると新宿から終点の京王八王子まで通り着ける。梨香の住む高田馬場からなら、西武新宿線の急行に乗れば新所沢、東京メトロ東西線に乗れば終点の西船橋に到着するかしらないかというところだ。

尚、東京駅から新幹線に乗ると、東海道新幹線なら熱海には通り着けず小田原まで約四十分。東北新幹線なら栃木県の小山までぎりぎり到着するかどうかである。

「近いのか遠いのか分かんねえよ異世界日記」

梨香は頭を抱えて歸ってしまった。

そんな梨香を尻目に、千穂の手には、あのとき二〇一号室で見た、光り輝く羽ペンが握られていた。

「これを使えば、聖法氣を持ってなくてもグートを開けるんです。もし良かったら後で鈴木さんの分ももらってきますよ。ライラさんがガブリエルさんに言えば作ってもらえますから。使いはエメラダさんから教えてもらえば一時間くらいでコッパめしますし……」

「原チャリじゃないんだからさ！ 何それ！ 何その気軽さ！ 千穂ちゃんあんたアパートで散々言葉少なにもう恵美達には会えないみたいなこと言ってたくせに、なんなのこれ！」

「え？ 私、そんな言い方してました？ ごめんなさい、だって朝早くて少し眠かったし、それに凄く寒かったじゃないですか。つい言葉も少なめになっちゃって、ぶっくらぼうに聞こえてたらごめんなさい……信じられますか真奥さん！ 今日の都内、朝方マイナス二度まで下がったんですよ？ 風邪引くかと思いました」

「マイナス二度は寒いな。その点ここは赤道近くで暖かいからな。着るもん悩むよな」

「呑気か!! 私の涙とシリアス返せ！」

客観的に見れば梨香の言うことに分があるのだが、残念ながら今の千穂と真奥には全く通じない。

「そうだ。原付バイク、乗りたさや貸すぞ？ 初エンテ・イスラだろ？ その辺を散歩したけりやこの前俺と鈴乃がこっちで乗って壊しちゃったのをアルバートが頑張って部品全部掻き集

めてくれたらしいから直して貸してやるよ。マッドでデリバリーに使ってるのと同じのだから安定性いいし、初めてでも転ばないぜ。こっちなら免許とか関係ないし、二台あるからなんなら芦屋に案内させようか。携帯電話の件で世話になったって聞いたしな」

「ここは本当に異世界なのか!! 原チャリがある異世界とかなんなのよおおお!! 私一体どこにいるのよ!! あと今芦屋さんとか勘弁して! これ以上私を混乱させないで!」

「あ?」

「真奥さん、今の鈴木さんに芦屋さんはちょっと」

「お、おう? なんかよく分かんねえけど」

真奥は、梨香と芦屋の間にあつたことを全く知らないのだ。

いつぞやのテレビのときのように、芦屋が梨香の指南でスリムフォンを手に入れた、程度にしか思っていないのだろう。

「なんだか、凄く混乱してるみたいね」

「おう、恵美」

「遊佐さん」

頭を抱えて暴れながら唸る梨香を見て、天幕から出てきた恵美が近づいてきた。

「こんなん混乱しない方がおかしいでしょうが!」

「りあねーちゃ、どしたの?」

しかもその腕にはアラス・ラムスが抱えられていて、梨香はもう笑って良いやら叫んで良いやら。

「ごめんねアラス・ラムスちゃん！ 今おねーちゃんちよつと大切な何かを見失いかけてるのー こんな場合なのにアラス・ラムスちゃんの顔見て、あ、お土産忘れた、とかバカなこと考えてるの。そんな暇なかったのに！」

「……わかんない」

「そーよねー!!」

段々梨香が気の毒になってきた恵美は、アラス・ラムスを真奥に預け、唸る梨香の肩をそつと抱き寄せた。

「ね、こう考えて。私達、ちよつと家庭の事情で、郊外に引っ越したの。その郊外に行くための電車の始発駅が笹塚だと思つて。私、お正月明けたらよほどのことが無い限りは夜寝るときは永福町のマンションに帰るし、ベルも最近はおアパートを長く留守にできないらしいから二〇二号室に帰るわ。千穂ちゃんが出来たときは、おうちまで送らなきゃいけないしね。魔王達は魔王城の修理があるからなかなかそうもいなくて生活に必要なものこっちに持ってきてきちゃったみたいだけど、私達の生活スタイルは、基本的に何も変わらない。ね、見て」

恵美は真つ直ぐ、魔王城を見上げる。

「ここを巨大な六畳一間のアパートだと思えば、納得できない？」

「……無茶ゆーな」

そんな無理すぎる恵美の解説に、それでも製香に、笑顔が戻った。

「無理だよ！全然無理。本当いっつも恵美と真奥さんには驚かされてばかりでもう私悔しいわ。何よ巨大な六畳一間って、笑えんわ。その六畳一間が、宇宙飛ぶんでしょ？ 荒唐無稽すぎて夢かって思ふもん」

「だが残念ながら現実だ。俺達はこの魔土城を使って、天界に攻め込む。ゲートが閉ざされている以上、他に方法は無いからな」

真奥は城の外壁に歩み寄り、小さな手を添える。

「その後のことは……おい、どうする恵美。その後」

「知らないわ。後で考えるわよ」

今の真奥と恵美は、アラス・ラムスのばばとままとして、一つの目的に向かって積極的に協力している。

だが忘れてはならないのは、大多数のエンテ・イスラの民は今回の真奥達の戦いのことを知らずに過ごすし、真奥達が、今魔土城の建つ旧イスラ・ケントゥルム潰滅を含め多くの悲劇を巻き起こした事実は未だに変わらないということだ。

「私はもう勇者じゃない。きつと戦っている最中でも、戦いが終わっても、考えることがあるとすればその次のクリスマスをアラス・ラムスとどう過ごすかくらいでしょうね」

「平和か」

「平和なんですよ、実際」

梨香の突っ込みを、千穂が拾う。

「もう、みんな十分悩んで、眠って、疲れ果てました。そろそろ自分だけのために建設的なこととしても、バチはあたりません」

「……余裕がましてるみたいだけど、今の恵美の言い方、聞きようによってはあれだよ？」
梨香は千穂にある意味警告を送ったつもりだったのだが、千穂から帰ってきたのは闘志のみなきる言葉と顔であった。

「望むところです。私、誰が相手でも負けるつもりありませんから」

「ま、千穂ちゃんがそれならいいけども」

梨香は少しだけ面白くなさそうに口を笑らせた。

「私はなし。そうは言ってももう……」
そのときだった。

「魔王様、少しよろしいですか」

突然姿の無い声原の声（こゑ）が、周辺に響いた。

梨香は顔を真っ赤にしながら身を凍らせて、千穂と恵美と真央は少しだけ視線を上げる。

「どうした、声原」

「実は……おや？　そこに、エミリアと佐々木さん意外に誰がいるのですか？　人間の気配のようですが」

「あー、その、大丈夫だ、話してくれ。なんだ？」

千穂が製香の機で必死の形相をしながら両手でバツ印を送ってくるので、真奥は首を傾げつつも誤魔化した。

「はあ……実は、少しマズいことが分かりまして」

「マズいこと？」

「はい。今のままでは完璧な修理は望めないことが判明しました。駆動系、伝達系、燃料系、あらゆる場所で問題が発生していると漆原が」

「魔力でどうにもならない箇所か」

「いくつか新しい部品を素材から作らなければならない箇所があるそうです。後で漆原からも直接連絡させますが、私のところにはそのような報告が上がっています」

「素材からつつたつたって……元が天界のものなのに、どうすりやいいんだ？　設計図なんて親切なものは残っちゃいないだろう？　そんな壊れるような乱暴なことしたっけか」

「イストラ・ケントゥルムを尻で潰すのは、十分乱暴なことだったと思われます」

真屋の物言いに真奥は落ち込み、それを見た惠美は苦笑するしかない。

「飛ばすだけならなんとかなるかもしれませんが、天界に攻め込むとなると迎撃が予想されま

す。できるだけ不安要素は除去した方が良いかと」

「だからそれをどこで調達するかってのが問題なんだろ」

「一つは確実に、エンテ・イスラの北大陸にある。残りは多分魔界にある」

そこに、漆原の声が入った。

「北大陸と魔界に？」

「うん。魔界の方はカミィオに連絡を取って、探す体制を整えてもらったほうがいい。どこにあるかまでは分からないけど、何が必要かは僕が全部分かる」

「マジか」

いつになく真剣な様子の漆原の口調に、真奥の答える声もつい熱を帯びた。

「なんなんだそりゃ」

「大魔王サタンの遺産、ノア・ギア」

漆原は、強い口調でそう言った。

「ノア・ギア？」

「サタンが……サタナエルがそう呼んでいたんだ。僕が当時のことで覚えてる、数少ないことの一つさ。いつか月に帰るとき、方舟を起動させる鍵になるって」

「なんでそれが魔界にあるって分かるんだ？」

「天界が探してたからさ。イダノラはそれらがサタナスアルタを復活させるのに必要だって分

かってたんじやないかな。一度はガブリエルが僕のところに来たくらいだし」

「ほー。で、なんなんだよそれ」

真奥の間に、漆原は真剣な声で答えた。

「ノートキング。アドラメレキススの魔槍。偽金の魔導。アストラル・ジェムの四つ。バカだよね、サタナエルって。頭文字、取ってみて」

「ん……？ の、あ、ぎ……ああああ？」

子供だましにも程がある。

言葉遊びにすらないっていいない。

だが、意図は明白だった。

ノートキングと魔槍は、それ単体では単なる武器。

魔導は単体では単なる化学式。

アストラル・ジェムは、単体では単なるエネルギーの塊。

一つ一つは驚異的な存在であるが、それでも代わりが利かないものではない。

だが、全てが燃るべき場所に揃ったとき、大魔王の遺産は、方舟を動かす歯車になる。

「つたく、どこまで行っても、大昔の喧嘩に振り回されるわけだな」

「そういうことだね」

「そういうことだねじゃねえよ、お前の親のことだろうが」

「知らないよそんなこと。子供の未来に悪い影響しか及ぼさかった親の責任なんか誰が負うかっての。真央こそ今は人の親なんだから、そんな無責任な親にならないように注意しなよね。それじゃ、伝えることは伝えたから」

概念送受の通信が切れて、再びその場に静寂が戻る。

「今の……つまりまだ、宇宙船は動かないってこと？」

「そういうことだな。探し物が増えたわけだ。貧乏暇なしとはよく言ったもんだ」

真央はごきごきと首の骨を鳴らしながら気の抜けたように言うが、大きく息を吸い、そして吐き出すと、気合を入れて言った。

「恵美、ちーちゃん」

「うん」

「はいっ！」

「来年のクリスマスとは、言わねえぞ」

真央はそう言うのと、腕に抱えたアラス・ラムスの目をしっかりと見た。

「ばば、なあに？」

「誕生日だ」

「う？」

「アラス・ラムス、お前の誕生日までに、終わらせてやる」

「真奥さん、アラス・ラムスちゃんの誕生日って……」

「決まってるだろ」

真奥はにやりと笑って、アラス・ラムスを高々とエンテ・イスラの空に掲げた。

「にーやはー」

訳も分からずたかいたかいに、満悦のアラス・ラムスの生まれる瞬間を、あの日、二〇一
号室に集う全員が見たではないか。

「リミットは夏！ 七月の東京のお盆だ。アラス・ラムス、俺はお前に、最高の誕生日プレゼ
ントを贈ってやるぞ!!」

真奥の力強い決意の声は、二つの昼の月が浮かぶ空に、吸い込まれていった。



作者、あとがく — AND YOU —

人に物を贈ると良いとされる機会が、一年の間には結構あります。

正月の年賀状とお年玉から始まり、二月にはバレンタインデー。そのお返しに当たる三月のホワイトデー。春の間に母の日・子供の日・父の日のハットトリックが決まり、夏場にはお中元。気を抜くことなく九月には敬老の日が襲来した後、晩秋にしばし満ち足りておきながらオトリを飾るのが年末のクリスマスとお歳暮です。

年間通して出沒する誕生日や、夫婦の結婚記念日というのも忘れてはなりません。

さすがにこれらの全ての機会に毎年欠かさず贈り物をしている、という人は少ないはずですが、そのときの自分の立ち位置次第で、この中の半分くらいなら、贈ったり贈られたりしたことがある、という方は多いのではないかと思います。

ですがこの中で、和々原が何を贈り贈られるべきなのか未だによく分からないのが「クリスマスプレゼント」なのです。

大人から子供へのプレゼントは簡単です。

子供が欲しがっているものや、子供に与えたいものを考えればいいのですから、好きなおもちゃや本、教育グッズや最近なら電子機器など色々な選択肢があります。

ですが巷で当然のように行われている「大人から大人へのクリスマスプレゼント」って、何が最適なのか全く分かりません。

母の日のカーネーションやバレンタインデーのチョココレート、ホワイトデーのバレンタインデーと倍換算成いはお菓子類のような、絶対の指標がまず存在しません。

お歳暮やお中元はお世話になっているお礼に諸国名産や相手のご家族の役に立ちそうなものなどを選ぶのが一般的です。

父の日なら「お父さん仕事頑張ってね」。敬老の日なら「いつまでも元気でいてね」という気持ちが始まり先にある、それに付随して物や旅行などをプレゼントすることが多いでしょう。ですが、敬虔なクリスチャンではない人が贈るクリスマスらしいプレゼントって、一体どんなものなんでしょうか。

どうも世の中を眺めると、例えば恋人同士なら男性から女性に宝飾品やバッグなどの小物。女性からは男性がビジネスシーンで使える小物や衣類を贈ることが多いようですが、それが「特にクリスマスでなければいけないものか」と言われると、首を傾げてしまいます。

ならば「クリスマス限定デザイン」のものならいいじゃないか、という向きもあるかもしれませんが、クリスマス限定デザインって当然ですが冬仕様なので通年で使えるものではありませんし、冬分翌年には全く別の限定デザインがあることでしょう。

だからって恋人とのクリスマスデートでクリスマスツリーや七面鳥の丸焼きやホールケーキ

をメインプレゼントとして持参するのは絶対にやめた方がいいことくらいは分かります。

本来クリスマスは、誕生日のように特定の相手を祝うのでも、母の日や父の日やバレンタインデーのような自分の気持ちを伝える日でもないはずですが、気がつけば今の日本ではそれら全ての機能を搭載されてしまった、過剰な期待をかけられた日のような気がします。

時折、クリスマスは、その年、気持ちや物を贈るはずの機会を逃した人の、予備日なのではないかと思うことがあります。

父の日に出張で家にいなかったお父さんやスケジュールが合わずに誕生日を祝えなかった恋人、やむを得ず欠礼した親戚や友人と共に過ごし、かつ年末年始と違い祝日仕様に縛られない最後のチャンスなのではないでしょうか。

まあ大抵の場合、機会を逃したらその近くで埋め合わせをしているんですが、それでももし今後クリスマスプレゼントに悩むことがあったら、贈りたい相手に対して今年何をしてあげられなかったかを考えると、答えは出てくるのかもしれないですね。

本書「はたらく魔王さま! 15」は、そんな様々な思惑が凝縮されたクリスマスに、より複雑な思いをぶつける連中の物語です。

贈り物はまずは心が命。

何も物品や経済的価値のあるものだけが贈り物ではない！

あと、クリスマスで世の中頑張ってるんだから、頼むから、頼むから近年めきめきと頭角を現しているお祭りイベント「ハロウィン」に、過剰に贈り物を贈り合う習慣が生まれてくれるなど強く願いつつ、また次巻でお会いできればと思います。

それではまた！！

●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま！」

（魔界文庫）

「はたらく魔王さま！2」

（同）

「はたらく魔王さま！3」

（同）

「はたらく魔王さま！4」

（同）

「はたらく魔王さま！5」

（同）

「はたらく魔王さま！6」

（同）

「はたらく魔王さま！7」

（同）

「はたらく魔王さま！8」

（同）

「はたらく魔王さま！9」

（同）

「はたらく魔王さま！10」

（同）

「はたらく魔王さま！11」

（同）

「はたらく魔王さま！12」

（同）

「はたらく魔王さま！13」

（同）

「はたらく魔王さま！14」

（同）

「はたらく魔王さま！15」

（同）

「はたらく魔王さま！0」

（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

<http://dengekibunko.jp/>

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和＋原聡司先生」係

「029 先生」係

本書は書き下ろしです。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

はたらく魔王さま!15

わがままとし
和ヶ原聡司

発行 2016年2月10日 初版発行

発行者 塚田正晃
発行所 株式会社KADOKAWA
〒103-6177 東京都千代田区富士見 2-13-3
プロデュース アスキー・メディアワークス
〒103-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19
03-6216-8299 (編集)
03-3238-1854 (営業)
調丁者 豪産局 (META+MANIERA)
印刷 株式会社鹿印刷
装本 株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の頒布及び配付は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行流通などの第三者に譲渡して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※既刊・既丁本は取替り禁止いたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークス お問い合わせ窓口までにお送りください。

送付小社負担にてお取り替いたします。

但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えてできません。

※定価はカバーに表示してあります。

©2016 SATOSHI WAGAHARA

ISBN978-4-04-865750-1 C0193 Printed in Japan

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times, Changing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦